

紅河平原とメコン・ドンナイ川平原の
考古学的研究

(本文編)

東京大学大学院人文社会研究科
2006年度提出博士論文

西村 昌也

紅河平原とメコン・ドンナイ川平原の考古学的研究

目次

| | | |
|------|---|-------|
| 第1章 | はじめに | 2 頁 |
| 第2章 | 紅河平原域とメコン・ドンナイ平原域の地理的・地質的特徴 | 7 頁 |
| 第3章 | 紅河平原と周辺域の先史編年の整理 | 15 頁 |
| 第4章 | 紀元1000年紀に関する編年枠設定のための基礎的認識 | 33 頁 |
| 第5章 | 紀元2000年紀の紅河平原域無釉陶器編年 | 36 頁 |
| 第6章 | メコン・ドンナイ平原域とその周辺における紀元前2000年～1000年紀の 土器編年 | 81 頁 |
| 第7章 | 紅河平原域の集落分布変遷とその背景 | 134 頁 |
| 第8章 | メコン・ドンナイ平原域の集落分布変遷とその背景 | 147 頁 |
| 第9章 | 北部ヴェトナム後期新石器時代の生業基盤変容について ：農耕社会成立過程に関する基礎的理解 | 154 頁 |
| 第10章 | 紅河平原後期新石器時代から青銅器時代前期にかけての石器から青銅器への置換 について：マンバック遺跡とダイチャック遺跡出土資料を中心に | 165 頁 |
| 第11章 | メコン・ドンナイ川平原域における重層マウンド遺跡 とその土器群に関する考察 | 185 頁 |
| 第12章 | 紅河平原域の紀元後1000年紀の城郭遺跡の問題 | 197 頁 |
| 第13章 | ヴェトナム村落の形成：ナムディン省バッコック集落と周辺域の 考古学調査から | 215 頁 |
| 第14章 | キムラン研究：川べり手工業専業集落の考古学・歴史地理学からの理解 | 231 頁 |
| 第15章 | 北部ヴェトナム銅鼓をめぐる地域史・民族史的視点からの理解 | 244 頁 |
| 第16章 | 紅河平原における輪中型堤防形成に関する試論 | 262 頁 |
| 第17章 | おわりに：紅河平原とメコン・ドンナイ川平原と周辺域の 地域形成について | 276 頁 |
| | 本論作成にあたってお世話になった方々へ | 285 頁 |
| | 参考文献 | 288 頁 |

第1章 はじめに

A はじめに

ヴェトナムは南シナ海に面した南北に細長い国土で、面積約32万km²を有している。西に中国雲南省、ラオス、カンボジアが隣接し、北には中国広西壮族自治区を隣接し、海を東に越えると中国海南島、フィリピンが控えている。この南北に長い国土には2つの穀倉地帯、紅河下流域とメコン河下流域とその周辺地帯があり、8000万人を超える人口を養う基礎体力を提供している。

紅河平原は、キン族（現在のヴェトナム人の90%以上を占める民族）を含むヴェト・ムオン緒族やタイ系緒族の居住の場となり、ドンソン時代から現在に至るまで、周辺地域と連動して、国家興亡の舞台であり続けた地域である。

メコン平原は初期歴史時代において扶南の国家形成の場となり、その後クメール王国、そして、華僑系のハティエン王国の一地域となり、さらには広南阮氏の拠点、初期阮朝の南の中心となり、南ヴェトナム共和国を経て、現在にいたっている。北部のように、一貫して国家興亡の舞台とはなっていないが、各王朝、国家がしのぎを削った地域であることには間違いない。

この両地域は、様々な意味において共通するものとしめないものがある。共通するのは、両地域とも、紀元前2000年紀より安定した農耕定住社会が成立していたと考えられ（西村 1994、Bùi P.D. et al 1997）、水稻生産と人口集中の2点において、現代ヴェトナムの中心域となっている。共通しないことの典型例は、政治的中心の歴史である。紅河下流域の場合、わずかな断続期を挟みつつも、ハノイとその周辺がその位置を占め続けているが、メコン川下流域の場合は、そのような連続性は認められない。また、紅河下流域は、農耕地開拓により未開発地域がないほどに居住・農耕が行われているのに対し、メコン下流域には19世紀段階で、未開拓・未居住の地が多く残されていたことも、大きな違いである。

ではこうした共通点と非共通点はなぜ生じたのだろうか。

紅河下流域などの北部の平野部を俯瞰すると歴史・文化的視点からいくつかの疑問が湧いてくる。平野部はキン族が主人公の居住域であるが、周囲の山間部にはキン族はほとんど居住せず、ムオン族やタイ系緒族の居住域となっている。そうした棲み分けの居住域の違いはなぜ生じたのであろうか。さらに、ヴェトナムは北に中国を接し、過去に何度か中国に服属した時代（北属時代など）を経験している。しかし、周囲の広西壮族自治区、雲南、海南島などは漢族居住域でなく、独立国などを形成した地域にもかかわらず、最終的には中国に服属してしまった地域であるが、ヴェトナムがそうならなかったのは何が原因であろうか。

こうした大きな問いに答えるのは、筆者の研究だけでは無理であろう。しかし、少なくとも、こうした問いに答えられることを目指した考古学研究があってもいいのではないだろうか。東南アジア考古学の場合、考古学のデータ蓄積量の薄さも手伝って、それぞれの地域の歴史・文化的事象や特徴を説明あるいは理解するための考古学の成長が欠けている。むしろ、その状況を利用して民族考古学的研究が盛んな地域なのであるが、それらは人類史解釈のための方向で行われていることが多く、地域

理解に繋がっていないものが多い。この原因は、ひとつにはその地域に根ざした研究が少ないことによる。フィールドを単に考古学の調査地として捉えたなら、その地域を考古学の面以外から捉える理解が進まないのは当然である。そうしたことが学部学生以来、気にかかり、それでいいのかという疑問が頭にこびりついていてた。いろいろ試行錯誤はしたが、結局私自身は、方法論的には考古学を基盤にした研究であるが、他分野のヴェトナム研究も学際的に参照し、地域理解つまり地域研究を目標（ディシプリンではなく）としたものが自分の理想的研究と考えるに到った。

B 研究の展開・方法について

考古学的研究を展開するにあたって、比較研究を可能にするため、時間軸の基礎となる編年体系をしっかり理解しておく必要がある。そのためには、両地域を同じ視点で通時的に分析していく必要がある。ただし、土器編年は東南アジア考古学のなかで最も進展の遅い分野の一つである。そこで、自らの発掘資料や調査資料をできるだけ多く用いて、編年案設立に努めた。南部先史編年や北部の2000年紀の無釉陶器編年はその結果である。ただ、一つ言い訳をしておかねばならないのは、断片的資料のつなぎ合わせになることが多く、土器の全器形や全文様に基づく体系的な型式変遷提出には到っていないところが多いことである。

ただ一つ残念なのは、メコン下流域とその周辺の紀元後1000年紀の編年整備に関して、論述できなかったことである。この編年作業に関しては、既に取り組んでおり、その結果も一部発表している（Nishimura 2004a,b, Nishimura et al. 2006）。しかし、まだ全体を論じるほど十分な資料が揃っておらず、今回は触れないでおくことにした。

そして、編年観に基づき、遺跡あるいは集落単位の研究とより面的な空間での変遷傾向把握を重視した分布研究の2つを展開した。これは空間的にミクロとマクロの両方からの理解を深めるためのものである。前者は遺跡あるいは現集落の形成史を理解し、その構造把握に努めるものである。具体的には第10章、第11章、第13章、第14章の研究がこれに相応する。後者は、筆者の関心対象域を俯瞰して理解するためのもので、第7章、第8章、第9章、第12章、第15章、第16章の研究がそれに相応する。もちろん両2者の方法論は相補うものであり、正確には第11章、第12章、第15章、第16章では両方の方法論が応用されている。

遺跡、現集落研究、分布論研究ともに集落形成や居住の問題が主たる関心の対象となっている。これは、居住形態や集落形を理解することにより、それらが作り出す人間集団の特性や文化的背景を理解する大きな鍵になるという考えに基づくものである。残念なのは南部メコン・ドンナイ平原では北部ほど研究（考古学界ならびに筆者自身）の厚みがなく、北部との比較参照研究をまとまって出せなかったことである。ただし、言い訳めいているが、北部で行った現集落の考古学的歴史地理的研究（第13章、第14章）、銅鼓分布論（第15章）や堤防史研究（第16章）は、それぞれ、北部ほど長期間居住を行った集落がないこと、銅鼓の出土数が非常に少ないこと、堤防が形成されていないことが理由となり、まとまった研究にはならないのが現状である。

ただ、そうした理由自体が南部と北部の平原部の比較要素になると考え、また、北部の性格を明らかにすれば南部の理解にあたっての方法も明らかにできるであろうと考え、全体としてはバランスに

は欠くが、あえて掲載に踏み切った次第である。

C 論文作成にあたって

留意したこと、苦心したこと等を述べておきたい。

わたし自身の希望からすれば、考古学的方法に基づいて、土地の匂いのする、そしてその土地の理解に役立つような研究をしてみたかった。しかし、日本と比較するまでもなく東南アジア考古学のデータの厚みは嘆かわしいほど薄い。その中でももっとも発掘調査がよく行われ、ある程度編年の枠組みが存在するヴェトナムでも、すこしでも具体的議論に踏み込もうするとデータの乏しさに足をすくわれてしまう。なにはともあれデータがなければどんな立派な仮説・議論も成立しない。量的乏しさ、さらには公開データの乏しさの両問題が東南アジア考古学発展の大きな足枷である。ゆえに、自身でデータを積み重ねることに腐心し、かなり時間を費やしている。本論作成に時間がかかった理由のひとつである。しかし、自身が関わった発掘調査に関しては、すでにいくつかの遺跡に関しては英語やヴェトナム語で概報や報告書等を書いてあるものもあるし、印刷準備段階のものもあり、それらは、当論文とは重複する部分もあるが、基本的には別個のものである。それは、調査自体は私自身の力のみで実現したものではなく、そこに参加した人の合力の結晶であり、それを私自身の論文として公表するのは潔しとするものではない。従って、それぞれの調査から発展した形で、特定の問題に関して考察を深めたものにしたい。論文執筆に時間がかかった主たる理由でもある。

また、図版の質の貧しさ（量、正確さ、出版の質など）も、東南アジア考古学の大きな問題点である。自ら図版を描き、トレース、版下化する研究者は非常に少なく、この問題を認識している人は非常に少ない。本論では、条件が可能とする限り、私自身が描いた図版、実測指導した図版を使用している。地図に関しても、できるだけ正確な地形図を原図として、直接利用あるいはトレース図版化して利用している。このあたり、他の人文科学との投下労働量の決定的違いを感じる。当たり前のことであるが、考古学の場合、図版の質も評価基準の一つである。また、本論の作成は図版などの資料がアナログ情報をデジタル情報に変換していく途上に行ったもので、その変換が完全に統一されていない場合がある。この作業は膨大な時間と労力を必要とするもので、ばらつきのある字面や図面等に関してはご寛容を願いたい。

本論文の叙述は日本語で行っている。ただし、いくつかの章の主要部分は英語やヴェトナム語で書いたものを日本語に書き直したものである。この作業は私にとって辛いものであった。自分の外国語を自分の母語に訳し直すことほど、消耗するものはない。もちろん訳出にあたって、改訂・補足した部分もあり、さらなる時間投資も必要であった。外国考古学の宿命とはいえ、執筆言語の問題は東南アジア考古学の大きな課題である。現時点では、この実際的问题を実質的に認識している人は、東南アジア人、欧米人、日本人を含めて、極めて少なすぎると言わざるをえない。

D 本論での地名・遺跡名・遺物表記ならびに資料来源について

地名表記は、初出の場合、ヴェトナム語とカタカナ語読みを併記し、2回目以降はカタカナのみとする。但し、銅鼓名に付された地名は、それ自体が遺物名的な固有呼称になっているため、そのままヴェトナム語表記を使っている。

現在の地名は原則としてカタカナ表記とし、日本の行政村や町程度の規模に相当する社（xã）には末尾に社を付し、社の下位行政単位で村（thôn）が存在するところのみ、地名（カタカナ表記）の後に村を付した。また村（thôn）、がなく社の下位単位がソム（xóm）の場合は、地名の前にソムを付した。例えばナムディン省のバクコック周辺ではthônは使われておらず、xãの下の子集落単位はソム（xóm）である。

また、社会主義革命以前の地名表記は漢字名を用いる。それから、行論を通じて、「村落」という言葉は、ヴェトナム集落の性格を正確に表す用語ではないので、意図的に使用せず、「集落」に統一してある。

遺物図面に付された記号については、以下のように理解されたい。

例 ĐK1-L3-C3-211は、Đa Kai1地点-レヴェル3-グリッドC3-遺物番号

AS97-L3-2-234は、An Son1997年発掘地点-L3-2層-遺物番号

本論の言及では、通しで遺物番号が付されている場合は、（遺跡地点名-遺物番号）に略して、言及しているが、層区別などを行わないと区別ができない場合は、層やグリッド情報も付して言及している。

なお、資料来源が言及されていない遺物図面は、筆者により、あるいは筆者の指導・管理のもとで実測・トレースされた図面である。来源明記さえしっかりしてもらえば、自由に他研究・論文に使って頂いて構わない。

E 既発表論文との対応関係

2章A節、B節：「紅河平原の遺跡分布パターンの変化に関する考察」のA節”紅河平原の区分、地勢と形成史に関する覚え書き”『ヴェトナム紅河平原遺跡データ集』文部省科学研究費成果報告書:267-271（2003年）を加筆・修正

2章C節：書き下ろし。

3章：「紅河平原の遺跡分布パターンの変化に関する考察」のB節“考古学的編年の整理”『ヴェトナム紅河平原遺跡データ集』文部省科学研究費成果報告書:271-279（2003年）とChronological framework from the Palaeolithic to Iron Age in the Red River Plain and the surrounding. In *Prehistoric archaeology in South China and Southeast Asia*. Beijing.（2006年）を大幅加筆修正。

4章：「紅河平原の遺跡分布パターンの変化に関する考察」のB節“考古学的編年の整理”『ヴェトナム紅河平原遺跡データ集』文部省科学研究費成果報告書:279-281（2003年）。

5章：書き下ろし。

6章A節：Chronology of the Neolithic Age in the southern Vietnam. *Journall of Southeast Asian Archaeology*, No.22を大幅加筆・修正（2002年）。

6章B節：Chronology of the Metal Age in the southern Vietnam. *Journall of Southeast Asian Archaeology*, No. 25:105-147（2005年）を大幅加筆・修正。

7章：「紅河平原の遺跡分布パターンの変化に関する考察」『ヴェトナム紅河平原遺跡データ集』文部省科学研究費成果報告書:267-309（2003年）とSettlement pattern of the Red River Plain from the late prehistory to the 10th century AD. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association* No.25:99-107（2005年）を加筆修正。

8章：書き下ろし。

9章：「北部ヴェトナム後期新石器時代の生業基盤変容について：農耕社会成立過程に関する基礎的理解」藤本強編『生業の考古学』所収論文を修正。

10章：書き下ろし

11章：書き下ろし

12章：「紅河デルタの城郭遺跡Lung Khe城をめぐる新認識と問題」『東南アジア歴史と文化』30: 46-71（2001年）を加筆修正。

13章：Nishimura Masanari and Nishino Noriko(2002) Archaeological study of the settlement formation in the Red River Plain: a case of Bách Cốc and the surrounding. *Paper collection, IIAS workshop:Vietnamese peasants' activity, an interaction between culture and nature*. IIAS, Leiden University. を大幅加筆修正。

14章：「キムラン研究覚え書き1：川べりの手工業専業集落の歴史地理的概要」『ヴェトナムの社会と文化』5号所収論文（2006年）を大幅加筆修正。

15章：2004年東方学会国際会議東京セッション発表原稿「北部ヴェトナム銅鼓をめぐる地域史・民族史的視点からの理解」を、大幅加筆修正し、さらに、2006年6月17日古代学研究会発表原稿「銅鼓をめぐるヴェトナム史：考古学と文献史から探る民族関係史」を加筆修正した。

第16章：（2004）「北部ヴェトナム紅河平原における輪中提形成に関する試論」東南アジア史学会関西例会発表要旨（2004年9月19日）を大幅加筆・修正。

第17章：書き下ろし

第2章 紅河平原域とメコン・ドンナイ平原地域の地理的・地質的特徴

A 地理的呼称をめぐって

紅河下流域とメコン川下流域は、両者とも平野もしくは平原という平坦な地域を構成している。それらは、河川のもたらす土砂堆積によりできた堆積平野である。両地域に関しては、地理学、地質学、歴史学、考古学などからの様々な総合的研究が行われている。それらの研究の中で両地域は“紅河デルタ”“メコンデルタ”と呼ばれている場合が多い。筆者もかつてはこの用語を用いていた。しかし、デルタ（三角州）という地形用語は井関弘太郎（1972）によれば、「変化を繰り返して形成される河口部の堆積地形、つまり活三角州（active delta）が主であるべき」とされ、この三角州の集合体からなる平野を三角州平野と定義している。従って、筆者もこれを参考とし、“デルタ（三角州）”の用語濫用をやめて、三角州平野と同じ程度の意味でPlain（平原・平野）の呼称を用いる。当然、この範囲には扇状地や、自然堤防地帯などの地形が含まれるわけである。従って、紅河下流域に関しては“紅河平原（Red River Plain）”と呼称し、メコン川下流域とホーチミン市周辺に関しては、メコン河の三角州とドンナイ川の三角州が主として平野を構成しているので、メコン・ドンナイ川平原と呼称しておく。

B 紅河平原の区分、地勢と形成史に関する覚え書き

I 紅河平原の範囲

ところで、紅河平原は地理的に区切った場合、どこからどこまでになるのであろうか？

Gourou（1936）が論じているように山塊が平野部ぎりぎりまで、せり出しているところは、その境が確定しやすいが、そうでないところは非常にぼやけた判断を行うことになる。

山脈沿いに、平原域の範囲をおおよそ述べると以下のようなになる（Fig.1, Pl.A）。北東端はハロン湾にせりだしたĐông Triều（ドンチュウ）山脈から始まる。ドンチュウ山脈の南麓をBạch Đằng（バックダン）川が流れている。西北に溯上するとBắc Giang（バックザン）省を中心域とする段丘と残丘の複合地帯に出る。北側にはバックザンの北部省境からLạng Sơn（ランソン）省南部にかけてBắc Sơn（バックソン）山脈などが北西-南東の方向に走っており、その谷間より、Lục Nam（ルックナム）川やThương（トゥオン）川、Cầu（カウ）川が流れ込んでいる。カウ川流域の平野部は、かなり北の方まで広がりを見せThái Nguyên（タイグエン）省南部まで食い込んでいる。そして、さらに西行するとTam Đảo（タムダオ）山塊に出会う。この山塊はVĩnh Phúc（ヴィンフック）省の北部に位置するが、俯瞰するとCầu川とLô（ロー）川の流域に挟まれて、南北に走るSông Gâm（ソングム）山脈などから南に向かって突出しているのがわかる。ヴィンフックとPhú Thọ（フート）省の境を流れるロー川を越えると、フート省の段丘地帯に入る。Việt Trì（ヴェトチー）市の西側段丘地帯のさらに

西や北はCon Voi（コンヴォイ）山脈やHoàng Liên Sơn（ホアンリエンソン）山脈など北西から細長く走る山脈の南東端に位置している。当地域にはロー川、Hồng（ホン）川（紅河本流）、Đà（ダー）川という3つの大型河川が北西より流入している。ダー川はホアンリエンソン山脈を大きく南に迂回してヴェトチー近くで紅河と合流している。ダー川と紅河の合流地点の南にTản Viên（タンビエン：傘円）山を主峰とするBa Vì（バーヴィ）山塊が北西から南東に向かって走っており、平原部の西側の境を作りだしている。この山塊の東麓をなぞるように流れているのがĐáy(ダイ)川である。Hà Tây（ハータイ）省、さらにはHà Nam(ハーナム省)、Nam Định（ナムディン）省、Ninh Bình（ニンビン）省の4省はこのダイ川以東のTam Điệp(タムディエップ)山脈やその支脈などにより平原部を仕切られていることになる。

この範囲を現在の行政区分に対応させると、フート省、ヴィンフック省、ハータイ省、Hòa Bình（ホアビン）省の東北端部、ハーナム省、ニンビン省、Nam Định（ナムディン）省、Thái Nguyên（タイグエン）省の南部、Bắc Giang（バックザン）省、Bắc Ninh（バックニン）省、Hà Nội（ハノイ）特別市、Hưng Yên（フンイエン）省、Hải Dương（ハイズオン）省、Hải Phòng（ハイフォン）特別市、Thái Bình（タイビン）省、Quảng Ninh（クアンニン）省の西端部を包括することになる（Fig.2）。

II 紅河平原の地形分類

Gourou (1936) は紅河平原を区分するにあたって、「周辺山地とデルタの起伏地帯」と「沖積地」に大きく分け、前者に紅河平原を取り囲む山地やバックザン省の段丘地帯や平野部に局所的に分布する段丘を含めている。後者の沖積地は海面より15m高の範囲として、高度差が河川・農耕・居住の様々な面を決定していると結論し、詳細な等高線を入れた地形図を付している。そしてこの沖積地をデルタ北西部、デルタ東部、西部低地、沿岸地帯に区分けし、それぞれの特徴を以下のように述べている。

北西部（Pl.1,2）は河川の沖積作用が大きいいため、河川がしばしば高いところを流れ、それが自然堤防の発達を促している。東部では非常に高度が低く、河川も低みを流れ、自然堤防も発達していない。西部低地では、自然堤防に挟まれた低地においては、下流の砂礫列に阻まれ雨期の排水が利かず雨期作が全く不可能になる。沿岸地帯において河川方向に直交するように砂礫列がいくつも並行して発達し、しばしばその上に集落が立地する（Pl.3）。

高谷は紅河平原の簡単な地形区分案を提出し、その後より詳細な地形区分図（Fig.3）に書き換えている（高谷1975、桜井1980:Fig.3）。高谷案では周縁の高位部を段丘として、紅河本流やダイ川沿いに自然堤防を同定している。ダイ流域やフンイエン省南部、バックザン省南部からバックニン省北部にかけてのカウ川やトゥオン川合流地帯に氾濫原を同定している。またĐuống（ドゥオン）川南岸ハイズオン省西域に高谷特有のデルタ区分概念である古デルタ（地理学での高位デルタに相当）を当てはめている。そして、ハイズオン東域からハイフォンにかけての低地帯を新デルタ感潮帯（地理学での低位デルタ）とし、タイビン省からナムディン、ニンビン省にかけての沿岸部を海岸砂丘地帯としている。

春山は衛星画像をもとに地形分類を行い、高谷案より正確かつ詳細な分類案を提出している（Fig.4:春山1994）。ただしこの案も春山が紅河平原域での実地調査を始める以前のもので、やがてさらに精度を増したものが提出されるであろう。詳細はFig.4に示されてあるが、高谷案との大きな違い

は自然堤防地帯の広がりや河川沿いに限定し、氾濫原や高位デルタ（高谷の古デルタ）を逆に拡げていることであろう。

紅河平原部を構成する沖積層についてはいくつかのまとまった研究がある（Phan C.T. 1991, Ngô Q.T. et al. ed.2000）。春山成子らが行っている研究は細かいボーリングデータの分析やC14年代測定などを行い、なおかつ、図示をしているのもっとも理解しやすい。まず既存の150-200m深のボーリングデータをまとめて、最終氷河期盛期（Late Glacial Maximum : BP18000頃）に深度5-60mの沖積谷が現タイビン省からハイフォン省の間に位置していたことを復元している（Haruyama, Tanabe&LeQ.D.2000）。そして、海面上昇期の潮汐三角州や河口砂州の堆積物が沖積谷を埋めるように堆積している。また、現ハイズオン市、ハイフォン市 An Lão（アンラオ）県、ナムディン省Trực Ninh（チュックニン）県、ニンビン省Yên Khánh（イエンカイン）県の周辺でかなり深い落ち込みが確認できる。そして、完新世のデルタ性堆積物が徐々に海岸方向に向かって埋積の深度を大きくしながら前進しているのがわかる。

III 最大海進の確定

従来のヴェトナム地質研究では最大海進時の海岸線がどこまで入り込んでいたかが、あまり正確に明らかにはなっていなかった。Ngô Q.T. et al. ed. (2000) の研究では、ドゥオン川、ハノイ市、Hà Đông（ハドン）市を呑み込む形で海進域が広がっている。

春山は紅河平原の沿岸部近くの砂州卓越地帯に位置するナムディン省Vụ Bản（ヴーバン）県Bách Cốc（バックコック）村の旧河道上で70m深のボーリングを行い、土壌分析とC14年代測定によりデルタ形成の過程を細かく復元している（Fig.5、第14章参照：Haruyama et al.2000, 2001, Funabiki2004）。それによると、BP10000年前後（36-45m深）はラグーンと考えられ、BP9000-10000前後（27-36m深）には潮汐三角州に変化している。つまり完新世初頭には沿岸近くに位置していたことになる。BP9000-8000頃（20.5-27m深）には干潟あるいは塩性沼沢地に変化している。そして、BP8000-6700頃（16-20.5m深）には海成堆積によるプロデルタ（prodelta:三角州堆積の海底部）に変化し、海産貝も多く確認されている。さらにBP6700-6000頃（7-17m深）には三角州堆積の先端に推移している。春山はこのプロデルタ堆積ユニットと三角州堆積ユニットの間が最大海進期と考えている。海退が始まると、貝などと一緒に河成堆積物が一挙に増加する。そしてBP6000-5000頃（7-3.5m深）では干潟に近い環境となり、さらに上部の堆積（3.5-1m深）では旧河道の堆積物となり、最上層で現在の氾濫原となっている。またバックコック村の集落が位置する自然堤防における簡易ボーリングB地点（春山1999）では、6.6m深で、遠浅の内湾の砂浜や砂底に生息する二枚貝（クチベニガイ科: *Anis corbule* sp.）を多く含むシルト層が検出され、貝殻によるC14年代は4780BP（誤差値不明）と測定されている。この貝は汀線域を示すものとされる。年代値を信じるならば、完新世の最大海進の後、海退していく段階での汀線を反映していると考えられる。これより上の堆積で、褐色砂層などに汽水産貝が混じっているのが断続的に確認されている。海退に伴う離水後、河成堆積により自然堤防が形成されたことを示している。バックコックから西500mに位置している Dương Lai（ズオンライ）村は古い砂碛列に位置しており、この砂碛列はタイビン省中央部からナムディン省Nam Trực（ナムチュック）県、そしてヴーバン県の沿岸部に延びる沿岸砂碛列帯に属すると考えられる。この砂碛列は最大海進後の海退時による

形成であるから、バッコックの自然堤防が4780BP以後に形成されたという考えと整合する。

また、紅河平原北東沿岸部ハイフォン市域で行われたボーリング調査では地表から2m前後の厚さで氾濫原起源の堆積物、海拔0m前後のレベルからはほぼ4m近い厚さで潮間帯（マングローブ林など）起源の堆積物、さらに下で干潟域起源の堆積物（層厚10m以上）を同定している（Doan D.L.&Boyd 2000）。そしてHH120地点では、氾濫原起源堆積物層から 4145 ± 50 BP、その下の潮間帯起源堆積物層から 6000 ± 50 BP、その下の干潟域起源堆積物層中の旧河道埋積物から 7129 ± 80 BPの年代値が測定されている。そして、完新世においては6000BPまでの急激な海面上昇とその後の海退を想定し、4000BP前後には河成堆積物が出現する環境となったと判断している。また、彼らは、紅河平原北東域に接するHạ Long（ハロン）湾で島々の岩崖に残る海進による海食地形を読みとり、その高度と海食崖に伴う貝のC14年代測定を行っている（Doan D.L.&Boyd 2002）。完新世の年代では 4990 ± 90 BPから 2280 ± 60 BPの範囲で8つの年代値が測定されている。そして、その年代と高度から完新世の最大海進が6000-5000BPに現海拔より5-6m高に達し、その後多少の上下を繰り返しつつ、2280BP前後には3.5m高にまで海面高が下降したと考えている。ただし、この研究にはいくつかの方法論的問題が存在する。具体的には、海食崖に残っている貝層が全く同時期に形成された保証がない、つまりいくつかの時期のものを含む可能性があること、C14年代測定値を絶対年代として信じ切っていること、ハロン湾の位置するプレートが全く不動のものとして仮定していることなどである。ただこれらを差し引いても海面高が海進時には現在より高く、5000BP前後から海退が始まったということはいえそうである。ニンビン省では海食崖とMán Bạc（マンバック）遺跡（Fig5:新石器時代）の文化層直下の自然貝層を利用したC14年代が測定されている（Nguyễn Q.M.&Le K.P.2000）。海食崖の貝の年代は 4860 ± 60 BP（半減期5730年計算、未校正年代）で、Mán Bạc 遺跡の自然貝層では 6860 ± 110 BP（半減期5730年計算）の年代値が測定されている。Mán Bạc 遺跡では、筆者が発掘の指導を行った第2次調査で、最下層で後述の前期新石器時代に属するĐa Bút文化の土器が検出されており、その年代が少なくとも4500BP-5000BPに遡ることは確実である。また、問題の文化層直下の貝層は近くで確認される海進による海食崖の高さと一致すること、また貝が波動により細かく破碎・摩耗を受けていることから潮間帯に位置していたであろうことなどが第2次調査で理解された。従って、自然貝層の年代と遺物の年代観に矛盾はなく、ここでも最大海進時の海面高が現海面のより高くその年代が5000BP-7000BPの間に納まってくることが理解できる。

管見では最大海進期の年代はある時点に限るのではなく、ある程度その海面が維持されるほどの時間幅で存続したと考えた方が、年代値等の理解に無理がないかもしれない。

では、最大海進前後の、紅河平原のより内陸部はどのような環境であったのだろうか。西氾濫原に位置するChau Can（チャウカン）遺跡（Fig5:ハートイ省Phú Xuyên（フースエン）県）では2000年に行われたドンソン期の木棺墓の緊急発掘調査時などに併せて、古環境研究が行われている（Nguyễn V.2001, Nguyễn N.Đào T.M.& Lê T.N. 2002, Hori et al. 2003）。古環境データ採取のための試掘坑では、最上層が表層部にドンソン土器を含む褐色粘土層で、中層が砂や植物遺存体などを含まない黄色硬質粘土層、下層が植物遺存体や白色砂層を含む暗灰色粘土層と報告されている。花粉分析では黄色硬質粘土層で淡水域の水草（*Caudora* sp.）が多いことが同定され、湖や沼地のような環境が想定されている。下の灰色粘土層では植物遺存体や汽水域の植物花粉が多いことが同定されている。また下

層では4040±55BPのC14年代も測定されている。従って、ここでは海退後の汽水環境の存在が確認できる。また、ドゥオン川南岸の自然堤防上に位置するĐại Trạch（ダイチャック）遺跡（Fig5:バックニン省Thuận Thành（トゥアンタイン）県）でも汽水域の水草が文化層中から確認されている（Nguyễn T. M.H.2002）。当遺跡はドンダウ期を居住開始時期とするので、紀元前1000年紀の古環境と考えられる。

この他、フンイエン省のMỹ Hào（ミーハオ）県、ハイズオン省のハイズオン市などで、最大海進期の形成とされるカキなどの自然貝層が確認されており、最大海進時の海岸線がハノイ周辺まで入り込んでいたとするのがヴェトナム地質学者の一般的な考えである（Nguyễn N. 私信）。しかし、春山は進展中のボーリング調査等に基づいて、最大海進時にはハノイ周辺からハータイ省南部、ハーナム省さらにはフンイエン省などを含む広大な汽水域が存在し、海岸線はより沿海側にあったと考えている（春山私信）。筆者は、ヴェトナム人地質学者が海岸線の根拠とするカキには汽水域の泥地を好むマガキが含まれており、細かい種同定を行わないと、海岸線の根拠とはならないと考える。従って、春山の考えに賛成したい。

以上のような諸研究に基づき、旧海岸線を復元した研究が、公表され始めた（Fig.5参照：Funabiki 2004）。この分野の研究は今後さらに精度を上げることであろう。

C メコン河平原の区分、地勢と形成史に関する覚え書き

メコンデルタは、通常カンボジアのプノンペン、カマウ(Cà Mau) 岬、ホーチミン市を結ぶ三角形の範囲を指している（Fig.6）。その定義範囲によるが、62500から93800km²あるとされる（Ta T.K.O. et al. 2002）。メコン平原の地形区分に関しても複数の区分案が提出されている。

高谷好一（Takaya 1974, 1975）は、Fig.7のような地形区分案を提出している。プノンペンなどの中流域から下流域にかけて、メコン本流とその支流沿いは氾濫原（Flood plain）とされ、さらに下流の川沿いが新デルタ（Modern delta）、さらに、河口を中心として海岸部付近は海岸複合帯（Coastal complex）となっている。また、メコン河下流右岸域を、氾濫原より若干高度の高い平坦地であるホルスト地帯（Monad rock, Plate）と、低域である広範囲凹地帯（Broad depression）として分域している。

Nguyễn Hữu Chiém（1994）の区分案（Fig.8）はさらに細かい区分を採用したものとなっている。まず丘陵地以外の平野部を、氾濫原高域（High floodplain）、感潮氾濫原（tide-affected plain）、海岸複合帯（Coastal complex）、広範囲凹地帯（Broad depression）に、大まかに分域している。そして、メコン河沿いに自然堤防（Natural levee）の発達を認め、氾濫原高域の中で、メコン河周囲に砂州（Sand bar）、後背沼沢地（Back swamp）を分域し、メコン河左岸奥域に広大な閉鎖氾濫原（Closed flood-plain）、同じく右岸奥域に開放氾濫原（Open floodplain）を設定している。感潮氾濫原域では、後背沼沢地、広範囲凹地氾濫原（Broad depression floodplain）の分域を行っている。海岸複合帯（Coastal complex）の分域は高谷案とさして変わらないが、それをさらに細分している。まず、砂堤列（Sand ridge）を抽出し、その間を海岸平坦地（Coastal flat）とし、さらに海岸よりに堤列間沼沢地（

inter-ridge) を、最先端部はマングローブ帯 (Mangrove) としている。また、広範囲凹地帯に関しては、広範囲凹地帯 (Broad depression) とピート凹地帯 (Peat depression) の区分を行っている。

さらに、Nguyễn Văn Lậpらの研究グループは、より細かい地形区分 (Fig.10) を提出している (Ta T.K.O. et al. 2002)。この研究はメコン本流 (Tiền: ティエン河) とバサック河 (Hậu : ハウ河、西側分流) に挟まれた三角州帯のアクティヴ・デルタ域で、3本ずつのボーリングコアを2系列で探査し、土壌分析や年代測定などを行っているもので、現在まで、メコン・デルタ形成史 (特に海岸よりの地域) に関する最も信頼できる研究であろう。

ボーリングコアから復元した形成史では、BT2地点 (Fig.10) でのボーリングが更新世末まで連続的に遡るデータを提出している。最終氷期 (Last Glacial Maximum) 以降の急激な海面上昇が認められ、汽水域海成砂の堆積が8000BPから2000年以上続いて堆積したと考えられている。そして、5658BPと5300BPの年代 (年代値は樹輪年代較正済み) が測定されている層で、汽水域から湾地形への移行期と考えられる砂質シルトの交互波状堆積層が確認されている。その上層で、灰緑色の厚い緑灰色泥層が確認されている。海棲プランクトンも多く確認されており、開放形の湾地形であったと判断されている。当層の下層で5578BPが測定されている。そして、さらに上層部ではデルタ性堆積層が連なっている。まずは、暗灰色シルトあるいは砂層が海棲と汽水棲のプランクトン両方と共に確認されている。当層はVL1地点以外では全てのボーリング地点で確認されており、各地点で4826BP、4814BP、4743BP、4059BP、3794BP、1962BPのC14年代が測定されている。その次に確認される緑灰色砂性シルト層では、海棲や汽水棲に加え、初めて淡水棲のプランクトンが確認される。デルタ先端部の堆積と理解されている。BT2地点では5309BPと3562BPのC14年代が測定されている。次の暗灰色砂性シルトあるいは砂層では、海棲プランクトンの量比が大幅に減少し、汽水棲プランクトン比が高くなる。感潮域での堆積と考えられている。そして、最上層部の黄褐色あるいは灰色の砂層で、淡水と汽水の珪藻が確認されており、浜堤を形成する砂碛列と考えられている。

こうした結果に基づき、調査者は6000年BPから5000年BPの間に最大海進が起き、過去4000年間の海岸線の前進をFig.11のように復元している。

また、メコンデルタ全体の地形区分を以下のように区分している。

河成砂州 (Channel bar)、自然堤防 (Natural levee)、後背沼沢地 (Back swamp)、氾濫原 (Floodplain)、海岸平野 (Coastal plain)、マングローブ沼沢地 (Mangrove marsh)、砂性スピット (Sand spit)、砂丘/浜堤 (Sand dune/beach ridge)、沖積 (Alluvial apron) 更新世堆積物 (Late Pleistocene deposit)、風化地 (Weathered land)、基岩 (Basement rock)、ポイントバー (Point bar)、洪水盆地 (Flood basin)、沼地 (Swamp)、旧河川 (Abandoned channel)、湿地 (Marsh)、塩水湿地 (Salt marsh)、干潟 (Tidal flat) に分類されている。前述のNguyễn Hữu Chiém (1994) 区分案との大きな違いは、旧河川の位置をかなり明確にしたことと、後背沼沢地の範囲を狭め、洪水盆地を新たに設定したことであろう。

参考にメコンデルタの過去 (1975年以前) の土地利用 (Fig.9: Nguyễn H.C.1994) をみewithくと、ドンタップムオイ地域やKiên Giang (キエンザン) 省側のU Minh (ウーミン) の森は見事な原野である。そのことに起因してか、Đồng Tháp Mười (ドンタップムオイ) では野生稲が確認される地帯でもある。また、ドンタップムオイは1980年代に水田耕作地としての開拓が始まり、ウーミンの森は、マ

ングローブ林が切り払われ、エビの養殖池に変身しているところが多い。またLong Xuyên（ロンスエン）、Cao Lãnh（カオライン）、Châu Đốc（チャウドック）周辺は浮きイネ栽培地帯で、これはさらにカンボジア側に広がっていた。デルタの主要部は、移植を1度あるいは2度行う水稲一期作地帯である。そして、先端海岸部がマングローブ林に覆われている。ちなみに、同時期の紅河平原域は、既に大規模な水利・水防施設をもった人工的な水門環境にあり、すでに原野ではなく、かなりの範囲が2期作地帯化されていた。

また、筆者が調査域の一つとしているロンアン省やドンタップ(Đông Tháp) 省をまたいで広がるドンタップムオイ地域 (Pl.4,5) の地質に関しては、Pl. Cに示した地質図 (Bui P.D. et al. 2001) が詳細な理解を提供している。しかし、この地質図で使われている分類や用語とその説明文には対応しない部分や、また他の地質図での分類や用語との対応関係が、筆者の理解を超えている部分があり、そのまま利用できるものではない。ただし、この地図で明瞭に理解できることは、ドンタップムオイの Vam Co Tay (ヴァムコータイ) 川の南で、ほぼ並行するように古河川 (ab2: 灰色) の流路が存在することである。また、その古河川の周囲には海成沼沢地 (mb1: 青色、bm: ピンク色) が大きく広がっている。それから、カンボジアとの国境地帯やĐức Hòa (ドゥックホア) 県には、河成堆積 (p: 薄い黄色) と呼ばれる形成期が更新世に遡る河岸段丘が分布している。また、Tân An(タンアン) 市の南西に分布する海成堆積 1 (m: 薄いオレンジ色) と呼ばれる砂堆列はメコン河 (ティエン川) が川口に達した時に吐き出す砂が堆積してできたものと思われ、海退時の旧海岸線を表している。

しかし、こうしたメコン平原の地形区分には、先史時代の遺跡が濃密に分布し、本論でも論述対象としているホーチミン市周辺やその以北・以東 (Fig.12,13) が含まれていない。これはホーチミン市周辺以北・以東が別のドンナイ川流域など別の水系に所属しており、また新たに別の地形研究を参照しなくてはならない。しかし、現在までのところ、当地域を含めて正確な地質を把握できるのは、ヴェトナム土地水資源地図集 (VECCO 1973)、ヴェトナム地質局出版のヴェトナム地質図集 (縮尺20万分の1、ただし未完:Cục địa chất Việt Nam 発行) と、インドシナ全体の地質図集 (縮尺100万分の1: Phan Cu Tiên ed.1991)、ヴェトナム鉱産地図 (Pl.B: 100万分の1: Cục địa chất Việt Nam 発行) である。後3者はもともと同一組織が作っているもので、管見のところ、その区分思想にさほど大きな食い違いはなさそうであるから、ここは論述対象とする区域全体を捉えやすい後者の地図に従って、その地質の大まかな把握を行っておく。ホーチミン市から北方 (Pl. B) は、概して更新世堆積土壌 (河岸段丘: Pl.Bの濃い黄色) が発達し、東方ではドンナイ省のビエンホア以西は、高度が高くなり、丘陵地帯が主となり、ヴェトナムの屋根であるチュオンソン山脈につながる。ドンナイ(Đồng Nai) 川以南のXuân Lộc (スアンロック) 丘陵部は、玄武岩を基盤とする丘陵地帯 (Pl.Bの薄い水色) で、赤い玄武岩起源の風化土壌が発達している。また、ドンナイ川を挟んで北側は広域変成岩 (Pl.Bの濃い水色) が基盤として発達している (Trần K. T. 1999)。ホーチミン市東隣のBà Rịa-Vũng Tàu(バーリア-ヴンタウ) 省は海岸域に沼沢地やマングローブ林地帯が広がり、Cần Giỏi(カンゾー) 地区と同じ自然環境である。

その中でも、メコン平原に東接するホーチミン市は、ある程度の詳しい地質研究 (Lê V.T. 1996, Trần K.T.1998) が手にはいり、また各種地形が含まれているので、以東のドンナイ省、バーリア-ヴンタウ省、以北のTây Ninh(タイニン)、Bình Phước(ビンフック) などの諸省理解にも役立つ。ホー

チミン市は市街中心地を挟んで、南東部と北西部に分けて理解するのがよい（Fig.14）。Biên Hòa(ビエンホア) 省、Binh Dương(ビンズオン) 省やTây Ninh(タイニン) 省に接する北西側は更新世の河成堆積物（河岸段丘）が分布し高度も高くなるが、低域には酸性土壌が分布する。土壌的には黄灰色や灰色の風化土壌が発達している。市街区の南にはNhà Bè(ニャーベー) を中心として沖積土壌が広がり、さらに南東ではカンゾー地区のマングローブ帯が位置し、土壌は先端部の砂礫列を除き、酸性土壌帯である。

第3章 紅河平原と周辺地域の先史編年の整理

A はじめに

各時期単位で、遺跡の空間分布の変化を理解するためには、時間軸を明確にしておくてはならない。現在まで、当地域においては旧石器時代の遺跡も報告されている。旧石器時代から、ホアビニアン期を経て、新石器、青銅器、鉄器、そして歴史時代と、結果的には北部ヴェトナム考古学の編年枠組みの大半を概観しなくてはならないことになり、かなりの説明、考察の必要な作業となる。しかし、これを避けて論を先に進めるわけにはいかないのも、ここでやや詳しく立ち入って論じておきたい。当然のことながら、北部ヴェトナムに限定したとしても、その考古学編年は紅河平原域のデータのみで十分とはならず、南接するThanh Hóa（タインホア）省やその他の地域を適宜参照する必要がある（遺跡位置はFig.15参照）。また、編年の整理にあたっては土器等の遺物分類研究を基礎とする相対編年を重視し、放射性炭素年代はおおまかな絶対年代を知るための参照資料にとどめ、時間の前後関係を論じる主根拠とはしない。なぜなら、遺物研究による相対編年は他の考古学者が公表された編年案を、その資料等に基づいて、再議論することは可能であるが、放射性炭素年代測定法による年代値を、我々、考古学者自体が検証することはできない。もちろんその結果を他の放射性炭素年代測定法研究者が検証している例も非常に少なく、そて客観性が保証されていない状況である。

筆者自身、放射性炭素年代法を学術的年代測定法の一つとして認める立場を取るものにあるが、その利用に当たっては、遺溝や遺物による相対編年が一つの考古学研究の軸となっているのと同様、そこには、その結果を検証可能とする学術的手続きを明らかにし、その上で年代値による独自の編年体系が整備されるべきと考える。従って、考古学者がその年代値を鵜呑み的に利用して、時間的変遷を語る一派に、筆者は属さない。方法論の全く異なる遺物の相対編年と放射性炭素年代値を、交差検証の対象とすることすら、危険であると考え、あくまでも大まかな時期認識（1000年を前・中・後3分期で理解するくらいの程度）のための手段と判断する。

なお、ヴェトナムの場合、年代測定資料採集層位や共伴遺物との関係が不明な場合が多いため、遺跡や遺物群の時間的前後関係を論じる根拠とさらになりにくい場合が多いことも留意する必要がある。

ちなみにC14年代値の具体数値に言及している場合は、全て暦年代較正を施していない年代値（半減期5570年）で、具体的出典が明記していないものは年代測定値の集成表（Phạm L.H. & Nguyễn Q.M.2001）に依拠してある。関係遺跡の測定年代はTable 2に集成してある。また、以下叙述する編年観を簡易にまとめたものが、Table 1の編年表である。

B ソンヴィアン石器群とホアビニアン・バクソニアン石器群の位置づけ

Table.1 紅河平原と周辺域の編年表

| | | 具体時期名と代表遺跡名 |
|-----------------|--------------------------|--|
| around 30000BP | 前期あるいは中期旧石器 | <u>Sonvian Industry</u> Go Rung Sau Lang Vac(L) |
| | 後期旧石器 } | <u>Hoabinhian Industry and its contemporaries</u> Dieu R.(L) Xom Trai C.(L) Khuong C. Nguom R.(L) Con Moong C.(L) Doi C.(L) |
| around 8-9000BP | 続旧石器 | Chua C. Con Moong C.(M) Sung Sam C. Doi C.(M) |
| around 7000BP | ? | <u>Bacsonian Industry</u> Minh LeII C. Doi C.(U) Con Moong C.(U) Cai Beo(B) |
| | 前期新石器時代 | <u>Da But, Quynh Van assemblage</u> Da But Con Co Ngua Cai Beo(L) Man Bac(B) Cai Beo(L) Go Trung Lang Cong |
| around 4500BP | 後期新石器時代前半期 マドン・ホアロック期 | <u>Hoa Loc-Ma Dong Phase</u> Hoa Loc Ma Dong Bai Ben Mai Pha Man Bac(L) Cai Beo(U) |
| around 4000BP | 後期新石器時代後半期 フングエン期 | <u>Phung Nguyen Phase</u> Phung Nguyen Xom Ren Go Bong Lung Hoa Trang Kenh Thanh Den Man Bac(M) Dong Cho |
| around 3000BP | 青銅器時代 | <u>Dong Dau Phase</u> Dong Dau(M) Dai Trach(L) Thanh Den(M) Go Vuon Chuoi <u>Go Mun Phase</u> Go Mun Doi Da Go Chua Thong |
| | 鉄器時代 | <u>Dong Son Phase</u> Co Loa Dong Son Lang Vac Dai Trach(U) Viet Khe Lang Ca Phu Luong Xuan La Duong Co |
| 3-4th C.BC | | |
| 1st C.AD | 初期歴史時代 | |

(B):bottom layer (L):Lower layer (M):Middle layer (U):Upper layer

現フート省やバックザン省などの段丘部を中心として、粗製の礫石器群が発見・調査されている。この石器群はSon Vi(ソンヴィー) 石器群と呼ばれ一般に後期旧石器段階に位置づけられている。珪岩や石英を多用したこの石器群は、片面からの打撃により、礫の一侧縁や二側縁に刃部を作出した非常に加工の粗い石器群である。南中国や東南アジアの礫石器群などと比較してその類似性や異色性を論じるものもあるが年代判断の決定打とはなっていない。

そうした状況下、タインホア省のCon Moong (コンモーン) 洞穴などと比較して年代を論じる意見が出てきた。Nguyễn K.S. (1983) はCon Moong洞穴の石器群が下層から上層にかけて、ソンヴィアン、ホアビニアン、バクソニアン の3段階に順次移行変化していることを主張した。最近では、ソンヴィアンを前後2段階に分け、前期を30000BPから17000-18000BP前後、後期を-17000-18000BPから12000-11000BP前後に分期している。そして、前期にはĐiêu (ディウ) 岩陰第7層、Thảm Khuong (タムクオン) 洞穴、Nậm Tùn (ナムトゥン) 洞穴を、後期にはコンモーン最下層、Điêu (ディウ) 岩陰第6層などを対応させている (Hà V.T.1997, Hà V.T.ed.1998)。コンモーン洞穴の最下層は12000BP前後しか遡らず、ホアビニアン の複数の洞穴遺跡でBP20000前後の年代値が測定されており、こうした考えは、結果的にソンヴィアンとホアビニアンの同時併存を容認することとなる。しかし、こうした考えに関してはいくつかの疑問を提示できる (西村1992)。

コンモーン洞穴では、最下層でホアビニアン石器群に頻出する石皿が出土しているが、この種の石器はソンヴィアンの開地遺跡では全く確認されていない。また最下層では斧型石器、つまり、スマトラリスと同定可能な資料もあり、ソンヴィアンと同定するには難しいところである。ディウ岩陰では第3次調査では明らかに最下層までホアビニアン 的の石器が出土しており、ソンビアンとは同定できない (Nguyễn G.Đ.2001)。

ところで、紅河平原から山脈を北に越えた広西壮族自治区の百色盆地の旧河岸段丘ではソンヴィアンと類似した礫石器群が発掘調査されている。共伴したテクタイトのアルゴン・アルゴン法により、70-80万年前にという驚くべき古い年代が測定されている (Hou Y.et al. 2000)。当遺跡群のなかにはアシュールリアン・ハンドアックスによく似た両面加工の尖状石器が多く見られるが、それ以上に多いタイプの石器は片面加工の尖状石器で、それらはソンヴィアンの尖状石器との違いがほとんど見られない。両面と片面の加工の違いは利用する石材差に起因するようで、一概にアシュールリアン 的なもののみを取り上げて議論するわけにはいかない。テクタイトに関してはランヴァックのソンヴィアン包含層からも同様の年代が測定されており、テクタイトの年代に関しては、他の東南アジア地域で測定されているものとほぼ同じである。問題はこの年代をテクタイトの降下年代としていいかどうかである。これについてはまだ決定的見解が出ているとはいえず (McNamara&Bevan 1991)、判断を保留せざるを得ない。しかし、これらの石器群が中位段丘のラトゾル層にのみ分布することなどはヴェトナムのソンヴィアンとの類似点でもある。中位段丘の形成年代ははっきりしないが、更新世末程度の新しい年代ではあるまい。また、ほぼ同様な出土状況で、広東省の深圳でも段丘のラトゾル層直上の紅黄色土層から百色石器群と同じような石器群が確認されており、石器包含層中位に含まれていた炭化物から紅土層の熱ルミネッセンス年代で、13-17万年前の年代が測定されている (曾祥旺1998)。

従って筆者はこれらソンヴィアン石器群の年代も後期旧石器並行程度の新しい年代ではなく、より古い年代、つまり前・中期旧石器時代に属するものと考えている。ソンヴィアンの年代幅がどの程度

あるのかは今のところ未知であるが、少なくとも30000BP以上程度には遡ることは確実で、さらに遡る可能性とてあろう。そして、更新世末（BP2-30000年）にはホアビニアン石器群に変容していたということになる。

ホアビニアン石器群は、現在までのところ更新世にまで遡ることが確実なC14年代が、Đống Càn（ドンカン）洞穴（ホアビン省）、Điêu（ディウ）岩陰（タインホア省）、Khương（クオン）洞穴（ライチャウ省）、Xóm Trại（ソムチャイ）洞穴（ホアビン省）、Xóm Tre（ソムチェー）洞穴（Hòa Bình省）、Làng Vành（ランヴァイン）洞穴（ホアビン省）などで測定されている（Hoàng X.C.1989, Nguyễn V.2001, Nguyễn G.Đ.2001）。クオン洞穴の場合、最初の調査資料で28000-33000BP前後の最古の年代値が測定され、年代や石器群の信憑性に疑問符をつける意見もあるが、石器群の内容からしてホアビニアンと判断してよく（Chu V.T.1976）、更新世末期のどのあたりに位置づけるのが問題となろう。2度目の調査では最下層に至らないところの資料で15800BP前後が測定されており（Phạm L.H.&Nguyễn Q.M. 2001）、20000-30000BPくらいまで遡るのは確実であろう。

ディウ岩陰（Nguyễn G.Đ.2001）で3度の調査で3.8mから5.3m深に及ぶ厚い文化層が確認されており、最下層部ではオランウータン類（*Pongo* sp.）など北部ヴェトナムでは更新世にしか確認できない動物も発見されており、堆積層が相当石灰化していることなどから更新世に属するものであることは間違いない。また、2次調査の最下層部の最上部でC14年代（19700BP）が測定されている。ソムチャイ洞窟もBP19000-16000前後の年代が多く測定されている（Nguyễn V.1990,2001）。こうした更新世に遡る年代は冷涼な気候から、より温暖な気候への変化を表す植物遺存体の種類の変化からも検証されている（Nguyễn V. 2001）。以上のことから、ホアビニアン石器群が北部ヴェトナムにおいて、3万年前前後にまで遡るのは非常に確実性が高いと考えられる。この考えはタイなどでホアビニアン石器群がBP30000年近くまで遡っている例（Shoocongdej 1996, Santoni私信）があることから問題はないと判断する。

出土獣骨の分析から、更新世から完新世にかけて開発資源の変化（西村 1994）があったことが考えられるが、石器群の内容においては、大きな変化がないことも事実である。更新世のホアビニアン石器群を旧石器時代と考えるなら、完新世に入っても存続するホアビニアンを続旧石器時代として考えなくてはいけない。ホアビニアン石器群に共伴する石皿や刃部磨製石斧を捉えて新石器時代、あるいはインダストリー存続期間を完新世に限定し、中石器時代とする考えがあるが、現在の研究結果に対応する考えではない。

では逆に、ホアビニアンの終末はいつかが問題となる。Sung Sám（スンサム:Phạm Đ.M.1975）洞穴（ハータイ省）では10770BP、11365BPの年代が下層で測定されている（Hoàng X.C. ed. 1989）。Nghệ An(ゲアン) 省のChùa(チュア) 洞穴は9000BP近くの年代が測定されている。これらはともにホアビニアン石器群が出土した層位での測定値である。ディウ岩陰でも7970BPが上層で測定されている（Nguyễn G.Đ.2001）。前述のコンモーン洞穴は上層部（1.5m深まで）で8500BPから9380BPにまたがる年代値が幾つか測定されている（Phạm H.T. et al.1990）。この上層部は報告者によればバクソニアン石器群とされるもので、確かにバクソニアンの局部磨製石斧が出土している。ただし、この年代値とホアビニアン石器群、さらには局部磨製石斧を単純に同一脈略で理解できないのは、発掘の精度などから明らかである。また、Đặng（ダン）洞穴（ニンビン省）ではホアビニアン石器群や局部磨製

石斧が出土しており、上層部で7665BPの年代が測定されている（Hoàng X.C.1966a, Hoàng X.C. ed. 1989）。

以上のC14年代より明らかなのは7000-10000BP前後の時間幅においてはまだホアビニアン石器群が存在したということであろう。また、幾つかの洞穴遺跡の上層部では局部磨製石斧が頻出することが指摘されている（Colani1931,KLSĐHTH1967）。例えばTăm（タム）洞穴（ホアビン省ルオンソン県）では上層部でのみ、局部あるいは刃部磨製石斧が出土している（KLSĐHTH1967）。局部磨製石斧はブランク製作後に磨きを加えたものとみられるもので（西村1992）、コンモーン洞穴の上層例などに似ていよう。タム洞穴上層、コンモーン洞穴上層共に土器は全く出土しておらず、ホアビニアン石器群の脈略でこれらの局部磨製石斧を理解した方がよい。仮説ではあるがホアビニアンの終末期、つまり新石器移行以前に、ブランク成形後に磨きを加えたような局部磨製石斧が出現すると考えておく。

C ホアビニアンとはされていない更新世末期の石器群

さて、北部ヴェトナムのみならず、東南アジア大陸部で広範に確認されているホアビニアン・インダストリーだが、北部ヴェトナムの北域、つまりバクソニアン・インダストリーの分布するところでは、更新世ホアビニアン期と並行して、やや性格の異なる石器群が確認されている。1980年に発見・試掘され、1982年に発掘されたタイグエン省ヴォーニャイ(Võ Nhai) 県のグオム(Ngũm) 岩陰の石器群は、剥片が圧倒的多数を占める石器群(Quang V.C. et al. 1981) である。文化層は3時期に分割され、第1期は第5層と4層、第2期は第3層、第3期は第2層からなるとされる。第1期は多量の剥片石器が石器群の98%以上を占め、残りわずかを礫石器、あるいは剥片生産のための石核などで構成されている。第2期はその剥片石器の比率が減少し、第1期ではバクソニアン遺跡群に頻出する刃部磨製石斧や礫斧が一定量存在する。しかし、特に第1期、2期において不定型な剥片石器が多くを占めていることに変わりはない。

ところで、当石器群は、礫石器と剥片の石材（流紋岩）が同じであることから、礫石器と石核あるいは礫石器生産時の剥片と剥片目的の剥片の区別が行いにくいのが現実である（詳細な分析は栗島2000参照）。また、礫器の中にはホアビニアンに頻出するスマトラリス（礫斧）も存在している。

グオム下層部（第1期、2期）を、広西柳州白蓮洞（柳州白蓮洞科学博物館他1987）やタイのLang Rongrien（ランロンリエン：Anderson 1990）やその他の東南アジアの更新世レヴェルの石器群との類似を指摘する意見、さらにはソンヴィアンの礫石器が伴うことから、ソンヴィアンの洞穴遺跡例としてと認定する意見（Hà V.T. 1997、Hà V.T. et al. 1999）もある。白蓮洞との類似は剥片石器優越の点において認められるが、白蓮洞では礫器（エンドチョッパー類）、大型の礫器スクレーパー、さらに小型の剥片石器の作り分けを、石材や石器生産法を変えて行っていることはグオムとの明瞭な違いである。またその他の東南アジアの剥片石器群との類似指摘も単に剥片優越という1点に尽きる。ホアビニアンにも礫器製作時の剥片などを移用した剥片石器は存在しており（西村1992）、剥片石器の優越ということのみで他石器群との弁別を求める意見には賛成しない。技術的背景はホアビニアンのそれと大きく変わらないが、筆者はグオム下層に、確実に剥片から作出した剥片石器が一定量存在することをアセンブリッジの一つの特徴として認め、現段階ではホアビニアンと時間軸や技術背景を共有し

ながらも、自然環境差（ホアビニアン分布地より150Kmほど北に位置）あるいは、石材環境の差から剥片利用の点において適応差が現れたアセンブリッジであると考えたい⁽¹⁾）。また、ソンヴィー石器群の同定にも同意しない。なぜならまた、ソンヴィアンに典型的な礫石器が主ではなく、ホアビニアン礫石器も存在するからだ。

Soi Nhựt（ソイニユ）洞穴（クアンニン省Vân Đồn（ヴァンドン）県）を指標とするハロン湾の石灰岩崖の洞穴内貝塚遺跡群がある（Anderson1939, Đỗ V.N.1968, Nguyễn T.L.1992, Hà H.N.1998）。これらの洞穴貝塚は淡水産、陸産の巻き貝で構成されているものと、海産貝が主のものがある（西村・西野2003参照）。前者の淡水産・陸産貝の貝塚の場合、現遺跡直下周囲には海面が近くに存在することから、少なくとも完新世以降の海面上昇期に形成された遺跡ではあり得ない。発掘調査の行われたソイニユ洞穴のHang Giữa(ハンズア) 地点では、12460BPから15560BPにわたる4つのC14年代（貝）が測定されている（Nguyễn T.L.1992, Hà H.N. 1998）。石灰岩地域の貝による年代だから、年代値の鵜呑みは危険だが、更新世末の年代観は受け入れてよい。発掘で出土した石器量は非常に少なく、これは周囲に石器に利用できる石材が乏しいことが原因であろう。ソイニユで出土した石器は河川礫に簡単な剥離を施し、刃部を磨いたホアビニアンに共伴する刃部磨製石斧である（Nguyễn T.L. 1992）。また、Colani（1938）が発掘したHà Giát（ハザット）洞穴では典型的なホアビニアン石器であり、これら淡水産貝や陸産貝貝塚を形成した集団が使用した石器群はホアビニアン石器群と考えてよく、ソイニユ文化と別称する必要はない。

D バクソニアン問題

次にバクソニアン石器群の時間的位置づけを簡単に論じておきたい。バクソニアンはホアビニアン同様、紅河平原域低地ではまだ発見例はないが、北接するランソン省などの山岳地帯で多く調査されており、ある程度ブランク整形をしたあとに磨出した局部磨製石斧が伴う石器群として、Mansuy（1924, 1925, Mansuy&Colani 1925）が報告して以来、独自の石器文化として認識されている（Hà H.N. 2001）。しかし、実際ホアビニアンとの違いはさほど大きくはない。ヒン岩の石材を多用する不定形剥片石器が比率的に多いこと、両面加工の石器が比較的多く見られることが違いとして挙げられるだけで（西村1992）、前述のグオム下層やホアビニアン石器群と比べて、明瞭な違いがあまりないのが現実である（Hoàng X.C.1978）。

Mansuyの調査では出土層位情報が非常に少なく、遺物の時期差を読みとることは不可能だが、石器群の内容や組成（Phạm V.K.&Luu T.T.1969）などから、遺跡自体の時期差がある程度読みとれそうである。たとえば、Keo Phay（ケオフアイ）洞穴では、礫片に簡単に磨きをかけた刃部磨製石斧と局部磨製石斧が併せて2点しか出土しておらず、主体となる石器はホアビニアンの礫器である（Mansuy1924）。これに対し、Minh Lệ II（ミンレーII）洞穴は局部磨製石斧が26点も出土しているが、ホアビニアンの礫器は非常に少ない（Mansuy1925）。3m深の文化層があったLàng Cườm（ランクオム）洞穴（Mansuy&Colani1925）も局部磨製石斧の大半は墓葬を含む上層部からの出土で、下層からは刃部磨製石斧のみ出土しているようだ。しかも、上層での石器の主体は局部磨製石斧である。1985年に調査されたĐoi（ゾイ）洞穴（ランソン省Bắc Sơn:バックソン県）の調査では文化層厚が1.4mあ

り、その中でも上層部30cm深までしか局部磨製石斧は出土していない（Nguyễn G.Đ.1986, Nguyễn G.Đ.&Bui V.1988）。60cm深で11000BPと11200BPの2例のC14年代が測定されている（Phạm L.H.&Nguyễn Q.M.2001）。脈略が不明ながらBó Nam（ボーナム）洞穴は表土層近くで7960BPと7875BPが測定されている。

Cát Bà（カットバー）島のCái Bèo（カイベオ）遺跡の第2次発掘（Luu T.T.&Trinh C.1983）はこのバクソニアン問題を解決する一つの糸口を提供している。当遺跡は砂浜の浜堤部に位置し、遺跡表面は現海面の高潮面からわずか3.5mしか高くないのに対し、確認されている文化層の厚さは3.2mに及ぶ。つまり最下層形成時は現海面より30cmしか高くなかったことになる。文化層は約2.4m深のところで約20cm厚の無遺物砂礫層があり、上層部と下層部（80cm厚前後）を分ける基準となっている。この無遺物層⁽²⁾は完新世の最大海進時の形成と考えられているが、これは現海面との比高差から納得できる。そして、海進時形成層下の下層において、上層部分からは磨り石、礫石器に伴って粗製の厚手丸底土器が出土している。この土器は記述から判断する限り、口縁部にすぼまりがほとんどĐa Bút(ダブット)タイプの非縄蓆叩き文土器である可能性が高い。そして、さらに下層では土器は確認されず、礫石器、砥石、石皿、そして、記述から判断するならバクソニアン局部磨製石斧程度の石斧が出土している。砥石（石斧研磨用か）はホアビニアン石器群にはまだ出現していない。従って、この下層部をバクソニアン局部磨製石斧を含むホアビニアン以降の石器群と考えてよい。また海進以前の時期であることも確実である。

以上のことから、バクソニアンに典型的とされる局部磨製石斧は、ホアビン山塊の洞穴群同様、礫石器群の終末期に出現するものとする。筆者はこれまでのホアビニアンとバクソニアンの分布域を包括して、ホアビニアン石器群と呼称し、ホアビニアン段階の終末期に、局部磨製石斧が伴う石器群のみをバクソニアン石器群として捉えることを提唱したい。つまり空間差ではなく時期差である。バクソニアン石器群の具体的時間幅としては、出現期のものと考えられる土器の確実な共伴例が確認できない場合がほとんどであるので、土器出現以前の時期でなおかつ完新世初頭に納まる時期幅を想定しておく。具体的年代としては、BP9-7000位を想定しておけばよいのだろうか？もちろん土器の共伴に関しては将来の調査で認識を変えることも大いにあり得る。

E 土器の出現と前期新石器について

礫器と局部磨製石斧からなる石器群は完全に更新世末期から完新世初頭にまで限定できるものである。そして、これらの石器群と編年的に接続する土器を伴う考古遺物群、新石器的遺物群が何かということが問題となろう。

この問題に関しては、最近、土器の出現期が遡る新資料が頻出している中国南部も視野に入れて考えねばならないが、残念ながらヴェトナムにこの状況に対応できる新資料はない。近年の広西側の洞穴調査ではBP10000-12000に遡る土器が報告され始めており、ヴェトナム側においても土器の出現が遡る可能性はあると考えておく。

礫器や局部磨製石斧からなる石器群と編年的に接続する土器を伴う考古遺物群、つまり前期新石器の遺物群は、現在までのところ、その候補の最右翼は先述のカイベオ下層とタインホア省を中心に分

布するダブット文化が最も相応しい。

当文化は非縄蓆文の叩き文を全面に施された深鉢と局部磨製石斧を示準遺物とする遺物群で規定される。ダブット文化は現在までのところ、前後2時期に分期可能である。前期は非縄蓆文の叩き文の深鉢しかみられず、後期には縄蓆文が地紋でややくびれた口頸部をもつ土器が出現する。石器も局部磨製から完全磨製へと変化するようだ (Nguyễn K.D.1983)。後期段階には有溝石錘も出現する (Bùi V. & Nguyễn K.S.1978)。前期段階に相当するのがダブットやCồn Cỏ Ngựa (コンコグア) の下層 (Bùi V.1982) で、ダブットでは6540BPから5700BPに至る年代が中層から上層にかけて層序よく測定されている (Bùi V.1991)。また、後期段階に相当するのがGò Trũng (ゴーチュン: Bùi V. & Nguyễn K.S.1978) やコンコグア上層 (Bùi V.1982)、Làng Cồng (ランコン: Bùi V.1994) である。ゴーチュンでは 4790 ± 50 BP、ランコンでは下層部で 4900 ± 85 BP、 4850 ± 70 BPのC14年代が測定されており、ダブット文化の終末時期を探る資料となる。そして、このダブット後半段階に相当するĐồng Vường (ドンヴオン) 遺跡が、ニンビン省の南域で最近発見され、紅河平原域でも、この時期の遺跡が存在することが明らかとなった (Hà V.P. & Trịnh H.H.2002)。また、すぐ近くのMán Bạc (マンバック) 遺跡の第二次発掘地点最下層でも同時期の土器群が確認されている。ドンヴオンとマンバック最下層共に、厚手の大きな石粒を含む粗質な叩き紋土器が出土している。マンバックでは海進時に形成された破碎貝と砂から構成される無遺物堆積層の直上でこの粗製叩き紋土器を含む層が確認されていることである。

紅河平原より北東海岸域に位置するハロン湾沿岸域では、海岸の砂浜や洞穴を中心に多くの新石器時代の遺跡が確認されている。そのなかでもHạ Lung (ハルン) 洞穴 (クアンニン省Hoành Bò (ホアインボー) 県: Nguyễn V.H. & Nguyễn K.S.1976)、カイベオ下層などの新石器時代遺跡はそのなかでも早い時期の遺物群を含んでいると考えられる (Nguyễn V.H.1979a)。局部磨製石斧あるいは完全磨製でも断面楕円形のものが石斧の主を占め、礫器も相伴している。土器はCái Bèo (カイベオ) 下層の場合、ダブット文化のような非縄蓆文の叩き文による厚手の土器が主をしめるようだ。前節で述べたように、Cái Bèoの海進形成層下出土の土器を含む遺物群が、そのなかでも最古の候補になるうか。海進形成層直上で出土している遺物群は局部磨製石斧、石皿、土器には縄蓆文も出現しているようだ。カイベオでは第1次発掘で下層2.2m深で 5645 ± 115 BPのC14年代が測定されているが、残りの2点の測定値とその層序関係が信用に値するとはいえない。この海進形成層の直上層はĐa Bút後期並行の可能性が高い。そして、海進形成層直下の土器含み遺物群が、ダブット前期あるいは、それより遡る時期と考えたい。厚い貝層が存在したダブット遺跡自体は下層部で年代測定が行われておらず、ダブット文化自体、最大海進期を遡る可能性を残していると考えられる。

F 後期新石器時代の諸類型に関して

筆者の考えでは北部ヴェトナム (Fig.125) の新石器時代は前期と後期に大きく分期することが可能である (西村2003b、Nishimura 2006)。

前期新石器時代と後期新石器時代の境をどこに設けるかは、以下のような遺物群の違いで理解したい。前期の土器は、ダブット文化⁽¹⁾、クインヴァン文化、カイベオ下層などで確認されているもの

で、深鉢あるいは口縁部が若干くびれた壺が器種の中心で、石器に関しては、断面がレンズ形あるいは楕円形の部分磨製あるいは同じく磨製石斧（前期の中でも後半に出現）が特徴的である。後期になると、明確なくびれをもつ頸部と丸く膨らむ胴部を特徴する釜や圈足付きの鉢等の新器種が出現する。石器に関しては、断面方形の方角石斧や肩部をもつ有肩石斧、石環、管玉等が特徴的となる。石器製作技術においても擦り切り技法、管鑽法、軟玉などの硬質石材の利用といった革新が認められる。前期と後期の境はBP4500位と考えている（西村2003b, Nishimura 2006）。

そして、後期新石器時代がどのくらいの時間幅をもち、時期細分が可能かということが、ここでの議論の中心となる。現在、後期新石器文化に納められているもの、あるいは、その候補とされている文化には Hà Tây（ハータイ）省の Gò Mả Đống（ゴーマードン、通称マードン：Phạm L.H. 1973）を指標とするマードン類型、Thanh Hóa（タインホア）省の Hoa Lộc（ホアロック）文化（Phạm V.K.&Quang V.C.1977）、Ninh Bình（ニンビン）省の Mán Bạc（マンバック：Trình H.H.2004）、Cát Bà（カットバー）島の Bãi Bền（バイベン：Nguyễn K. D. 2005c,d）などの Hạ Long（ハロン）文化の諸遺跡、Lạng Sơn（ランソン）省の Mai Pha（マイファー：Mansuy 1920, Bùi V.& Nguyễn C. 1997）、Nghệ An（ゲアン）省から Quảng Bình（クワンビン）省にかけての Bau Tro（バウチョー）文化（Phạm T.N.2000）、Hà Giang（ハザン）省のハザン文化などがある。後述するフングエン文化を含めて、こうした後期新石器時代の遺跡の前後関係を、土器などから細かく論じた考察はつい最近まで非常に少なかった。後述のフングエン類型のとは異なる遺物群を持つこれらの類型は、さほど真剣に検討もされず、ドンダウ段階やフングエン段階に並行づけられてきた（研究史に関しては Hà V.T.ed.1999:63-95 参照）。わずかに典型的なマードンやホアロック類型の土器片がフングエン文化遺跡の下層から出土して、その前後関係を議論したものがあるにすぎなかった（Ha V.T.1977）。かつて、筆者はマードンやホアロックの土器が全くフングエン文化の土器と異なることなどを理由に、マードン・ホアロック類型がフングエン文化に先行すると考えたことがある（西村1994）。その後、最近の調査資料が公表されるにつれ、両者間の関係がより明確になりはじめたので、ここでは筆者の編年観を説明するためマードン・ホアロック類型や並行する遺跡を中心にやや詳しく述べておく。

筆者が2次調査発掘を指導したマンバック遺跡は文化層が1.8m厚近くあり、2次調査は分層発掘に徹したため、層位的確証性も高い。最下層部でダブット文化特有の土器が若干出土している以外、全ての遺物は後期新石器時代に位置付けられる。金属器に関係する遺物は全く存在しない。当遺跡については2次調査を中心にした資料で、Trình Hoàng Hiệpが修士論文を書いており（Trình H.H. 2004）、土器のデータを体系的にまとめている。ただし、当論文の問題はその分期である。土器の時期認識に関して報告者はやや混乱した認識を示している。例えば、フングエン早期段階とマンバック下層（早期）を同時期と捉え、別論ではホアロックとマンバック下層を同時期に捉えており、全く違う性質の土器群を同時期に捉える結果となっている。このように問題はあるが、現在までのところ、後期新石器の土器に関して、層位別に時期差を論じることの可能な数少ない遺跡資料である。

ここではマンバックを軸にして各遺跡との資料比較を行いたい。マンバックの2次調査は5つの層ユニット（L1-L5）に分け、さらに、その中で細かい分層発掘（L5の場合L5-1からL5-10）を行っている。最下層で若干量のダブット期の土器が出土した他は、後期新石器時代の土器と考えてよい。ここではその形態的变化と文様の変化について簡単にまとめる。まず、口縁資料であるが、体部等の下方

部との関係が明らかにできないものが多いが、その大半は釜（広口壺）、高坏の口縁類と考えられる。

L5ユニットでは、並行沈線を多用した文様が主となっている。3-4本の並行沈線を直線状に、あるいは曲線状やジグザグ状に施文している。さらには刺突文をこれらの沈線に絡めて施文している場合（Fig.126-6、127-6）も多い。この並行沈線文以外に、地紋を細い縄蓆文か斜行する沈線で充填し、太い沈線で文様帯を区画し、文様帯の一部の地紋を磨り消すものも見られる。この種の施文技法は薄手の精製土器に多く見られる。また、この施文技法と類似したもので、器面を丁寧に磨き、沈線で文様区画を行い、区画間に貝殻腹縁圧痕を充填するものも若干例存在する。、貼り付け凸状帯をもつ口縁（Fig.126-6）や刺突文を上面に施した口縁も特徴的である。

L4ユニットに入ると大きな変化が見られる。まず、L5のような並行沈線文様が見られなくなり、磨り消し区画を多用した文様が主となり、文様区画を充填する施文に櫛歯状工具による列点文、あるいは円盤状工具に鋸歯縁を作出し、回転を利用して列点文を充填する方法が出現する。貝殻腹縁文も口縁部に施されている例はあるが、文様区画を充填する例はないようだ。

L3ユニット以降になると、文様施文技法は、前出の文様区画に列点文充填する方法が主となる。また竹管のようなもので円文を押文する技法も出現している。上層は幾何学的文様区画に櫛歯状工具で連続列点文を充填したもの、口縁外端が垂れ下がるように張り出したものなどが特徴的土器として挙げられる

石器はいわゆる軟玉（nephrite）を使った石斧、管玉、環状製品などが特徴である。1999年の発掘はレベル掘りのため、2001年調査との単純比較は困難だが、軟玉素材のT字形石環が2001年発掘の上層部、有肩石斧が下層部で出土していると理解できる。詳細は省くが、L5ではまず蛇紋岩を中心とする方角石斧が特徴的で、フングエン文化の特徴となる軟玉の石材を石斧や石製装飾品への多用（Nishimura 2003b）、二股状土製支脚（Trịnh H.H.2004）などは、L3-L1で確認される。また石器型式についても、L5、L4でホアロックやマードンとの型式学的重なり、L3-L1でフングエン期の諸遺跡との型式学的重なりが確認でき、土器からの時期区分認識に全く問題はない（本論10章参考）。

さて、ここでは簡単に特徴的な遺物を利用して、各遺跡との並行関係を理解しておく。

並行沈線や刺突文を複合させた施文技法はホアロック、コンチャンティエン、マードンなどでも、主を占める文様技法であるし、モチーフの類似性も高い。特に、Trịnh H.H.（同上）が指摘するように、ホアロックとは形態的類似性も容易に指摘できる。これらの遺跡がマンバックのL5ユニットと同時期と見なすことに問題はない。ホアロック文化やマードン遺跡に特徴的遺物とされた取っ手状土製品（Fig.126-3～5：Phạm T.N. 2000）は、把手と脚、両方があるようだ。把手のついた釜、鉢（Fig.126-9）、あるいは丸形壺は、マイファア遺跡でも確認される。脚は鼎状の容器の足として機能したようだが、ホアロック、タックラック、バウチャーで確認されている。ホアロックの脚にはFig.126-2例のように先端が先細りしたものもあり、中国南部の同時期の三足土器と直接対比が可能である。

また、マンバックのL5でも確認された磨り消し文様区画施文や貝殻圧痕を文様区画に充填させる文様のモチーフ自体は、フングエン文化の文様モチーフによく類似した複合水波文様であるが、フングエン文化のものは沈線区画に列点文様を充填する施文技法で、むしろL4ユニット以降との時期的重なりが考えられる。モチーフ的にも並行沈線間を列点文で充填するもの、木の葉状の文様区画に列点文を充填するものや、連続円文などL4ユニット以降との共通点を多く指摘できる。Trịnh H.H.（2004）

は1-3層の土器に、Tràng Kênh（チャンケン）との類似性を指摘しているが、チャンケンのみならず、フングエン文化の諸遺跡との土器との類似性を認めてよい。さらに、上端の片側に突起を有す土製支脚（Trình H.H.2004）はフングエン期に特徴的な遺物だが、マンバックのL1-L3で確認される。

96年に再調査されMai Pha（マイファー）の土器（Hà H.N.2001）のなかには、ホアロック、マードンなどとの文様や形態上の類似を看取できるものがある。さらに99年調査のマンバックでも類似の土器を下層部に見ることができる。また、バイベン（Nguyễn K.D. 2001）もマンバックやホアロックとの類似性を確認できる。もちろん層位的データが非常に乏しいため、各遺跡の居住時期を細かく判定はできないが、明らかにこうした遺跡は同時期の遺物を含んでいる。そして、マンバック上層はフングエン文化に頻出する土器があるので、下層部はフングエン段階に先行する段階の遺物を含んでいると考えられる。

この時期変化については最近、公表された広西や広東省域の調査結果とも符合することが多い。ヴェトナム・ハザン（Hà Giang）省の中越国境から40kmしか離れていない広西の那坡県の感駄岩遺跡の調査では、新石器時代の文化層が確認されている（広西壮族自治区文物工作隊他2003）。当遺跡では、第感駄岩第1期の土器群には、三足を用いた容器（Fig.126-1）、土器の把手らしきもの、菱形スリットの入った脚（Fig.126-11）、体部に突帯文様帯が付いた高坏（？）、並行沈線による波状線文などが存在する。石器群の中には有肩有段石斧、河川礫や剥片利用の部分磨製の石刀、石斧の半磨製品（？）とされるものも存在する。こうした土器の施文技法や器種、石器器種などはマードン、ホアロック、マンバックなどでも存在するものである。

感駄岩第2期は前・後期に分期されている。前期は引き続き並行波状沈線文が主たる施文技法となっている。石器には格子状に溝を作出した樹皮叩き棒片、有肩石斧、側面が面取りされ、両主面が膨らみをもつ方角斧、擦り切り技法による小型片刃石斧、石鏃、石環などが存在する。これらはマードン、ホアロック、マンバックなどでも確認されている施文技法・器種群であり、まだ時期差が存在するとは明言できない。後期になると土器の施文技法に彩文、沈線区画に列点文を充填する施文法が出現する。石器にも断面がT字形や隅丸方形の石環、基部に抉りの入った石鏃、擦り切り技法による片刃方角斧などが存在する。また骨角器のなかには牙璋のミニチュア製品も存在する。これらはフングエン期との並行関係をたどれるものである。また、上述の沈線区画に列点文を充填する施文法や新出の石器器種については、そのかなりのものがフングエン期になって初めて確認されるものである。特に沈線区画に列点を充填する水波文様の出現には注目される。

C14年代に関しては、第1期の遺物包含層である4・5層のうち4層から4718±50BP（炭化物DY～D1016：半減期5730年）が測定されている。また第2期前期の第3層の貝（DY～D1017）3815±50BP、第2期後期とされる第2層からは、炭化粟（DY～D1015）の3131±50BP、炭化稲（DY～D1014）の3463±50BP、炭化稲（DY～D1013）の2883±50BPという年代が測定されており、C14年代値の層序による変化が検証されており、年代値自身もヴェトナムのフングエン期の測定年代などと比べ齟齬はなさそうだ。

さらに、このマードン・ホアロック期と対比可能な資料が、香港を含む珠江河口域（珠澳地区）で報告され始めている。宝鏡湾遺跡は珠江河口沖の高欄島に内湾に位置する遺跡である（広東省文物考古研究所他編2004）。当遺跡は遺溝の層位的認識などにより、主に3期に分期され、ハロン類型やマ

ドン・ホアロック類型の土器の器形・文様に類似例を見いだすことができる。石器群には、方角石斧、有肩石斧、有段石斧、有孔石斧、管鑽法による石環や塊状耳飾り、有溝石錘、磨製石鏃、溝砥石などマードン・ホアロック期の遺跡や並行するであろう周囲の遺跡に特徴的な石器器種を備えている。

C14年代に関しては土器片に含まれている炭化物のAMS年代測定法（北京大学）で、4A層から二つの年代 $4360 \pm 80\text{BP}$ と $4260 \pm 90\text{BP}$ 、3B層から $4200 \pm 120\text{BP}$ 、そして、2層から $4090 \pm 60\text{BP}$ の各年代が測定されている。また、やはり土器片からの炭化物による測定（広州地球科学研究所）で、3B層から $3460 \pm 170\text{BP}$ が測定されている。3B層からかけ離れた二つの年代値に関する説明はないが、AMS法による層序に応じた測定年代値は遺跡の絶対年代に対して、一定の発言権を有しているようだ。

以下、簡単に北部ヴェトナムと広東・香港の比較可能例を挙げておく。ハロン文化、マンバックなどの貼りつけ凸状帯付き口縁（Fig.126-6）やマードンの把手付き鉢（Fig.126-9）は、感駄岩のFig.126-7,8例に対比可能である。並行沈線交叉文やスリットを有した平たい圈足は、ホアロック（Fig.126-12）、ハロン文化（Fig.126-16,17）やマイファー（Fig.126-13,14）の特徴的土器であるが、広西の感駄岩（Fig.126-11）、珠海の宝鏡湾（Fig.126-10,15：広東省文物考古研究所他2004）などで出土している。またS字状貼り付け文はハロン文化（Fig.126-19,20,21）に特徴的な土器文様だが、モチーフとしては宝鏡湾（Fig.126-18）やマンバック（Fig.126-22）との共通性を指摘できる。また宝鏡湾（Fig.127-9,11）、香港のYunglong South（Fig.127-7：Meacham1995）ともに、曲線状の並行沈線を口縁部、脚や器体上面に定間隔に配置することを特徴の一つとして提出できるが、ホアロック（Fig.127-2,3,5,8,10）、マイファー（Fig.127-4）、マンバック下層（Fig.127-6）共に同様な施文の共通性を指摘することができる。また宝鏡湾出土の平行沈線文を有す器蓋（Fig.127-11）はホアロック（Fig.127-10）にもその類似例を見ることができる。

以上より、マードン遺跡とホアロック文化の遺跡を標準遺跡として、ハロン、マイファー、バウチョー各文化の諸遺跡、マンバック下層などを後期新石器時代前半期（マードン・ホアロック期）とし、後続するフングエン文化諸遺跡を後期新石器後半期（フングエン期）として理解する。ちなみにタックラック遺跡では、2002年の調査で $4120 \pm 40\text{BP}$ （103cm深）、 $4160 \pm 40\text{BP}$ （86cm深）、 $4080 \pm 40\text{BP}$ （61cm深）のC14年代（未校正）が測定されている。またマードンでは $4145 \pm 60\text{BP}$ のC14年代（未校正）が測定されており、これらはどのフングエン文化遺跡の測定年代（Phạm L.H.&Nguyễn Q.M.1998）より古い値である。両期の境は未校正C14年代を基準にすればBP4000位であろう⁽²⁾。マードン・ホアロック期の諸遺跡はBP4000-4500程度の年代幅を持ち、前述したダーブット文化やハロン湾沿岸の早い時期の新石器段階（前期新石器時代）に接続するものと考えられる。

さて、ここで石器群の問題に触れておきたい。前段階の前期新石器時代に比べて、磨製石器のヴァリエーションは格段に増加している。石器群の主を占める石斧は完全磨製で、その断面形は有肩型と非有肩型（方角斧）に分けられるが、共に横断面は扁平な長方形、あるいはそれに近い形をしている。マードン、ホアロックやマンバック下層（1999年発掘）出土のものは肩部、つまり着柄部に当たる突起部と斧身部が角張った作りで、なおかつ突起部の幅が相対的に幅狭である特徴が見られる。一方、マイファー出土のものは突起部が相対的に幅広で、斧身との段差の幅も小さく、肩部も角張らずに緩やかである。また、ハロン文化のバイベン（Nguyễn K.D. 2001）でも、有肩石斧と方角斧が共伴している。この有肩石斧は肩部の作りが比較的角張ったものと肩部がなめらかに作り出された二つのタイプが

あるが、共に、片面がやや中央部で盛り上がり、稜線が横に走る共通性がある。それらの一部は明らかに中央の盛り上がったところが段をなしており、有肩有段石斧である。同タイプのものは広西・広東・香港の沿海部の新石器時代の遺跡でよく出土する。また、方角斧は擦り切り技法で制作されたものが多いことが確認されている。マンバック（2001発掘）では、石斧のほとんどが擦り切り技法による製作であることが確認された（Nishimura 2003b）。ホアロックではスレート的石材を利用した部分磨製の薄手の石鋏や刃部が尖り出されていない磨製の楔具が出土しているが、これらは他の遺跡では出土していない非常に特殊な遺物である。現在までのところ、これらの遺跡例が、層位的に確認できる北部ヴェトナムで最も古い有肩石斧や擦りきり製方角斧である。また管鑽法制作による石環もこの段階で出現する。

II フングエン段階

後期新石器時代における最大の課題はフングエン文化の位置づけである。周知のように、ヴェトナム考古学は一般にフングエン文化を初期金属器時代として扱っている。しかし、当文化の遺跡では Gò Bông（ゴーボン）などわずかな遺跡で、青銅片や青銅の鋳かすらしきものが若干出土したとされているのみで、具体的製品やその鋳型は一切明らかになっていない。また、フングエン文化の最終段階とされるルンホア（Lũng Hòa）段階はルンホア遺跡やĐồng Đậu（ドンダウ）遺跡最下層などで確認されているが、青銅器関連の報告は皆無である。従って、筆者はこれらの出土例の確実性は高くないと考え、フングエン文化は、後期新石器時代と判断する。さて、フングエン文化以外にいくつか後期新石器時代に包括する必要のある遺跡がある。

フングエン文化に関しては3段階に分期する考えが有力である。それは、指標遺跡をとって古い順からゴーボン、Xóm Rền（ソムゼン：フート省）、ドンダウ下層を標式遺跡として、3段階に分ける考え（Hà V.T. 1971）がかなり一般化しているが、異論も多い。特に前・中期段階の区別に関しては、層位的根拠や細かい土器の分類研究なしに区別されている感があり、あまり当てにはならないだろう。

フングエン文化に関しては3段階に分期する考えが有力である。

それは、指標遺跡をとって古い順から Gò Bông（ゴーボン）、Xóm Rền（ソムゼン）、Đồng Đậu（ドンダウ）下層を標式遺跡として、3段階に分ける考え（Hà V.T. 1971）が、かなり一般化しているが、異論も多い。1遺跡1時期という理解が基準で、層位的根拠や細かい土器の分類研究なしに区別されている感があり、当てにはならない。フングエン後期と理解されていたドンダウでは、フングエン早期とされている土器も報告されており、見直しが必要となっている（Ngô T.P.&Nguyễn M.T. 2002）。従って、ここではフングエン期自身の細分は敢えて行わない。

問題はゴーボン（フート省）で青銅かす、ソムゼンで青銅かすと青銅片、Đồng Vông（ドンボン：ハノイ）で青銅かす、Chùa Lái（チュアライ：バックニン省）で鉛片、Bãi Tụ（バイトゥ：バックニン省）で青銅かす、そして、Hoa Lộc（ホアロック：タインホア省）で針金状青銅片、錐状青銅片、青銅かすなどの出土が伝えられていることである（Phan V.T.&Hà V.T. 1970, Diệp Đ.H.1978）。しかしこうした出土例に関して、正式かつ正確な出土の脈絡を報告したものはなく、その確実性を検証できる手段はない。ドンボン、バイトゥ、チュアライ例に関しては後続するドンダウ段階からの混入の可能性も否定できない。また、南部ヴェトナムの新石器時代遺跡で確認できるように、若干の金属器などの出土

例はあるが、それは後代の墓等による混入と考えられ、すぐさま信用できるものではない（Nishimura 2002a）。筆者はフングエン期までを後期新石器時代と考え、ドンダウ期を青銅器時代の始まりと捉えている（西村2003b, Nishimura 2006）。この場合も正確な出土情報を検証可能となつてから、フングエン文化等に共伴する青銅器として議論すべきである。C14年代は、ゴーボン段階に属するĐồng Chỗ（ドンチャー：ハータイ省Ba Vì県）の 3800 ± 60 BPが最も古い年代値となっている（Hà V.T.1987）。この他、ドンダウ下層、Thành Dền（タインゼン：Vĩnh Phúc省）下層、Tràng Kênh（チャンケン：ハイフォン市:Nguyễn K.D.2005a,b）などでも3000BPを上回る年代値がいくつも測定されている。

また実年代の比較参考資料としては牙璋や石戈がもっともいい資料であろう。ソムゼンやフングエン出土の牙璋は中国側の資料と比較して、紀元前2000年紀中期（Hà V.T.1994）と2000年紀前期（Phạm M.H.1995）に位置づける二つの意見があるが、いずれにしてもフングエン文化が紀元前2000年紀の半ば以前に遡ることを示している。チャンケンとルンホア出土の石戈については南中国の商周並行期に対応資料（蔣廷瑜1994）が見いだせるが、細かい年代の推定は今後の課題である。近年ようやく、Đầu Rằm（ダウザム：クアンニン省）、マンバック、チャンケン、カイベオ上層などの土器の文様や形態の具体的比較より、編年議論の基礎を築く動き（Trịnh H.H.& Phạm T.N.2005）が見られ、将来が期待できる。ちなみにTràng Kênh(チャンケン) やĐầu Rằm(ザウザム) との時間関係は、Trịnh H.H. (同上) の指摘のように、上層部、特にL2ユニットとの重なりが確実に認識できる。

G ドンダウ文化

後期新石器時代から青銅器時代への移行はドンダウ遺跡（ヴィンフック省:Lê X. D. & Hoàng X.C. 1983）やタインゼン遺跡で確認されている。この文化段階から青銅器鑄造とその製品が明らかとなる。ただ石器から金属器への移行は、一挙に行われるのではなく、石斧・石環など継続利用されているものも多い。

C 14年代はドンダウで 2830 ± 80 BPと 2960 ± 150 BP、Gò Vườn Chuối（ゴーヴオンチュオイ）で 3070 ± 100 BPが測定されていた。最近、さらにĐại Trạch（ダイチャック：バックニン省）の1999年の試掘抗で 3860 ± 60 BP（ドンダウ文化層:Phạm L.H.&Nguyễn Q.M.2001）、2001年の発掘抗で 3210 ± 50 BP（L1-3層）、 3280 ± 50 BP（L2-1層）の年代値が測定されたが（Phạm M.H.&Nishimura2002）、筆者はやや古すぎるのではないかと考えている。ドンダウでは石戈も確認されているが、これは前述のチャンケンやルンホアのものとは形態的に異なっており（Phạm M.H.1995）、より後の年代を考えてよい。

H ゴームン文化

ドンダウ文化に続くのがゴームン（Gò Mun）文化である（Hà V.P.& Nguyễn D.T.1982, Hà V.P. 1996）。青銅器のヴァリエーションに鏃・斧・戈・鎌などが出現する。C 14年代はGò Chùa Thông（ゴーチュアトン）で 2655 ± 90 BP、Gò Munで 2385 ± 60 BPが測定されている。

中国との実年代比較を可能とする遺物は多くはない。戦国早・中期の四川出土の青銅戈（川村2001）と比較可能なものがĐôi Đà（ドイダー：ハタイ省）のゴームン文化層より出土したとされている（Hà V.P.1996）。当遺跡はドンダウ文化層やドンソン期の墓も確認されており、具体的出土状況の報告がないので確実性に乏しいが、一つの参考とはなろう。この戈は後続するドンソン文化で出土する有翼戈ではなく、明らかな形態的違いがあり年代差も納得できる。

I ドンソン文化

ドンソン文化では青銅器のヴァリエーションが急増するばかりでなく、ガラス製品や鉄器も出現する。いわゆるドンソン銅鼓（Phạm M.H.et al.1987, Phạm H.T.ed. 1990）の製作年代の大半はこの文化の時間幅に収まると考えられる（今村1992）。現在までのところ、ドンソン文化のある段階から鉄器が出現することに異論はないが、どの段階から鉄器が出現するかということに関しては明言不可能である。

Đường Cồ（ドゥオンコー）類型という、紅河平原特有のドンソン文化の土器が、ゴームン文化の土器とどのように接続するかといった細かい研究はまだである。C14年代はViệt Khê（ヴェトケー：フート省）で $2480 \pm 100\text{BP}$ 、 $2415 \pm 100\text{BP}$ 、 $\text{BP}2330 \pm 100\text{BP}$ 、Gò Chiền Vây（ゴーチエンヴァイ）で $2325 \pm 100\text{BP}$ 、Châu Can(チャウカン)で $2325 \pm 60\text{BP}$ が測定されている。

実年代の比較材料としていくつかの遺物があげられる。銅鼓、銅銭、ドンソン文化特有の人型柄の青銅短剣が湖南省の戦国晩期楚系墓葬より出土している（湖南省博物館1984）。また、ヴェトケー・ドンソン木棺墓では石塞山型銅鼓がドンソン型青銅提筒や越式鼎と共伴している(VBTL SVN1965)。鼎・銅鼓ともに戦国晩期の紀元前3世紀に位置づけるのは異論がないようである（横倉他1990, 今村1992）。従って紀元前3－4世紀のどこかにゴームン文化とドンソン文化の境をもうけるのが妥当なところであろう。

J ドンソン文化の終末について

ドンソン文化がいつ終わるかということに関しても議論は尽きない。周知の如く、ドンソン文化と北から進入してきた漢系文化がどのような関係を持ち、結果的に漢文化一辺倒に近い様相を呈するようになった過程については、今後さらに追求していく必要がある。最近のCổ Loa（コーロア）城外のバイメン遺跡での緊急発掘では、紀元前2世紀に遡ることが確実な資料が出土し、漢系の土器とコーロア式の瓦などが、ドンソン文化の器物との併存関係になることが確認されつつあり、新たな波紋を呼んでいる。

また、ドンソン文化のなかで重要な役割を果たしていたヘーガーI式銅鼓や関連遺物が、漢系文化が圧倒的になった紀元後1000年紀前半においても継続して存在するという議論（例：今村1992、吉開1995,1998a、西村2001）もあり、単純にドンソン文化と漢系文化の間に時空的な境界線を引いてしまうことが困難となってきた。文献から理解・想像できるように、当該期は土着のドンソン文化の中に、

北からの異質（異民族的）な漢文化が圧倒的な量で流入してくる時代である。民族的に異なる文化同士の葛藤、融合、強調といった前段階までとは違った文化変容があったと考えられる。ドンソン文化から漢系文化へという単純な移行モデルは当地域の民族的問題を含めた歴史理解をばかしてしまうであろう。しかし、漢あるいはそれ以降の中国側政権が北部ヴェトナムを支配するにおいて、その中心にしたのは紅河平原域の地理的中心部であり、それ以外の地ではない。この視点は後の時代の文化的性質を考える上でも重要である。従って、紅河平原域の中心部を中心として、一定の周囲は土着文化から漢系文化への変容が他地域より早く、強力に行われた可能性が高い。そうした視点で、紅河平原域の中心部資料を俯瞰するとドンソン文化から漢系文化への移行は墓葬資料が最もわかりやすい変遷過程を示してくれる。ただし漢系の墓葬がいつから紅河平原域あるいは北部ヴェトナムで現れるかは一つの大きな問題であり、即答は困難であるため、とりあえず在地的墓葬を一つの指標とするのがよい。

前述のドンソン文化に特徴的な割竹形木棺墓の終末はいつであろうか。Phú Lương（フールオン：Hà V.P.1986,Bùi V.L.&Hà V.P.1988）やXuân La（スアンラ：Phạm Q.Q.&Trịnh C.1982）の木棺墓群は終末期のドンソン型青銅器や大銭五十（初鑄紀元後8年）あるいは五銖銭が出土している。ドゥオンコーの墓群（Phạm M.H.1970）でも終末期のドンソン型青銅器や前漢後期頃の漢系土器も出土している。しかし、これらの墓葬資料には紀元後2世紀以降と位置づけられるような漢系陶器が出土していない。後述のNgọc Lặc（ゴックラク）木槨墓出土資料の中にはこれらの割竹形木棺墓出土の漢系土器に型的に近いものもあり、さほどの時間的距離を感じさせない。当資料群が紀元後1世紀に位置づけられると考え、考古学的遺物群としてのドンソン文化は紀元後1世紀のある時期（少なくとも後期ではなく、前・中期の可能性が高い）に終結したと考えるのが妥当なところだろう。文献史上の徴姉妹の起義（紀元後40-43年）、そして馬援の遠征といった事象に重なってくるのだろうか？

注釈

(1) 不定形剥片石器が卓越するかしらないかという問題は、更新世東南アジア全体で考える必要のある問題である。南タイのランロンリエン（前掲）、Moh Kieu（モーキウ：Pookajorn et al. 1996）などの更新世石器群と更新世ホアビニアン（Shoocongdej 1996）、あるいは、ボルネオのニア（Niah）石器群（Zuraina Majid 1982）との関係は、剥片石器群と礫石器群が共存したように解釈する向きもある。それではいかにも技術背景の異なる集団の併存を安易に認めることになる1970年代以前の議論となってしまう。この問題は更新世から完新世にかけて、基本的アセンブリッジの性格を変えなかったホアビニアン石器群の遺跡（西タイ、北タイ、ヴェトナムのホアビン山塊）、また逆に、性格を変えた南タイと理解できる。南タイは更新世末から完新世にかけて、サフル陸棚が消滅する大環境変化を経験しているが、大陸部内陸の他遺跡群はその変化が大きくなかった可能性がある。問題は技術背景を同じとしつつも、石材環境差に応じた石器群の発現が異なった可能性を探るべきである。例えば、剥片石器が卓越するグオム石器群と礫石器が見かけ上卓越するホアビニアン、そして石器が極端に少ないソイニユ等のハロン湾洞穴遺跡のホアビニアンの違いは石材環境差に起因すると考えてよい。

(2) この砂礫層は、マンバック遺跡の文化層直下で確認されている波浪で破碎された貝殻混じりの砂層と同じ性質のものではないか。

Table.2 本章で言及する遺跡の放射性炭素測定年代値

| Site name | District and Province | Name of industry or assemblage | Layer or level | C14 date | Calibrated date | Material of sample | No. |
|--------------|------------------------|--------------------------------|-----------------|------------|-----------------|--------------------|---------------|
| Nguom R. | Vo Nhai, Bac Thai | Late Paleolithic | 1.1m | 23100±300 | 27526-28264 | Freshwater snail | Bln2692/II |
| Nguom R. | Vo Nhai, Bac Thai | Late Paleolithic | 1.1m | 23000±200 | 27515-28129 | Freshwater snail | Bln2692/I |
| Nguom R. | Vo Nhai, Bac Thai | Late Paleolithic | 0.7m | 19040±400 | 22352-23384 | Freshwater snail | Bln2691/I |
| Nguom R. | Vo Nhai, Bac Thai | Late Paleolithic | 0.7m | 18600±200 | 21912-22526 | Freshwater snail | Bln2691/II |
| Dieu R. | Ba Thuoc, Thanh Hoa | Hoabinhian | 1.8-2.0m | 8200±70 | 9070-9276 | Charcoal | Bln.3541 |
| Dieu R. | Ba Thuoc, Thanh Hoa | Hoabinhian | 3.0-3.1m | 8610±80 | 9540-9693 | Freshwater snail | ANU-10377 |
| Dieu R. | Ba Thuoc, Thanh Hoa | Hoabinhian | 3.0-3.1m | 19700±150 | 23083-23893 | Charcoal | Bln.3542 |
| Dieu R. | Ba Thuoc, Thanh Hoa | Hoabinhian | L20a | 7720±70 | 8445-8572 | Freshwater snail | ANU-10376 |
| Dieu R. | Ba Thuoc, Thanh Hoa | Hoabinhian | L10a | 6360±125 | 7119-7398 | Charcoal | ANU-11118 |
| Dieu R. | Ba Thuoc, Thanh Hoa | Hoabinhian | L17a | 4940±40 | 5627-5716 | Freshwater snail | ANU-11119? |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | ? | 450±80 | 366-541 | Charcoal | Bln.3527 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 0.4m | 15150±200 | 18165-18688 | Charcoal | Bln.3526 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 0.6-0.8m | 16130±90 | 19093-19530 | Charcoal | Bln.3042/I&II |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 0.7m | 4750±80 | 5365-5569 | Charcoal | Bln.3469 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.0-1.2m | 17100±70 | 20026-20729 | Charcoal | Bln.2857/I&II |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.2-1.4m | 17440±70 | 20561-21351 | Charcoal | Bln.2858 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.2-1.4m | 16900±80 | 19859-20346 | Freshwater snail | Bln.3478 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.2-1.4m | 17160±100 | 20111-20952 | Charcoal | Bln.3473 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.4m | 18170±70 | 21648-22208 | Charcoal | Bln.3471 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.5m | 18400±200 | 21766-22360 | Freshwater snail | Bln.2698/I |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.5m | 18400±200 | 21766-22360 | Freshwater snail | Bln.26981/II |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.5m | 18400±20 | 21835-22333 | Freshwater snail | Bln.2698/II |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.4-1.5m | 17010±80 | 19949-20445 | Charcoal | Bln.3474 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.4-1.6m | 17290±70 | 20435-21282 | Charcoal | Bln.2859 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.6-1.8m | 17450±100 | 20564-21359 | Charcoal | Bln.2860 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.6m | 18420±150 | 21809-22358 | Charcoal | Bln.3472 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.6-1.7m | 17010±70 | 19951-20440 | Charcoal | Bln.3475 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.6-1.7m | 16970±70 | 19923-20397 | Freshwater snail | Bln.3480 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.7-1.8m | 17390±70 | 20523-21332 | Charcoal | Bln.3476 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.7-1.8m | 17730±70 | 20754-21524 | Freshwater snail | Bln.3481/I |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.7-1.8m | 17230±70 | 20354-21223 | Freshwater snail | Bln.3481/II |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.8-2.0m | 17670±70 | 20702-21472 | Charcoal | Bln.3477 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 1.8-2.0m | 17420±100 | 20543-21347 | Charcoal | Bln.2861 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 2.0-2.2m | 17470±100 | 20577-21367 | Charcoal | Bln.2862 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 2.0-2.2m | 17720±100 | 20736-21522 | Charcoal | Bln.2914 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 2.2-2.4(oc dat) | 17210±100 | 20274-21200 | Charcoal | Bln.2863 |
| Xom Trai C. | Lac Son, Hoa Binh | Hoabinhian | 2.2-2.4(oc dat) | 8990±90 | 9953-10218 | Charcoal | Bln.3468 |
| Chua C. | Tan Ky, Nghe An | Hoabinhian | 1.5m | 9075±120 | 10021-10403 | Freshwater snail | Bln.1274/I |
| Chua C. | Tan Ky, Nghe An | Hoabinhian | 1.5m | 9570±120 | 10730-11095 | Freshwater snail | Bln.1274/II |
| Chua C. | Tan Ky, Nghe An | Hoabinhian | 1.5m | 9175±120 | 10254-10511 | Freshwater snail | Bln.1304/I&II |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 1.0-1.2m | 9900±60 | 11259-11438 | Freshwater snail | Bln.3492 |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 1.0-1.2m | 9200±70 | 10289-10477 | Freshwater snail | Bln.3487 |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 1.0-1.2m | 9110±60 | 10234-10374 | Charcoal | Bln.3497 |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 2.0-2.2m | 1033±40 | 929-986 | Charcoal | Bln.3485 |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 2.0-2.2m | 11070±70 | 12850-13073 | Freshwater snail | Bln.3493/I |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 2.0-2.2m | 10870±70 | 12752-12927 | Freshwater snail | Bln.3493/II |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 2.0-2.4m | 11830±70 | 13603-13879 | Freshwater snail | Bln.3488 |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 2.0-2.4m | 9909±150 | 11233-11704 | Freshwater snail | ZK.380 |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 2.4-2.6m | 12040±70 | 13813-14294 | Freshwater snail | Bln.3494 |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 2.4-2.6m | 12100±70 | 13876-14385 | Freshwater snail | Bln.3494 |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 2.8-3.0m | 12150±70 | 13945-14435 | Freshwater snail | Bln.3495 |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 2.8-3.0m | 12430±70 | 14299-14931 | Freshwater snail | Bln.3495 |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 2.8-3.0m | 12020±70 | 13792-14299 | Freshwater snail | Bln.3489/I |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 2.8-3.0m | 11900±70 | 13648-13959 | Freshwater snail | Bln.3489/II |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 3.0-3.2m | 11090±185 | 12830-13204 | Freshwater snail | ZK.379 |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 3.2m | 11755±55 | 13514-13768 | Freshwater snail | Bln.1713/I |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 3.2m | 11840±55 | 13613-13882 | Freshwater snail | Bln.1713/II |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 3.5m | 12170±100 | 13957-14482 | Freshwater snail | Bln.3490/I |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 3.5m | 12350±70 | 14166-14817 | Freshwater snail | Bln.3490/II |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 3.5m | 12920±90 | 15258-16302 | Freshwater snail | Bln.3496/I |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Hoabinhian | 3.5m | 12860±90 | 15173-16194 | Freshwater snail | Bln.3496/II |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Bacsonian | 0.4-0.6m | 8510±60 | 9478-9535 | Freshwater snail | Bln.3486 |
| Con Moong C. | Thach Thanh, Thanh Hoa | Bacsonian | 0.4-0.6m | 9230±60 | 10308-10491 | Freshwater snail | Bln.3491 |
| Khuong C. | Tuan Giao, Lai Chau | Hoabinhian | 0.6-1.0m | 15800±150 | 18807-19298 | Freshwater snail | HCMV03/93 |
| Khuong C. | Tuan Giao, Lai Chau | Hoabinhian | 1.5m | 28130±2000 | 31165-35164 | Freshwater snail | Bln.1408 |
| Khuong C. | Tuan Giao, Lai Chau | Hoabinhian | 1.5m | 33150±2500 | 35801-40884 | Freshwater snail | Bln.1412 |
| Khuong C. | Tuan Giao, Lai Chau | Hoabinhian | | 27700±200 | 31578-32755 | Freshwater snail | Bln.3556/I |
| Khuong C. | Tuan Giao, Lai Chau | Hoabinhian | | 32100±150 | 36785-37859 | Freshwater snail | Bln.3556/II |
| Doi C. | Bac Son, Lang Son | Hoabinhian contemporary | 0.6m | 11000±200 | 12774-13139 | Freshwater snail | Bln.3708/I |
| Doi C. | Bac Son, Lang Son | Hoabinhian contemporary | 0.6m | 11200±100 | 12957-13228 | Freshwater snail | Bln.3708/II |
| Dang C. | Nho Quan, Ninh Binh | Hoabinhian? | 0.6m | 7665±90 | 8404-8550 | Freshwater snail | Bln.913/I |
| Con Co Ngua | Ha Trung, Thanh Hoa | Da But | 0.7m | 2600±80 | 2536-2780 | Charcoal | ZK.375 |
| Con Co Ngua | Ha Trung, Thanh Hoa | Da But | 1.0m | 3200±100 | 3318-3550 | Bone | BLN.2679 |

| | | | | | | | |
|---------------|------------------------|---------------------------|---------------|----------|-----------|---------------------|-------------|
| Con Co Ngua | Ha Trung, Thanh Hoa | Da But | 1.5m | 5520±95 | 6225-6409 | Shell | HNK88 |
| Con Co Ngua | Ha Trung, Thanh Hoa | Da But | 1.5m | 5140±95 | 5770-6006 | Outer part of shell | HNK88 |
| Go Trung | Hau Loc, Thanh Hoa | Da But | 0.6m | 4790±50 | 5476-5582 | Charcoal | bln.2090 |
| Da But | Vinh Loc, Thanh Hoa | Da But | 0.7m | 6095±60 | 6893-7104 | Freshwater snail | Bln.1407 |
| Da But | Vinh Loc, Thanh Hoa | Da But | ? | 6540±60 | 7399-7507 | Freshwater snail | Bln.3509 |
| Ban Thuy | Vinh Loc, Thanh Hoa | Da But | 0.5-0.7m | 5000±95 | 5656-5867 | Shell | HNK89 |
| Ban Thuy | Vinh Loc, Thanh Hoa | Da But | 0.7-1.0m | 5560±95 | 6285-6453 | Shell | HNK93 |
| Cai Beo | Cat Ba, Hai Phong | Early Neolithic | 2.2m | >40000 | | Charcoal | ZK.306 |
| Cai Beo | Cat Ba, Hai Phong | Early Neolithic | 2.2m | 5645±115 | 6338-6586 | Bone | ZK.328 |
| Cai Beo | Cat Ba, Hai Phong | Ha Long | 0.6m | 130±90 | 28-260 | Freshwater snail | Bln.3709/1 |
| Cai Beo | Cat Ba, Hai Phong | ? | 3.0-3.2m | 3485±60 | 3692-3837 | Bone | Bln.1437 |
| Man Bac | Yen Mo, Ninh Binh | Early and Late Neolithic | L5-8 | 5540±70 | 6292-6403 | Charcoal | Seoul Univ. |
| Man Bac | Yen Mo, Ninh Binh | Early and Late Neolithic | L2(0.3-0.4m) | 3530±60 | 3734-3893 | Charcoal | HNK |
| Man Bac | Yen Mo, Ninh Binh | Early and Late Neolithic | L5-7 | 3400±60 | 3579-3742 | Charcoal | Seoul Univ. |
| Ba Vung | Van Don, Quang Ninh | Ha Long | 0.54m | 90±40 | 36-237 | Charcoal | Beta 162876 |
| Ba Vung | Van Don, Quang Ninh | Ha Long | 0.77m | 110±40 | 40-239 | Charcoal | Beta 162877 |
| Ba Vung | Van Don, Quang Ninh | Ha Long | 0.9m | 4100±40 | 4551-4776 | Charcoal | Beta 162878 |
| Bai Ben | Cat Ba, Hai Phong | Ha Long | 1.0m | 3030±55 | 3154-3319 | Shell | HNK87 |
| Bai Ben | Cat Ba, Hai Phong | Ha Long | 1.0m | 3180±55 | 3366-3459 | Shell | HNK91 |
| Bai Ben | Cat Ba, Hai Phong | Ha Long | 0.8-1.0m | 3000±50 | 3109-3286 | Shell | HNK86 |
| Bai Ben | Cat Ba, Hai Phong | Ha Long | 1.0m | 3640±55 | 3896-4059 | Shell | HNK91 |
| Go Ma Dong | Ba Vi, Ha Tay | Ma Dong - Hoa Loc | 0.6m | 4145±60 | 4586-4789 | Charcoal | Bln.1277 |
| Thach Lac | Thach Ha, Ha Tinh | Ma Dong - Hoa Loc | 0.61m | 4080±40 | 4527-4769 | Charcoal | Beta 173292 |
| Thach Lac | Thach Ha, Ha Tinh | Ma Dong - Hoa Loc | 0.86m | 4160±40 | 4626-4796 | Charcoal | Beta 173293 |
| Thach Lac | Thach Ha, Ha Tinh | Ma Dong - Hoa Loc | 1.03m | 4120±40 | 4579-4780 | Charcoal | Beta 173294 |
| Trang Kenh | Thuy Nguyen, Hai Phong | Phung Nguyen | L8/1.6m | 3280±55 | 3454-3578 | Charcoal | AA 2772 |
| Trang Kenh | Thuy Nguyen, Hai Phong | Phung Nguyen | L8/1.6m | 3340±70 | 3496-3668 | Charcoal | AA 2773 |
| Trang Kenh | Thuy Nguyen, Hai Phong | Phung Nguyen | L8 | 3260±150 | 3331-3680 | Charcoal | Bln.3710 |
| Trang Kenh | Thuy Nguyen, Hai Phong | Phung Nguyen | 1.6m | 3340±70 | 3496-3668 | | |
| Trang Kenh | Thuy Nguyen, Hai Phong | Phung Nguyen | 1.6m | 3280±50 | 3458-3571 | | |
| Trang Kenh | Thuy Nguyen, Hai Phong | Phung Nguyen | 1.9m | 3405±100 | 3537-3803 | | Bln.891 |
| Trang Kenh | Thuy Nguyen, Hai Phong | Phung Nguyen | 1.9-2.1m | 3405±100 | 3537-3803 | Charcoal | Bln.981 |
| Trang Kenh | Thuy Nguyen, Hai Phong | Phung Nguyen | 1.4m | 3005±90 | 3057-3313 | Organic sediment | ZK-307 |
| Trang Kenh | Thuy Nguyen, Hai Phong | Phung Nguyen | 1.75-1.9m | 3440±60 | 3632-3805 | Charcoal | ANU-10884 |
| Dong Dau | Yen Lac, Vinh Phuc | Phung Nguyen | 3.4-3.6m | 3100±50 | 3263-3372 | Charcoal | HCMV.06/93 |
| Go Vuon Chuoi | Hoai Duc, Ha Tay | Dong Dau | 0.8m | 3070±100 | 3122-3377 | Charcoal | Bln.984 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.13m | 2650±130 | 2542-2909 | Charcoal | R-9755/1 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.49m | 3530±100 | 3698-3955 | Charcoal | R-9755/2 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 2.3m | 3390±70 | 3549-3741 | Charcoal | R-9755/3 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.14m | 2630±50 | 2733-2797 | Charcoal | Bln.3263 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.15m | 3090±60 | 3233-3369 | Charcoal | Bln.3261 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.24m | 3650±70 | 3892-4080 | Charcoal | Bln.3264 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.46m | 3730±50 | 4008-4157 | Charcoal | Bln.3262 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.15m | 3100±65 | 3236-3383 | Charcoal | HCMV07/93 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.15m | 2920±70 | 2978-3192 | Charcoal | Bln.2953 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.15m | 2860±70 | 2900-3110 | Charcoal | Bln.2981 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.38m | 2960±60 | 3038-3231 | Charcoal | Bln.2954 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.39m | 2940±60 | 3012-3203 | Charcoal | Bln.2955 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.49m | 3350±50 | 3515-3654 | Charcoal | Bln.2956 |
| Thanh Den | Me Linh, Vinh Phuc | Phung Nguyen and Dong Dau | 1.62m | 3000±60 | 3095-3294 | Charcoal | Bln.2957 |
| Dai Trach | Thuan Thanh, Bac Ninh | Dong Dau | L1-3(-44cm) | 3210±50 | 3394-3489 | Charcoal | HNK |
| Dai Trach | Thuan Thanh, Bac Ninh | Dong Dau | L2-1(-82cm) | 3280±50 | 3458-3571 | Charcoal | HNK |
| Dai Trach | Thuan Thanh, Bac Ninh | Dong Dau | 0.9m | 3860±60 | 4188-4381 | Charcoal | Wk.8274 |
| Dai Trach | Thuan Thanh, Bac Ninh | Dong Dau | L1-3(-46cm) | 2890±60 | 2950-3137 | Charcoal | Seoul Univ. |
| Dai Trach | Thuan Thanh, Bac Ninh | Dong Dau | L2-2(-87.5cm) | 2960±60 | 3038-3231 | Charcoal | Seoul Univ. |
| Go Mun | Lam Thao, Phu Tho | Go Mun | 1.0m | 2385±60 | 2371-2633 | Charcoal | Bln.1278 |
| Go Chua Thong | Thanh Tri, Ha Noi | Go Mun | 1.9m | 2655±90 | 2621-2862 | Charcoal | ZK.309 |
| Viet Khe | Thanh Oai, Ha Tay | Dong Son | 1.5-2.0m | 2480±100 | 2416-2690 | Wood | Bln.950 |
| Viet Khe | Thanh Oai, Ha Tay | Dong Son | 1.5-2.0m | 2415±100 | 2375-2663 | Wood | Bln.1227 |
| Viet Khe | Thanh Oai, Ha Tay | Dong Son | 1.5-2.0m | 2330±100 | 2217-2586 | Wood | Bln.1249 |

Reference: Pham L.H.&Nguyen Q.M.(2001), Nguyen Q.M.(2003), Yi Seonbok(2004), Bui V.&Nguyen Q.M.(2003), Chen W.C.(2003), Chen W.C. et al. (2004)

校正年代 (CalBP) は、CalPal2005_SFCPのオンラインプログラムで算出した

第4章 紀元1000年紀に関する編年枠設定のための基礎的認識

A はじめに

ヴェトナム史学では、漢の呂后が崩御した時に、南越（趙佗）が、西甌（北部ヴェトナムに比定）を支配下においた（紀元前180年？）という史記の記述をもとに、現在の北部ヴェトナムが、中国王朝の支配下におかれた時代の始まりとしている場合が多い（例：Trần.Q.V&Hà V.T.1960,Hà V.T.ed.2002）。そして、938年の呉権による独立までの期間を北属時代と呼んでいるのが一般的な慣わしだが、時代区分としては問題も多い（桃木1994）。また、その間に徴姉妹の起義や544年李賁が一時的に建国した”万春国”などを正式な王朝として独自に扱う場合もあり、北属時代として一つにくくるには複雑すぎる。また、考古資料では紀元前2-1世紀はドンソン文化の物質文化が優位性を保っている地域が多く、中国の実質的・圧倒的な支配下におかれたと考える根拠は少ない。以上の理由から、本論では中国系の物質文化がかなり圧倒的となる紀元後1世紀以降から938年の呉権による独立までを“初期歴史時代”とくくっておく。

この初期歴史時代以降に関してはヴェトナム考古学の資料において、ある限界が存在する。それは居住遺跡の調査がほとんどされておらず、この時期の資料のほとんどは墓葬（木槨墓や磚室墓）、城郭遺跡、窯址などが中心をなすことである。従って、ドンソン時代以前の資料と性格的にやや異なっており、単純な比較には注意を要する。

B 紀元後1世紀から3世紀について

前漢期から中国側で盛行する木槨墓は紅河平原域とタインホア省のMã（マー）川下流域で調査・確認されている。出土遺物から判断するなら紀元1世紀後半の資料が中心となろう。Ngọc Lặc（ゴックラック：ハイズオン省Tứ Kỳ（トゥーキー）県）の木槨墓の遺物群（Fig.16）は陶器・青銅器ともに紀元後1世紀に位置づけられるものである（Lê.X.D.1966、著者実見資料）。Thiệu Dương（ティウズオン：タインホア省）の木槨墓（Lê.T.1966）では前漢期に遡る例が多く確認される。木槨墓の発見例が集中するハイフォンやハイズオン各省は紅河平原の北半部に位置し、より中国からの影響を時期的に早く受けやすかった可能性があり、ティウズオン同様、前漢期並行の木槨墓が今後確認される可能性もある。その場合、ドンソン文化と漢系の木槨墓を作る文化とが紅河平原内で同時存在していたことになり、文化的に興味深い問題を孕んでいる。

ヴェトナムにおける磚室墓の初現も編年の指標となろう。まとまった漢墓資料が発掘されている広州では木槨墓から磚室墓への変化を1世紀後半に位置づけている（広州市文物管理委員会他1981）。Cổ Loa（コーロア）城郭外で発掘されたMạch Tràng（マックチャン）磚室墓（Trần.Q.V. 1975）では紀元後99年から111年までの紀年磚が見つかっており、現在までのところ確実な最古の磚室墓である。しかし、陶器類の型式学から見ると広州漢墓編年の後漢前期に近いものを有す磚室墓もあるため、マッ

クチャン墓より遡る磚室墓もありうるだろう。ただし、ここでは紀元後100年前後を磚室墓出現期と考えておく。

さて、2世紀の磚室墓の資料は非常に多く、広州漢墓などとの比較から、年代的理解も得やすい。最近ではJanse (1947, 1951) が調査したタインホアの磚室墓発掘資料の再研究から、編年案も提出されている(宮本・俵2002)。具体的には2-3世紀の具体的資料としては、Mạo Khê (マオケー：クアンニン省)、Thuận Thành (トゥアンタイン) 県(バックニン省)のLũng Khê (ルンケー) 城の前期資料 (Fig.17:Nishimura&Phạm.M.H.1998, Nishimura 2005c、西村・グエン2005) などが参考になる。

C 4世紀から6世紀

3世紀後半から4世紀にかけての磚室墓資料は非常に少ない。この時期の資料としてはルンケー城の発掘調査資料が相対年代をもっとも把握しやすい。現在、当城郭の発掘資料は整理中であるが、現在までのところ大きく、前・中・後の3時期に分期することが可能である(Nishimura2005c)。そして、前期 (Fig.16) を2世紀を始まりとし、3世紀を下限、中期を4世紀を中心とし、最上層資料(後期)は中国の磚室墓資料との比較に基づき、5世紀後半から6世紀初頭 (Fig.18,19) と考えている(西村2001)。これらの資料と比較するとĐại Lai (ダイライ:バックニン省)の窯址 (Trần.A.D.&Đặng.K.N. 1985) はルンケー 城址の中期を中心とした生産であったことがわかる。

D 7世紀から9世紀

現在までのところ、この時期に相当する考古資料がもっとも不明瞭である。層位的資料やまとまった資料で公表されているものが少ないため、ここではルンケー城の終末期から10世紀の基準資料となるĐương Xá (ドゥオンサー) 窯址遺跡の間に納めることの可能な資料をいくつか指摘しておく。当該期のまとまった資料は現ハノイ市内に位置した宋平城(後の大羅城、そして昇竜城)の遺跡群に眠っているはずなのだが、都市化などのため、まとまった考古資料として確認できていない。ただ、現在調査が行われているタンロン皇城遺跡の正確な発掘研究が進めば、8-9世紀の問題はかなり解決されるだろう。

Lương (ルオン) 磚室墓(バックニン省Tiên Du (ティエンズー) 県)は破壊された磚室墓の資料であるが破壊直後に筆者とバックニン省博物館スタッフにより、遺物の採集が行われた。四耳壺と深皿が、唐代並行期の磚とともに採集された。

ルンホア窯址遺跡は、1999年のヴェトナム歴史博物館とヴィンフック省博物館によるルンホア先史遺跡調査時に発見されたもので、筆者も踏査し、2002年に再び考古学院のスタッフと踏査を行った。地下式の窯址群で表採した資料には無釉陶器壺、灰釉碗が含まれている。当遺跡に近いThanh Lăng (タインラン) 窯址群もほぼ同じ時期のものと考えられる。この窯址群と同時期かと考えられる陶器群が最近発見のハノイ市ドンアイン県Tiên Hội (ティエンホイ) 磚室墓の副葬品 (Fig.20-1,2,3:2002年筆者ら調査資料) に見られる。これらの資料はいずれも7-8世紀のものと考えておきたい。

ハノイ郊外Kim Lan（キムラン）のBãi Hàm Rồng（バイハムゾン）遺跡の溝状遺構（Rãnh 2：2001年調査）は、ドゥオンサー(バックニン省) と同時期あるいは、やや遅れる時期の遺物が中心を占めているが、それら以外は、さらに時期的に先行する遺物と考えられる（第5章参照）。Rãnh 2には無釉の四耳壺や4カ所十字状に方形釉剥ぎを施した灰釉碗などが含まれている（Fig.20-4～9）。

E 10世紀

1998年のニンビン省Hoa Lu（ホアルー：華間）城域の調査で、建築遺構より様々な陶器類が出土している（Tống.T.T.et al.1999）。越州窯系の青磁、広東-ヴェトナム系の灰釉碗、さらに自然釉碗が出土した。こうした遺物群の大半はホアルー都968年から1010年の昇竜（現ハノイ）遷都の期間のものと考えられている。そして、ドゥオンサー窯址の発掘で前後2期を主とする基準資料が確定され、共伴施釉陶器から10世紀を中心とする年代と判断されている（Nishimura & Bùi M.T.2001, Nishimura & Bùi M.T.2004）。キムランの資料でも同時期の資料が前述の溝状遺構Rãnh 2で確認されている（Nishimura et al. 2002、第5章参照）。

第5章 紀元2000年紀の紅河平原域無釉陶器編年

A 編年確立のための基本方針

ヴェトナム語において、いわゆる陶磁器にはđồ sứ と đồ sành という2語の民俗分類語が頻用される。前者は施釉陶器を指し、後者は無釉陶器を指している。

ところで、ヴェトナム考古学における無釉陶器の研究は施釉陶器に比べ著しく遅れている。この原因は幾つか挙げることができるが、窯址遺跡の発掘や精緻な遺物研究が進んでいなかったことが最大の原因であろう。筆者が1997年にバックック遺跡群で小規模発掘調査を開始したときには、無釉陶器の年代的位置づけになるものは、若干の日本出土資料と若干の分布調査等で共伴可能性が指摘されているものにとどまっており、暗中模索の状態であった。

周知の通り日本の博多、太宰府、鎌倉、大阪、堺、江戸などの各都市遺跡研究は各種陶磁器の大消費地という性格を利用して、輸入陶磁器を含む様々な生産地の陶磁器群の精緻な編年を編み出してきた（山本2000、東京大学埋蔵文化財調査室1998）。その成功の最大要因は共伴アセンブリッジ抽出と在地土器・陶器分類編年からの検証であろう。特に、生産地での編年（前後関係）がほとんど明らかにならないままに、組み立てられた日本での中国陶磁編年は、世界最先端の時間軸の物差しとして活躍しており、東南アジア考古学もその恩恵を多分に被っている。もちろんヴェトナムもその例外に漏れないわけであるが、ヴェトナムの諸遺跡において、中国陶磁は決して主体をなす遺物ではなく、量的にはヴェトナム陶磁が圧倒し、さらには施釉陶器よりも無釉陶器が圧倒的に多い現象が普遍的である。従って、ヴェトナム考古学の健全な発展のためには無釉陶器の研究が急務である。

そうした状況下、バックック遺跡群の居住遺跡研究（第13章）において、様々な年代資料を含み、年代分布の純質性が低い遺物群を、施釉陶器と共に、前後関係や共伴関係を確認し、分類を行った経験は本研究の大きな基盤となっている。

そして、バックニン省のドゥオンサー窯址遺跡（Nishimura&Bùi M.T.2004）の発掘と遺物研究によって、10世紀を前後とするヴェトナム陶磁器の具体的形態、製作方法、さらに変遷過程などの定点を明らかにすることができた。さらにはハイズオン省窯址遺跡群での発掘に筆者も参加しているが、その時の資料もこうした編年体系を作る上での重要な基礎を提出している。また、幾つかの遺跡でのまとまりのある表採資料も分類・編年案を組み立てる上での検証資料となっている。

さらに、2001年と2003年に行ったハノイ市郊外のキムラン社バイハムゾン遺跡（第14章）の発掘でも各種遺構の出土遺物から、陶磁器編年の基礎資料を抽出することができ、これまでの編年観の検証を行うこともできた。

本研究では、これまでの筆者の調査・研究経験から、遺構や層位の共伴関係と型式分類から、各種無釉陶器の変遷過程を読みとり、時期的変遷が近年明らかになりつつあるヴェトナム陶磁あるいは中国陶磁や建設時期の明らかな建築遺跡などを年代理解のための定点資料とする。特にヴェトナムの施釉陶器については、近年の一括資料や窯址資料に基づく活発な型式変遷研究（Bùi M.T. 2001,

Nishino 2002, Nishimura&Nishino 2003, Nishimura&Bùi M.T.2004, Nishimura&Nishino 2004) により、一世紀単位はおろか、場合によっては一世紀を3分あるいは4分して論じることが可能となってきた。これは、バックコック遺跡群、キムラン・バイナム遺跡などの居住時期の長い遺跡の資料を、重ね焼き技法と高台形態に着目して分類研究を行い、全体の器形がわからずともある程度正確な年代的位置づけが行えるよう、出土遺物の一括分類を行ってきたことが好影響をもたらしている。特に13-17世紀に関しては細かい細分型式の前後関係や、暦年代との比定という問題は残すものの、全体の陶磁器変遷把握としては、かなりが理解されてきたといつてよい。本論では、施釉陶器碗皿類に関しては、10世紀から20世紀に關しての包括的編年案（西村・西野2006）を提出したばかりで、本論の施釉碗皿の年代観も全てそれにもとづいているため、いちいち施釉陶器編年側の説明はあえて行わない。

行論の手續きとしては、包括的なバックコック分類とキムラン分類を提出し、各世紀単位で位置づけることの可能なまとまりの良い遺物群を、バックコック分類とキムラン分類と比較しながら、内容を叙述し、10世紀から20世紀までの分類・編年案を提出する。そして、最後に紀元2000年紀を通じた無釉陶器の特徴をまとめることとする。また、バックコック遺跡群やキムラン・バイナム遺跡などの場合、多量に出土した資料を共通の分類枠で分類しているため、全ての出土資料を図面化しているわけではなく、器形残存のいい資料を選んで図面化している。

取り上げる無釉陶器の器種分類名称と胎質分類名称については、バックコックでの調査研究の経験から応用発展（西村・西野他2000）をさせている。器形に応じた統一呼称を行う。なお、器種分類に当たっては東京大学埋蔵文化財調査室（1998）の江戸時代の陶磁器・土器分類枠を参考にした。

B 器種分類（括弧内はヴェトナム語呼称と分類上の略号）

バックコック分類（Fig.21～40）とキムラン分類（Fig.41～51）では、多少分類用語の使用範囲に違いがあるが、基本的には普遍的に頻出する無釉陶器類を対象として、以下の器種概念で分類してある。（分類記号として括弧内右側のアルファベット記号を用いる。）

無頸壺（Vò không cổ : VO）：口がすばまり膨らんだ胴部を持つ容器。頸部を有さない。

壺（Vò : VO）：口がすばまり膨らんだ胴部を持つ容器。頸部を有する。

短胴壺（Vò thấp dẹt : VO）：口がすばまり、膨らんだ胴部を持つ。底部にいくほど幅が広がる鏡餅型である。短い頸部を有する。

桶（Vại : VA）：円筒型の容器。口縁部に若干のくびれを有す。

内湾口縁鉢（Âu : AU）：器形全体では、上方が開口するものの、口縁が内湾する鉢。

平鉢（Chậu dẹt : CHD）：上方が開口する、もしくは上方がすばまらない平型の容器。たらい型。

鉢（Chậu : CH）：上方が開口する桶型の容器。短く頸部を作る。器面に縄蓆文が施文されているものを、縄蓆文鉢（Chậu văn thừng : NVT）とする。

縄蓆文鉢（Chậu : CH）：上方が開口する幅広の鐙的口縁を有す。体部は縄蓆文で施文。

釜（Nồi : NO）：口がすばまり膨らんだ胴部を持つ煮炊き具。日本の”釜”とは形態的にはやや違う

が、中国考古学の分類呼称でも採用されており、機能的にも重なり合う部分が多く、同じ煮炊き具の”鍋”とは機能的に違うと考え、釜を採用した。器面に縄蓆文が施文されているものを、縄蓆文釜（*Nồi văn thừng* : NVT）とする。

長頸瓶（*Bình cổ cao* : BI）：強くすぼまる頸部と、膨らんだ胴部をもつ。長い頸部を有する。（全体として細長いので、「壺」と呼ばず「瓶」と呼ぶ。）

球形瓶（*Bình hình cầu* : BI）：比較的長い頸部と球形の体部をもつもの。

C 胎質の特徴

陶器の硬度、胎土や混和剤の素材や精粗、色調など、化粧土や釉以外の陶器質を総称する言葉として”胎質”を使う。

施釉陶器と違い、無釉陶器の場合は、胎質と、器種あるいはより細分した型式間にある程度の相関関係を認めることができる。もちろん、この相関関係は決して、明確な線引きの可能なものではなく、しばしば中間的なものが存在する漸移的なものではある。また、ドゥオンサー窯の研究経験では同一窯址内資料においても、焼成条件などにより硬度や色調にかなりの違いが生じることがわかっており、細かい胎質分類は不適當と考え、汎用性をもたせるため以下の3分類とした。

- ・硬質粘質土陶：粘土などのきめの細かい土を基本とし、硬質で比重が重く、緻密で割れ口が非常に鋭い場合が多い。暗褐色、灰褐色、暗赤褐色を呈する場合が多い。

- ・硬質混砂陶：粘土質の土に、砂を混和剤としている。砂は比較的粒度の粗い場合が多い。硬度は硬質粘質土陶より、劣る場合が多い。灰褐色、赤褐色、黄橙色を呈している。

上記二者、硬質粘質土陶と硬質混砂陶を併せて、ヴェトナムの民間では*đồ sành*（無釉陶器）と呼ばれているものにほぼ相当する。また英語で*stoneware*と呼んでいるものが、これらに最も重なる範疇であろうし、日本では、いわゆる「焼き締めもの」という一般呼称に重なる。

- ・軟質混砂陶：先史時代土器に非常に近い胎質のものも含み、胎質は、軟質でやや粗密度に差があり、一般的に褐色、黄色を帯びた灰白色を呈している。砂を混和剤としている。これらの胎質のものは民間で、*đồ gốm* と呼ばれているものにほぼ相当する。この範疇の陶器といわゆる先史土器の違いは、色調において均質性がみられ、胎質もより緻密で精粗の差が少ないことが挙げられる。その理由を筆者は恒久的な焼成施設を利用したより集約的、分業的生産に起因し、野焼き焼成を基本とした先史土器（正確にはゴームン期以前）と一線を画していると考え、生産遺跡での確認がないため断言はできない。

D バックック分類（Fig.21～40）

I 釜（NO）

NO1類（Fig.21-1）は、胎質が砂混じりの単純外反口縁である。NO2類（Fig.21-2）は、口縁内面上

部に段差が作出されている。NO3類 (Fig.21-3) は口縁端部が上方に尖出したもので、胎質は軟質混砂陶である。NO4～14類 (Fig.21-4～21-25) は砂粒が多く混じる軟質の土器質のもので、灰褐色、褐色、明褐色をしているものが多い。張り出した口縁部の内面に、整形痕から生じる沈線が生じている。NO4～7類 (Fig.21-4～21-12) には、底部あるいは全体に粗い縄蓆文が粗い間隔で施されているのが普通だが、NO4～7類以外は底部も削られて無文と考えられる。口縁形態で細分してある。NO15～20類 (Fig.21-26～22-5) は、多量の砂粒が混じり橙色、白橙色を呈し、焼成は前出類よりやや硬質なものであるが、他の高火度焼成陶ほど硬質ではない。前出類の15類のように口縁が外側に折りがえされ、上端に沈線が深く入るものや、肥厚外反口縁、16～19類 (Fig.21-28～22-4)、肥厚外反口縁の内面に沈線のはいるもの (NO20類: Fig.22-5) などがある。NO21～26類 (Fig.22-6～23-11) は、砂粒が混じる土器質のもので、灰褐色、明褐色浅黄橙色などを呈している。器体が薄手で、口縁部が鋭角に外反しているのが特徴で、一部は粗い間隔での縄蓆文が器体全面あるいは底部に施文されている。口縁形態で細分してある。NO27～30類 (Fig.23-12～23-18) も、砂粒混じりの土器質に近いものだが、灰白色あるいは白橙色を呈している。全体に器体が厚手で、口縁部も前出類ほど鋭角には外反しない。NO31～45類 (Fig.23-19～25-2) は砂粒混じりで硬質な焼成のもので、ろくろ整形による水引き痕が明確に残されている。明褐色、灰褐色、赤褐色などをしている場合が多い。口縁の造作で細分してあるが、外反口縁で口縁内側に凹面、段差などが作出されている。NO45 (Fig.25-1,2) 類のみ耳が付けられている。NO46～52類 (Fig.25-3～26-3) は、前出類同様、砂粒混じりで硬質な焼成のものである。口縁内面は比較的平坦で、外面側が肥厚するのが特徴。NO53～54類 (Fig.26-4～26-6) は、砂粒混じりの厚手のもので、比較的硬質な焼成である。単純に外反するもの。NO55～57類 (Fig.26-7～26-13) は、前出類に形態的に類似するが、硬質ではなく、土器質あるいは少し硬質な程度である。NO58～62類 (Fig.26-14～26-19) は、砂粒混じりの硬質な焼成のものである。外反度合いがきつい。NO63～72類 (Fig.26-20～27-6) は、砂粒混じりの土器質に近い軟質なもの、灰褐色、白灰色を呈しているものが多い。胴部に比して口縁部をかなりすぼめたもの (NO67,69～72類: Fig.26-26,26-28～27-6) と、そうでないもの (NO63～66,70～71類: Fig.26-20～26-25,26-29,27-3～27-5) がある。NO73～85類 (Fig.27-7～28-3) は砂粒混じりの硬質焼成のものである。単純な口縁内面に段差、あるいは沈線があるのが特徴である。NO86～97類 (Fig.28-4～28-28) は、前出類同様、砂混じりの硬質焼成のもの。口縁が丸く肥厚し、頸部内側に段差があるのが特徴。NO98～103類 (Fig.28-29～29-7) も、砂混じりの硬質焼成のもの。単純な鋭角に外反する口縁だが、頸部内側が尖出したり、頸部外面あるいは肩部上部に沈線が入るなどの特徴がある。NO104～107類 (Fig.29-8～29-15) は、頸部から口縁にかけて湾曲しながら外反するものである。口縁形態で細分してある。NO108類 (Fig.29-16,17) は、砂混じりで硬質な単純な厚手の外反口縁である。NO109類 (Fig.29-18,19) は、小型品で、口縁先端は丸く肥厚したものである。

II 桶 (VA)

VA1～4類 (Fig.29-20～29-25)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質である。VO-22類に類似した口縁部と肩部を有し、肩部から口縁がややすぼまるように胴部より径が小さくなっているのが共通した特徴である。VA1 (Fig.29-20

）類例以外は条痕状回転断続削り文（回転する器面に工具をあて、縦長の波状面を作る文様）は施されず、一部は口縁下に並行波状沈線が施されている。口縁断面形態で細分している。

VA5～9類（Fig.30-1～30-29）

これらは口縁部が、前類ほどではないが、きつく内側にすぼまるように内反しているもの。条痕状回転断続削り文が施文された率が高くなっている。口縁下に並行（波状）沈線が施文された場合もある。

VA10～21類（Fig.30-30～32-12）

これらは口縁部が上方に鋭利に尖りだし、内側へのすぼまりもないものである。また、大半に条痕状回転断続削り文が施文されている。これらの分類の中には、VA10（Fig.30-30）類などのように背の低い、口縁径が器高より小さいものを含む。器種的には細分すべきかもしれないが、胴部上半のみの破片では、器形判定が困難な場合が多く、敢えて細分対象としなかった。

VA22～24類（Fig.32-13～32-26）

これらは、口縁先端は鋭く尖り出さず、先細りながらもやや丸みを帯びている。口縁外側は膨らみを持ち、内側は平坦に作出されている。

VA25類（Fig.32-27～31）

無紋で小型もののみである。口縁形態は前掲のVA20～VA22類（Fig.32-5～32-14）に類似している。

VA26～32類（Fig.33-1～33-10）

これらは口縁先端部が丸みを帯びたものである。断面形態で細分を行っている。

VA33～34類（Fig.33-11,12）

口縁先端が平坦で、先端部が下端部より大きいものである。口縁内側下部と胴部の境には明確な突状帯は無い。

VA35類（Fig.33-14）

口縁先端部がやや膨らみ、カギ状に内湾したもの。

VA36類～37類（Fig.33-15～33-18）

口縁先端部が平坦で、口縁部全体では内反しつつも、外縁に若干の突帯が作出されている。無紋が主と考えられる。

VA38類、VA41類（Fig.33-19～33-23）

口縁と胴部の間にくびれがあるもの。口縁断面は胴部より膨らんでいる。器面は条痕状回転断続削り文と無紋のものがある。

VA39類～40類（Fig.33-20～33-21）

口縁の上端が平坦で、器体自身は直立しているもの。無紋が主と考えられる。

Ⅲ 壺 (VO)

VO1～2類（Fig.36-12～36-13）

やや孔質な胎質で、後出のものに比べ焼きしまりの良くないものである。1類は尖出した口縁、2類は膨らみを持った直立した口縁である。耳が付いている。

VO3～6類 (Fig.36-14～36-18)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質である。背の低い細めの口縁で、若干外反する程度である。先端部形態で細分してある。肩部から胴部にかけて膨らみをもつ器形である。耳が付いている。

VO7～10類 (Fig.36-19～37-4)

胎質は前類に同じ。口縁は、先端部が均衡はとれていないものの、内外両方向に張り出すもの。肩部は前類に比べ、すぼまりの度合いが小さくなっている。4耳あるいは6耳の耳が、機能を果たせないような非対称形であるのも特徴。

VO11～16類 (Fig.37-5～37-19)

胎質は前類に同じ。口縁先端部が外反するもの。内側への張り出しはない。ほとんどが耳付きのものだが、無耳も存在する。また、並行沈線文を有すものもある。

VO17類 (Fig.37-20,21)

口縁が直立し、胴部が鏡餅形をした短胴壺。

VO18～26類 (Fig.37-22～38-10)

口縁が尖り出すように外反するもの。該当分類に入る器形は短胴壺が主であるが、胴長の壺も含まれている可能性がある。また、耳の付いたものがないのも特徴である。肩部に並行沈線文様があるものもあるが、それら以外は無文である。

VO27～33,42,43,52,53,55類 (Fig.38-11～38-33,39-10,11,20,21,23)

短い口縁がほぼ直立し、肩部が張り出すもの。口縁上端外縁は外反する場合が多い。

VO34～38,44～51,54類 (Fig.39-1～39-6,12～39-19,22)

膨らんだ口縁部が特徴で、口縁部が短く、肩部と口縁部の形態的境界があまりはっきりしないのも特徴である。

VO56類 (Fig.39-24) は、口縁が、やや長めで直立に近いもの。丸まった体部が想像される。

IV 瓶 (BI)

BI1～8,25類 (Fig.39-25～40-14,34)

口縁は比較的長く直立しており、胴部も長細くなっているのが特徴である。胴部には条痕状回転断続削り文が施文されている場合が多い。口縁上端部は外側に張り出していることが多く、断面形態で細分してある。

BI13～18,20,21,26,27,28類 (Fig.40-20～40-26,28,29,35,36,37)

口縁は長く、上端が大きく外反したもの。胴部は球形あるいはそれに近いものが多いようだ。器種を細分するなら、球形壺と呼称すべきものである。

BI11,12類 (Fig.40-17,18)

短い口縁が大きく外反したものの。肩部も大きく張り出しており、胴部全体は球形に近い形と推察される。

BI9,10,19類 (Fig.40-15,16,27)

直立する口縁で、上端外縁が膨らむものだが、全体器形の想像が不可能である。可能性としては球形あるいはそれに近いものであろう。

BI22～23類 (Fig.40-30～40-32)

胎質は、緻密さに欠けるざらつきの多いもので、やや多孔質である。口縁は直立に近く、上端が外縁がやや張り出している。

BI24類 (Fig.40-33)

胎質は緻密かつ硬質。器表、器芯ともに褐色で、現在、中国茶の飲器に用いられる褐色無釉磨研陶器に胎質が酷似し、他類と全く違う起源であることを思わせる。中国製の可能性が高いのではないかと口縁は短く、上端が外側に折れ曲がり、胴部は長い。

V 鉢 (CH)

CH1～2類 (Fig.34-1～34-3)

共に灰白色の胎土で、軟質な土器に近い焼成である。口縁部が内反し、胴部上半が湾曲し、下半がすばまるのが特徴。

CH3～10類 (Fig.34-4～34-17)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質である。外面は無紋あるいは沈線のもののみである。口縁部は基本的に外反尖出しているのが特徴で、その口縁形態により細分を行った。

CH11～30類 (Fig.34-18～36-4)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質で、外面は条痕状回転断続削り文が施文されているのが一般的である。ただし、一部には外面が無紋や沈線文の場合があるが、同器形あるいは類似器形で、外面に条痕状回転断続削り文が施文されているものを対象としている。

CH31～32類 (Fig.36-5～36-7)

これらは上述のものと胎質は変わらないが、器形がやや深めで、条痕状回転断続削り文を有さず、無紋、沈線文で装飾されているのが特徴である。31類は内面に斜交沈線が施されており、播り鉢的な使用も考えられる。

CH33～34類 (Fig.36-8～36-10)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質で、口縁部が太く膨らみ、胴部がかなり絞り込まれているのが特徴である。

CH35類 (Fig.36-11)

破片で唯一例なため、器形が鉢であることは断定できない資料である。口縁下部の内湾がきついの

VI 平鉢 (CHD)

CHD1類 (Fig.33-27) は、平底にやや開口する短銅部を接着した物である。

CHD2～CHD3類 (Fig.33-24～33-36) は、桶と成型法・施文法が全く同じである。

CHD4類 (Fig.33-37) は、口縁外縁に若干のくびれが存在する。

E キムラン分類

分類時にバックコックでの分類を、そのままあてはめるべきかとも考えた。しかし、無釉陶器がかなり地元で製作されている可能性が高いのではないかという想定に基づいた場合、共通分類とするとバックコックとキムランという地理的距離から生じる地域差を理解する妨げになる可能性もあり、敢えて共通分類とはしなかった。

I 縄蓆文釜 (NVT)

NVT1～6類 (Fig.41-1～41-8) は、砂を混和した高火度焼成のもので、灰色の器体面をしていることが多い。器体全面に縄蓆文が施されているが、底部はなで消されている場合もある。口縁端部、特に先端部の形態で細分をしてある。

NVT7～13類 (Fig.41-9～42-3) は、前類ほどの硬質焼成ではなく、土器より若干よい程度の焼成で、全体が均等に焼成されている。NVT7～9類 (Fig.41-9～41-12) は褐色の器面、胎質で形態もやや、器高に比して、器幅が広めになるようだ。NVT10～13類 (Fig.41-13～42-3) は器面が灰白色を呈しているものが多い。この類型に属するものは、口縁先端内面に段差や沈線をもつのがほとんどである。

NVT14～15C類 (Fig.42-4～42-8) は口縁が肥厚し、器高に対し器幅の大きい形態のものである。口縁内面中央付近に沈線あるいは段差がある。縄蓆文は口縁以外全面に施されているものと (Fig.42-6) や底部のみに施されているもの (Fig.42-5) がある。焼成は先史土器より若干よいかあるいは同等ある。胎質は砂混じり。

NVT16～18類 (Fig.42-9～43-2) は、胎質は砂混じりのやや軟質な焼成のもので、口縁が比較的均等な厚さで、内面の中央か下部に、沈線あるいは折り返し成形による沈線状痕跡が残っている。器表の施文は、頸部から底部まで全面に縄蓆文施文されているものと、底部のみに縄蓆文が施文されているもの、方角文が施文されているものなどがある。一部には、かなり目の粗い縄蓆文もある (Fig.42-9 など)。

NVT19類 (Fig.43-3) は、前出類に類似するが、砂混じりでざらつく軟質な白灰色の胎質が異なっており、器表も波打つように整形されている。当類は、底部接続例が確認されていないが、同様な胎質の底部片に縄蓆文施文例があるので、縄蓆文釜に含めた。

II 釜 (NO)

NO1～3類 (Fig.43-10～43-13) は、口縁を肥厚化させ、外側に折り返すようにして、上面に凹線が入ったもの。胎質は砂混じりの明褐色土で、土器質と高火度焼成陶の中間的なものである。

NO4類 (Fig.43-14) と22類 (Fig.44-22) は、砂混じりで、かなり硬質な焼成で、口縁部断面が方形状に整形されている。NO5類 (Fig.43-15,16) は、単純な外反口縁で、口縁内面中央に沈線が入る。肩部にも沈線が入っている。

NO18,20類 (Fig.44-18,44-20) はNO4類同様、単純な外反口縁で、18類は口縁基部を絞りこんでおり、20類は器面中央がやや外湾し、肩部に2重突帯が付せられている。胎質は砂混じりで、かなり硬質な焼成である。

NO6～7類 (Fig.44-1～44-3) は、口縁が厚し、口縁内面に凹状線が作り出されたものである。胎質は砂混じりで硬質の焼成である。NO8～9類 (Fig.44-4～44-5) は口縁が角張るように肥厚化したもの。NO10～15B類 (Fig.44-6～44-14) は外反口縁で、口縁内面の造作の違いなどで細分してある。胎質は砂混じりで、比較的硬質な焼成である。胴部は丸みを帯びる場合と寸胴に近い場合の両方があるが、底は平底である。

NO16類 (Fig.44-15) は、口縁内面上端にわずかな段差が作られている。胎質は、砂混じりで、やや軟質な焼成である。

NO16B類 (Fig.44-16) は、16類同様、口縁内面上端に段差が作られているが、頸部がよりくびれている。胎質は、砂混じりで、やや軟質な焼成である。

NO17類 (Fig.44-17) ,21類 (Fig.44-21) は、口縁部が大きく外湾したものである。

NO19類 (Fig.44-19) は、単純な外反口縁だが、胴部がろくろ回転を利用した鋸歯状工具による表面整形されている。砂混じりで、かなり硬質な焼成である。

また、こうした一般的な釜以外に、底を意図的に抜いた、底なしの釜が3型式 (NOKD1-3 : Fig.43-5～9) 確認された。胎質は全て砂混じりのやや軟質なものである。

III 桶 (VA)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質 (硬質粘質土陶) である。VA1,2,2B類はKL01-239 (Fig.47-20,21) , (Fig.48-5,6,7) のように、四耳壺の耳が退化器官化したものが付けられているものがないものがある。VA1B,1D類 (Fig.48-1,2) , (Fig.48-4) は地文が無文であるが、一部、波状並行沈線文が施されているものがある。条痕状回転断続削り文と無文が両方確認できるものは、L1,2類とL3類以降の各類である。VA1B,1C類 (Fig.48-3) ,1D,2,2D類 (Fig.48-4,5,6,9) は口縁部が肩部に比べ若干窄まっているのが特徴である。VA2C類 (Fig.48-8) は肩部が胴部よりやや窄まるのが特徴である。VA3～5B類 (Fig.48-10～Fig.49-3) は、口縁径と底部径に大きな差がなく、口縁部内側の出っ張りも小さくなっているものが主である。口縁先端部は尖りだしている。地文が条痕状回転断続削り文であるものが圧倒的に多くなる。またVA2D類からVA5B類にかけては、器高の低い平鉢形のものも含まれている場合もあり、独立した分類にする必要性もある。しかし、口縁部のみの破片だと、桶か平鉢か判断が困難な場合が多々あり、独立分類としていない。

VA6類 (Fig.49-4) は、口縁が尖り出さずにやや外反している。

VA7～9B類 (Fig.49-5～49-10) のうち、VA7類は、口縁先端部が丸く、口縁と胴部の区切りが前述類に比べ明瞭でなく、口縁内側下方に段差がある。VA10～11類 (Fig.49-11～49-12) は口縁部が先端が平らで、断面形が方形に近い形状になっているのが特徴である。

IV 壺 (VO)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質（硬質粘質土陶）である。

VOVT1類 (Fig.49-13) は縄蓆文を施文された壺の唯一類である。胎質は口縁が同形態で、同時期のVO7類などと変わらない。

VO1～2B類 (Fig.49-14～18) は、砂粒含みの胎質で対称形の四耳あるいは六耳を持つ。

VO3～7類 (Fig.50-1～8) は耳が付されているが、前述類ほど対称形になっていない。器形も器幅に対して器高があまり高くないずんぐりしたものが中心である。また、並行波状沈線が付されているものがある。口縁先端部などの形態により細分してある。胎質も前述類のように砂の混じりは多くなく後出高火度焼成品の緻密かつ混じりのない胎質に近い。

VO8～11類 (Fig.50-9～14) は、耳が実質的に機能できないほど退化器官化している。口縁径は、胴部径に対しやや小さいくらいで、相対的に寸胴化している。口縁断面形は前述類ほど造作は施されていない単純な外反口縁である。特に、VO10B類 (Fig.50-13)、11類 (Fig.50-14) は、肩部と呼べるような胴部上位の曲線部もない、寸胴形である。

VO12～12E類 (Fig.50-15～51-2) は耳のないものがほとんどで、前述類ほど器面調整が粗くなく、粘土紐輪積み痕なども見えなくなっている。肩部と呼べる張り出しを持ち、口縁は外側に肥厚したものとなっている。

VO13～14類 (Fig.51-3～8) は、器形は、口がすぼまり膨らんだ胴部を持つ。底部にいくほど幅が広くなる。鏡餅型で短胴壺と呼べるものである。一部に地文に条痕状回転断続削り文が施されている。並行波状沈線が施されているものもある。

VO15類 (Fig.51-9) は、厚手の口縁で角張った短い口縁である。

VO18類 (Fig.51-12) は、厚手の口縁で、先端が少し突帯状膨らみが作出されている。

VO17,20,22類 (Fig.51-11, 13, 15) は、口縁がきつく外反したもの。

VO16,21,24類 (Fig.51-10, 14, 16) は、小型品である。胎質は他の高火度焼成品と同じである。

VO25類 (Fig.51-17,18) は、高火度焼成品ではなく、明褐色の混じりの少ない胎質のものである。肩部に沈線がある。

VO26類 (Fig.51-19～21) は、直立した口縁で、先端がやや角張るように膨らむもの。胴部は長胴で、肩部で最も幅広い。突帯装飾がつくようだ。

VO26B類 (Fig.51-22,23) は、VO26類と同器形だが、口縁先端が丸まって膨らんでいるもの。

VO27類 (Fig.51-24) は、小型の無頸の球形壺である。胎質はやや軟質のもので、他の壺類とは異質である。

V 瓶 (BI)

硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質（硬質粘質土陶）である。

BI1類 (Fig.47-14) は口縁先端部のみであるが、その形態から瓶と判断した。

BI2,3類 (Fig.47-15, 16) は高い頸部に一回り大きい胴部が特徴で、条痕状回転断続削り文が施されている。

BI4類 (Fig.47-17) は無文でやや太めの口縁先端部と口縁下の沈線が特徴である。肩部以下は沈線があるのみの無文である。灰色、あるいは褐色を帯びた器面・胎質で他の高火度焼成無釉陶器とは出自の違いを思わせる。

BI5類 (Fig.47-18) は、肩部以下に、BI2,3類同様、条痕状回転断続削り文が施されている可能性がある。

BI6類 (Fig.47-19) は、外湾する口縁部が特徴で、胴部も他類ほど長胴ではない可能性がある。

VI 平鉢 (CHD)

器高の低い断面逆台形のもの。硬質な焼成できめの細かい緻密な胎質（硬質粘質土陶）である。

CHD1類 (Fig.45-13) は、口縁が外反している。CHD2～3類 (Fig.45-14～46-1) は口縁が内反したものである。

CHD3B～7類 (Fig.46-2～7) は、前述類とは全く違うもので、明確な頸部形成が行われておらず、器体全体の外反の度合いも、小さい。口縁形態により、細分してある。

VII 縄蓆文浅鉢 (CHVT)

肩部以下に縄蓆文が施されているもので、縄蓆文釜同様、土器より若干焼成レベルのよいもの（CHVT5,6類：Fig.46-15, 16）、高火度焼成品（CHVT1～4,7,8類：Fig.46-11～14,17,18）に分けられる。口縁形態も縄蓆文釜と同形態で、同じ脈略で製作されていることが理解できる。

VIII 鉢 (CHCC)

口縁が外反し、明瞭な頸部を形成しているもの。底部径は口縁部径より小さいが、大きな差があるわけではない。口縁形態で細分をしてある。

CHCC1類 (Fig.47-19) は、外湾した口縁で、先端が尖出している。

CHCC1B,1C,2,3,4類 (Fig.47-20～24) は、口縁が水平方向に外反したもので、一部は尖出している。器面調整もまだ粗く、和積み痕なども明瞭に残っているものも多い。

CHCC4B,5,5B,5C類 (Fig.47-1～4) は、口縁がやや、下方向まで外湾したもので、平滑な器面調整が行われており、粘土紐の輪積み痕などもほとんど残されていない。器面は無文が主体である。

CHCC6,6B,7類 (Fig.47-5～7) は、条痕状回転断続削り文を有しているものと無文のものがある。

CHCC8,8B (Fig.47-8,9) は、沈線あるいは突帯が付されている。

CHCC9,10,11類 (Fig.47-10～12) は、口縁が水平方向に外反し、平滑な器面をもつもの。

CHCC12類 (Fig.47-13) は、砂混じりの胎質で、器体も厚手で、他類とは大きく異なっている。

IX 内湾口縁鉢 (AU)

器高が比較的高い逆台形のもので、口縁先端部がわずかに内湾したもの。口縁形態により細分してある (AU1～AU5類 : Fig.45-6～45-12) 。

X 内湾口縁平鉢 (AUD)

AUD1類 (Fig.46-8) は非常に背の低い器体で、内反口縁が特徴である。胎質は砂の混和の少ないものだが、器面は明褐色で、焼成は高火度焼成品ほど、硬質にはなっていない。

このほかキムランでは、碗、小碗や甑 (Fig.45-1～5) など器種も確認されたが、量的、時間的にも非常に限られた存在である。

F 年代比定

I 発掘・一括採集資料からの編年定点

各遺跡例とバックコック分類とキムラン分類を基礎に、各分類の時期判定を行う。考察の方法論としては、遺溝単位での共伴関係、層位上の出土傾向、型式的変遷、異器種間の共通性などから、総合的に判断しているが、全ての各分類がそれらの考察条件を併せ持っているわけではない。

II 10世紀基準資料

ドゥオンサー窯址編年の1-3期を9世紀末かあるいは10世紀前半から10世紀後半に位置づけられる。編年根拠は窯址の切り合い関係と陶磁器の形態変化を基本としている実年代決定資料は共伴越州窯系陶器に依っている (Nishimura&Bùi M.T. 2004) 。1-3期の間で形態変化が序列よく看取される。同様の型式のものが、968年から1009年にかけて都であったニンビン省の華閭 (ホアルー) 都城遺跡で大量に出土している (Tống T.T. et al. 1999) 。

III 11世紀基準資料

a キムラン・バイハムゾン R2資料

ドゥオンサー窯址群の第1期から3期と並行する資料を含む遺物群が、キムラン・バイハムゾン遺跡01年度調査のR2遺構 (KL01-R2と略称) である。ただし当遺構は建築基礎の役割を果たした溝状遺構で、基礎強化のために陶器や瓦片を多量に混入させてある。そして、その中の一部の遺物群がドゥオンサー窯址群の第1期から3期に同定可能で、それら以外の遺物は時間的に前後する遺物と考えら

れる。従ってR2資料からドゥオンサー1-3期資料を引き算した残りを、型式学的前後関係や共伴中国陶磁から考察すれば、ドゥオンサー1-3期に前後する無釉陶磁器群とその時間的範囲が明らかとなる。(ドゥオンサー1～3期については、Nishimura&Bùi M.T.2004参照)

まず、縄蓆文釜(NVT)のNVT1類から4類まではドゥオンサー1-3期に対応する。またNVT5類は、口縁先端内側にかえりのない、やや尖りだしたもので、ドゥオンサー1期以前のものと考ええる。

NVT7,8,10～13類(Fig.41-42参照)は頸部が丸みをもつもので、土器質のもので、これまでのサイン質のものとは全く異なる。この中でNVT8類あるいはNVT11類を、ドゥオンサー3期の後に接続するものと考え、その次がNVT10類、それからNVT12類、13類、さらにNVT7類へと変化していく図式を想定したい。NVT10類は量的にも多い。

内湾口縁鉢(AU)は、AU1-4類(Fig.45参照)が出土しているが、DX1-3期に位置づけられるのはAU3類である。AU1、2類は先行型式と判断され、口縁がさらに尖出して外面の段差がはっきりしないAU4類が、最も後出のものと判断される。

平鉢(CHD)もCHD2B、3、4、5類(Fig.45.46参照)が出土しているが、CHD2B、3、5類がDX1-3期に位置づけられ、CHD4類が、後出型式と判断される。

縄蓆文鉢(CHVT)は、CHVT1、2、3、5、6類(Fig.46参照)が出土している。その中で、CHVT1、3、5、6類が、DX1-3期並行と判断され、CHVT2類が後出型式と判断される。

鉢(CH)はCH2、3類が出土している。DX1-3期例と比較すると類似はしているが、同型式とは言えない。その後の型式変遷を考えれば、これらはDX1-3期より後出するものと判断される。

壺(VO)は、VO1～7類(Fig.49,50参照)が出土しているが、1、2類はDX1-3期以前のもので、3～6類はDX1-3期に位置づけられる。7類のみが後出する型式と判断される。

施釉陶器資料には、玉縁口縁を特徴とする白磁と陽刻の蓮弁文を外面に持つ白磁碗は太宰府編年のX-XI期(10世紀末から11世紀第3四半期)の標準輸入陶磁(山本2000)が含まれる。

越州窯系青磁碗には、A(Ⅱ類)、B1(I-2aウ)、B2(ⅢI-2B)、B3(I-2a)、C(I-2a)、D(Ⅲ-1a,Ⅲ-1b)、E1(1-2aエ)、E2類(対応分類なし)、E3類(対応分類なし)など当遺跡に出土した越州窯系青磁の大半の型式が出土しておる(括弧内の記号は太宰府編年での分類記号である)。この中でドゥオンサー1-3期に確認されるものは、A、B2、D類であり、太宰府編年では9世紀末から11世紀の間に納まっている。またE2類、E3類に関しては、対応する型式が太宰府分類に見あたらないが、E2類は玉縁上の口縁を有しており、共伴している玉縁口縁の白磁と時期的に近いものと考え、上述の越州窯系碗より遅い年代を想定したい。

さらに、広東・ヴェトナム系の点状釉剥ぎ碗に関してはドゥオンサー1-3期に共伴したものと、それ以前と考えられる型式がある。これらは全て、実芯高台あるいは実芯高台裏面に輪状の削り込みを入れたもので、広東省と北部ヴェトナム各窯で共通している。ところが若干例、胎質、釉質共にこれらと共通しながら、削り出しにより高台を作出しているものがある。また、体部の残存部には、団子状の土トチンをかませる釉剥ぎが観察され、その配置具合は通例の4、5カ所ではなく、越州窯の一部例のように、さらに数が多いことを予想させる。筆者は当例を広東・ヴェトナム系の点状釉剥ぎ碗の最終期のものと考ええる。

ドゥオンサー系の自然釉碗に関しては、A類がドゥオンサー窯1-3期に含まれている。B類はより、明確に高台部が作出され器形も越州窯系の碗形に近いものになっている。C類は体部下半が、若干膨らみ、器壁も全体に薄手になっている。また、やや細身の高台が作出され、灰色がかった透明釉が、全面に均質に及んでおり、自然釉でない可能性もある。B類に関しては、ドゥオンサー1-3期のものと並行にあたるかどうか判断は難しいが、C類に関しては明らかに、形態的・技術的違いから、より後出のものと考えたい。

以上、無釉陶器、白磁碗、越州窯系碗、広東・ヴェトナム系点状釉剥ぎ碗、ドゥオンサー窯系碗全てに関して、ドゥオンサー1-3期には存在せず、後出すると考えられる型式があることから、この遺溝の形成時期をドゥオンサー3期以降、実年代では11世紀の初頭前後に納まるものと判断する。

IV 12世紀基準資料

a ドゥオンサー 3地点資料

ドゥオンサー窯址第3地点での窯址資料である。

窯址を部分的に確認するために掘った時の資料で、器種としては四耳のある長胴壺と縄蓆文釜のみである。長胴壺の四耳はドゥオンサー1-3期と比べ、対称形ではなくなり、耳としての機能はしていないと考えられる。器形的に全体に長細くなり、口縁断面はやや外反している。縄蓆文釜はやや厚めの口縁で、縄蓆文自体が太く粗くなっている。器形的には、ドゥオンサー3期との直結する連続性を看取できないが、長胴壺の耳や器形的変化から、ドゥオンサー3期以降、つまり発掘資料の中ではドゥオンサー4期と位置づけ可能である（Nishimura & Bui M. T. 2004）。当初、この四耳壺や縄蓆文釜を11世紀のものと考えていたが、今回の資料の見直しで、BC分類のVO30類(Fig.38参照)に最も類似し、KLのVO10B類とVO12類(Fig.50参照)あるいはVA1類(Fig.47参照)の中間くらいに位置づけられる資料と考えた。理由は器面調整が丁寧なこと、耳が退化器官化していること、また、肩部の張りが減少し、器体が寸胴化していることなどである。形態的進化から12世紀後半あるいは13世紀後半まで下げて考えるようになった。

b バックロック遺跡群ズオンライゴアイ地点 (DLN) の最下層部資料

ズオンライゴアイ (Duong Lai Ngoai) 地点では、下層部 (第9-10レベル) で、ある程度のまとまりある陶磁器資料が出土している。特に、最下層部に相当する南土坑 (HPN) の場合、中国六朝並行期まで遡るであろう磚が出土した以外は、比較的年代のまとまりもよい。施釉陶器に関しては、12世紀か11世紀後半と比定可能な、高くて細い高台を貼り付けた単色透明釉碗2点 (西村・西野2006) が共伴している。無釉陶器では、四耳あるいは六耳長胴壺 (VO11類のDLN-62とDLN-61:Fig.37参照) と、軟質混砂陶の釜が確認されている。四耳あるいは六耳の長胴壺の口縁部は、外端が下方に尖出し、口縁器体がやや長めのものである。

釜の口縁部は外端が膨らむのが特徴で、長く外反するもの (NO4類のDLN-60, NO6類のDLN-106:Fig.21参照) と、短く外反するもの (DLN-107, NO9類のDLN-58:Fig.21) がある。胴部は、器高が低いものと高いものがあり、後者の場合、底部に粗い間隔で縄蓆文が施文されている。

またHPN以外の第10レベルでは、四耳壺のVO10類(DLN-118:Fig.37-2)、11類、釜のNO9、10、11類(Fig.21参照)が出土しており、若干の時間差を表している。施釉陶器の最晩期例は13世紀である。

さらに、第9レベルで出土しているものには、VO13類のDLN-101(Fig.37-13)例、VO18類のDLN-52(Fig.37-22)例やNO25類DLN-56(Fig.22-28)例のように、新しいタイプが出現している。

c キムラン・バイハムゾン遺跡 F54,F85遺溝資料

ハノイ市キムラン・バイハムゾン遺跡のF54とF85は構造的にも同じ方形炉遺溝である(Nishimura & Nishino 2004)。F85では同タイプの四耳壺2点(VO8B類のKL03-1:Fig.50-10, KL03-10)、縄蓆文釜(NVT15類のKL03-142と143:Fig.42-6)が共伴している。そしてF54では12世紀に比定される高足淡色透明釉碗2点と、無釉陶器類はF85と同類の縄蓆文釜(NVT15類)、無文釜(NO2:Fig.43-11参照)、短頸壺(VO21類のKL03-7:Fig.51-14)が共伴している。施釉陶器と短頸壺、無文釜などから、F54は時期的に少し遅れるかもしれない。また、両遺溝で李朝に典型的な瓦が共伴している。

d ヌイ・イエンヴェト採集資料 (Fig.52-1~5)

1996年12月にバックニン省のGia Lương (ザールオン) 県をサーベイした際にイエンヴェト山(Núi Yên Việt: NYV3)の麓で、地元住民が一括して掘り出した資料である(Nishimura & Phạm M.H. 1998)。出土状況から判断すれば墓である可能性が高い。

4個体分の施釉陶器と四耳を持つ長胴壺1点が確認された。施釉陶器は水注、器蓋があったと考えられる高足の鉢、短頸の四耳壺、蓮花と草葉を削り出しにより刻文した器蓋の中央部らしき破片などである。それぞれ透明のやや黄みがかかった貫入の多い釉がかかっていた。こうした各種の施釉陶器は文様、器形(特に高台部のつくり)から陳朝期を想定することはできず、12世紀あるいはそれ以前と考えている。長胴四耳壺は明瞭な輪積み痕を残すもので、四耳部はドゥオンサーの1-3期に比べ、対称形ではなくなり、器体本体との空間も縮まり、耳本体としての機能が果たせないような形態になっている。KL分類のVO10B類に最も類似する。同様の四耳壺を陶磁器埋葬した墓例がハータイ省のChùa Gio (チュアゾー)でも発掘されており、李朝期と判断されている(Bui M.T. 2003)。

V 13世紀基準資料

a コンチェー・コンティン遺跡資料 (Fig.52-6~10)

1999年11月に筆者らが、ナムディン省Mỹ Lộc (ミーロック) 県でコンチェー・コンティン窯址遺跡で調査した資料である。13世紀から15世紀までの遺物が認められる遺跡だが、99年調査のコンティン1地点は、13世紀に比定可能な施釉陶器の窯址遺跡で、確認のため窯址からの直接資料採取を行った。この時の施釉陶器資料については、その技術・分類上の位置づけが既に行われている(Nishino & Nishimura 2001, Nishino 2002, 西村、西野2006)。今回は、99年調査時の窯址からの直接採取資料で、13世紀施釉碗と共に採集された資料を中心に扱う。CT1L3-1 (Fig.52-6)は逆C字状の角張った口縁を持つ長胴鉢である。外面の口縁直下には、12世紀長胴形四耳壺に典型的な退化した耳が付けられており、長胴壺(VO)から長胴鉢(VA)への過渡的型式であることが理解できる。櫛歯状

工具による波状沈線と並行沈線が施文されている。BC分類のVO16類(Fig.37参照)に最も類似し、VA5類(Fig.30参照)にも類似する。CT1L3-2 (Fig.52-7) も、前例と似たような口縁形態を有しているが、形状がより寸詰まりとなり、口縁下半の器体内側への張り出しが小さくなっている。BC分類のVA5類(Fig.30参照)に同形態を見いだせる。CT1L3-3 (Fig.52-8) は平鉢で、口縁形態は、外側に伸び出す口縁上半と内側にややすぼまる口縁下半を特徴としている。体部に条痕状回転断続削り文が施されている。BC分類のCH6類、11類(Fig.34参照)に最も類似する。KL分類のCH6類、6B類にも近い。CT1L3-4 (Fig.52-9) は口縁下半がかなり内側にすぼまり、上半が再び外側に尖りだしたものである。BC分類のNO17類が最も形態的に類似している。CT1L3-5 (Fig.52-10) は鏡餅の形に近い短頸短銅壺で、口縁部が分厚く膨らみ、先端が外側にわずかに反り返ったものである。BC分類のVO25類(Fig.38参照)に最も近く、VO23類、24類(Fig.38参照)に、さらにはKL分類のVO14類(Fig.51参照)にも類似する。これにより、先行型式と判断されるBC分類のVO17類(Fig.37参照)が、13世紀以前に遡ることが理解できる。

コンチェー採集の資料も、同じく13世紀の施釉陶器資料群と共伴する無釉陶器資料で、先述のコンティン資料群とはほぼ同型式の桶、鉢などが含まれている。その中に、口縁が玉縁状に外側に膨らんだ釜MT-5 (Fig.52-15) はBC分類のNO15類(Fig.21参照)が最も近い形態である。口縁が大きく外反する釜MT-3 (Fig.52-13) はBC分類のNO9(Fig.21参照)に形態的に近いが、全く同じではない。

ちなみに、BC分類の釜NO15類のDLT-86(Fig.21-27)は、ズオンライチョンのH14土坑（他にもあり）から、12-13世紀の施釉陶器に共伴して出土している。

b キムラン・バイナムゾン遺跡 2号炉

キムラン・バイナムゾンの01年度調査2号炉（KL01-Lo2）は13世紀の施釉陶器が施釉陶器の最末期資料として共伴している。

無釉陶器では、KL分類の縄蓆文釜（NVT15類:Fig.42-5）、四耳壺（VO4類:Fig.50-3参照、VO9類:Fig.50-11参照）、蓋（NP2A類）が出土している。そのなかで、VO4類はドゥオンサー期のもものと判断されるが、VO9類（KL01-187,214）とNVT15類（KL01-10:Fig.42-5）はRanh2遺溝からは出土しておらず、2号炉遺溝の時期に最も近い遺物と判断される。特にKL01-10は、完形に近い形態で出土しており、使用後そのまま遺棄された可能性が高く、遺溝機能最終年代に最も近いと考える。VO9類は外反口縁の内側に段差を有し、四耳壺も非対称形化し、耳としての機能もほとんど果たさなくなっていたと考えられる。NVT15類は体部が楕円に近い形をしたもので、口縁が内側に折り込まれて段差を作っている。底部に粗い間隔の縄蓆文が施されている。F85とF54に共伴した同類のものとは、口縁内側の段差がより低位になり、鋭角な外反に変化していることから、口縁形態が異なっており、NVT15C、16、17C(Fig.42-8,9,13参照)などに接続する後出型式と判断する。KL01-Lo 2自身は、F85より、少し遅れる年代があてはまりそうで、つまり13世紀と考えてよいと推定する。

VI 14世紀基準資料

a バックック遺跡群ソム・ベング 1地点 R1資料とソム・ベング 2地点 R2資料

1,2地点と分けているが、実際は1m程度しか離れていない同じ敷地内の発掘で確認された、廃棄遺物群である。共伴施釉陶器の最新年代が、下層部が14世紀半ばまでに納まる。かなり多量の無釉陶器が共伴している。XBN1地点の細長い土坑（R1）に廃棄された遺物群は1層（R1-1）から9層（R1-9）にまで分層されているが、共伴施釉陶器の年代からそのうち9層から4層までが14世紀、3層から1層までが15世紀に廃棄されたと判断される。XBN2地点のL4層がやはりR1-4からR1-9までと同じ時期に納まる。

該当層位からの出土例で、前出のバックコック各遺溝出土例、コンチェー・コンティン例を差し引くと、以下のようなものが残る。桶はBC分類のVA1、2、6、9、13、15、19、20、23、24、25類（Fig.29-32参照）である。鉢はCH10、23、31類（Fig.34-36参照）、壺はVO19、22、29類（Fig.37-38参照）がある。釜は最もヴァリエーションが多く、NO18、20、23、24、26、27、28、35、36、38、40、42、44類（Fig.22-24参照）にのぼっている。ただし、NO42、44類はR1-4層で若干点のみが出土しているのみで、R1-3の遺物の取り残しの可能性もあり、他例は全てより上層での出土のため、この時期の遺物ではなく、上層部の時期の可能性もある。

b ナムディン省天長府遺跡群のバイハラン遺跡 （Fig.52-16～22）

当資料は、ナムディン省博物館（Nguyễn Q.H. et al.1996）が緊急調査した資料だが、船着き場のような低湿地から出土した遺物群で、年代的に非常にまとまりがよいことが指摘されていた。当遺跡の施釉陶器資料に関しては、西野（2001）が詳しく分析をしており、その年代幅は、若干の15世紀初頭の遺物を除いて、13世紀後半から14世紀半ばまでに納まると考えられる。BHL95-S1（Fig.52-16）はBC分類のVA14類（Fig.31）、BHL95-S2（Fig.52-17）がVA5類（Fig.30）に対応する。BHL95-H1-S6（Fig.52-20）は形態的にBC分類のCH32（Fig.36参照）に近く外面文様も共通している。内面に交叉沈線を施文し、すり鉢機能を付しているのはCH31と共通する。また、BHL95-H1-S7（Fig.52-21）はBC分類のVO27（Fig.38）に対応させられる。

c キムラン・バイハムゾン遺跡 01年度と 03年度調査 R1、03年度調査 H5資料

2001年の調査でR1という長い溝状遺溝を確認し、川の水 flow で破壊されかけている部分を発掘した。この溝に関してはその性格は悪天候下の発掘のため理解できなかったが、2003年の継続調査で完掘し、それは壁などの建築のための基礎（地業）であることが判明した。この遺溝の中には大量の陶磁器や瓦類が混入されてあった。砂利代わりに使ったものつであろう。また、同時に発掘したH5地点でも、土地の地盤造成のための盛り土が確認されたが、R1遺溝の遺物と接合する資料や同時期の陶磁器が大量に確認されたことから、両者の造成年代がほぼ同じと考えられる。すでに、R1資料に関しては2001年調査分を報告してあるが（Nishimura&Nishino 2003）、最も新しい遺物が14世紀の末に位置づけることが可能な遺物群である。

前出の11-13世紀初頭に位置づけられる遺溝から出土している型式類を除くと以下の型式が残る。縄文釜はKL分類のNVT8、9、10、11、14、16、17、17B、17C、18、19類（Fig.41-43参照）、無文釜はNO1、2B、5、6、7、9、10、10B、11、12、14、15、16B、17、21類（Fig.43-44参照）が出土し

ている。壺はVO8、10B、11、12、12C、13、13C、13D、14、16、24、25類(Fig.50-51参照)が出土している。鉢はCH1C、5、6、8、8B、10類(Fig.46-47参照)である。桶は、VA1、1B、1D、2、2B、2C、3、4、4B、5、5B類(Fig.48,49参照)が出土している。

VII 15世紀基準資料

a ニャーホー（胡朝）城採集資料 (Fig.52-23～26)

胡朝の創始者Hồ Quý Ly（胡季）が1398年に建設したNhà Hồ（胡朝）城（タインホア省Vĩnh Lộc: ヴィンロック県）は、陳朝滅亡（1400年）により都とされた。しかし、胡朝自身が明の侵略で滅ぼされ（1407年）、侵略した明も黎朝創始者Lê Lợi（レロイ）に撃退され（1427年）、都は再び昇竜（現ハノイ）に戻ったため、使用期間が非常に短い城郭遺跡である。筆者が行った二度のサーベイで採集した資料では、施釉陶器はわずかの16世紀資料を除き、全てが14世紀末から15世紀初頭に位置づけが可能である（Nishimura & Nishino 2003）。この遺物群中に確認された無釉陶器が、短頸長胴壺、桶、釜である。桶TH01-20 (Fig.52-25)、TH01-21 (Fig.52-26)の口縁形態は、外側に張り出す形態でBC分類のVA24例などと類似するが、より丸みを帯びている。むしろVA26、27類に対応するものと判断される。長胴短頸壺TH01-22 (Fig.52-24)も口縁の上端部の張り出しが、KL分類のVO26B類（KL03-69:Fig.51-23等）に比べ、若干変化している。釜の口縁、TH01-23 (Fig.52-23)はBC分類のNO46類(Fig.25参照)に同形態を見ることができる。

b バックコック遺跡ソムベング 1,2地点

ソムベング1地点のR1のレベル1から3までの資料とR2の資料、さらに、ソムベング2地点のL3層以上の資料は、施釉陶器資料の下限年代が15世紀である。

バックコック遺跡群ソム・ベング1地点(XBN1)のR1資料の3層から1層まで、R2資料、同じくソム・ベング2地点(XBN2)の上層部資料(2層、3層)とともに下層部の陳朝期あるいはそれ以前の陶磁器資料と15世紀の資料が混じって出土している。従って、陳朝期以前の資料を差し引けば15世紀の資料が浮かび上がる。具体的には、釜はNO43-47類(XBN1-398:Fig.24-28,XBN1-424Fig.24-33,XBN2-112:Fig.25-1,XBN2-117:Fig.25-13など)が、下層部と比べて新出型式である。桶はVA26～28類(XBN2-25;Fig.33-1,XBN2-24:Fig.33-2,XBN2-27:Fig.33-4)が、新出の型式である。

瓶(BI)は当遺溝の下層部や並行時期の各遺跡では全く出土していないので、15世紀以降（後黎朝成立以降の可能性あり）の新出器形と理解できる。当遺溝上層部で出土しているBI1～5類(XBN2-203:Fig.39-28,XBN1-201:Fig.40-1,XBN1-208:Fig.40-8,XBN2-100Fig.40-10,XBN2-97:ig.40-11)が15世紀のものと判断される。

c Hội An(ホイアン) 沖沈船資料 (Fig.53-9～10)

2000年に引き揚げられたホイアン沖沈船は輸向向けのヴェトナム陶磁を満載していた。積載品の殆どは青花などの施釉陶器であるが、無釉陶器も若干含まれている（Butterfields 2000: Fig.53-9,10）。積載品の年代は、船の沈没年代以上に下がることはなく、出土数に対してヴァリエーション的に限ら

れていることから、無釉陶器自体は容器として使われたと考えられる。長頸瓶、桶、釜が確認される。釜はBC分類のNO42類 (Fig.24参照)、長頸瓶は同じくBC分類のBI1類(Fig.39参照)に最も近い。この沈船の積載物年代は15世紀後半に位置づけるのが妥当であろう (西村・西野2006)。

d Ngói(ゴイ) 窯址遺跡 (Fig.53-1~2)

ゴイ窯址遺跡はハイズオン省ビンザン県Sat(サット)川沿いの窯址群の一つで、15世紀から16世紀にかけての施釉陶器生産遺跡である。1999年3月に当遺跡を試掘した際第3地点で、15世紀前半(おそらく第2四半期)の施釉陶器群(西村・西野2006)に無釉陶器(釜)が2点共伴した。TS3-L4-1 (Fig.53-1)はBC分類のNO46、47類(Fig.25参照)に、口縁形態が最も類似する。TS3-L4-2 (Fig.53-2)はBC分類のNO42類(Fig.24参照)に近く、KL分類のNO10(Fig.44参照)にも近い。

このBC分類NO42類(Fig.24参照)と類似型式の時期的位置づけは微妙なので、ここで整理をしておきたい。共伴事例として最も確実性の高いKL分類では、NO10類のように口縁先端部内面に若干の段差を生じているものが、年代下限が14世紀末であるR1、H5などから多く出土している。NO11類(Fig.44参照)も口縁先端が尖出しながらも、口縁内面に大きく段差をもつ型式だが、これもH5で出土している。また口縁内面に明確な段差はないものの、類似形態とできるNO12類もR1、H5に共伴している。

KL分類のNO10、12類(Fig.44参照)にほぼ対応するBC分類の38、40類(Fig.24参照)はXBN1のR1-4層以下、あるいはXBN2のL4層で出現しており、これらを14世紀に位置づけるのは問題ない。問題は、BC分類のNO42-44類(Fig.24)である。42類のなかに、KL分類のNO11類に類似した形態が存在する(XBN1-363:Fig.24-23, XBN1-405:Fig.24-26など)。また、ゴイ出土例のTS3-L4-2(Fig.53-2)例は、BC分類のなかに完全対応する形態は見つけれないが、敢えて最類似形態とするならNO42類となる。これはナムディン省とハイズオン省間の地域的違いにもよるかもしれない。また、前述したようにKL分類のNO10類と最も近いわけだが、口縁断面形態の先端部外縁や頸部内面などで、違いがあり、全く同型式とも言えない。キムラン・バイハムゾン遺跡では15世紀の資料が非常にわずかしき出土しておらず、TS3-L4-2例により近い型式や、15世紀に位置づけられるBC分類のNO46類(Fig.25)対応の型式が見られないのも納得ができる。またホイアン沈船でもBC分類のNO42類(Fig.24)相当、あるいはそれに近いものが出土している (Butterfields 2000: Fig.53-9)。

また、形態的進化の流れとしては、BC分類NO40類から、42類、さらに43類や44類、そして、後出するようなNO73-75類(Fig.27)へといった型式変遷を想定している。

従って、出土状況と形態変化の流れを考え合わせるならBC分類のNO40類、KL分類のNO10、11類が14世紀後半、BC分類の42類の一部が14世紀末、大半が15世紀、同じくNO43、44類が15世紀と判断しておきたい。

VIII 15世紀後半から16世紀基準資料

a チューダウ窯址資料 (Fig.53-3~6)

チューダウ窯址は15世紀から16世紀にかけて施釉陶器が生産された遺跡である。2002年調査時に、

第3坑の下層部から出土した釜CD02-H3L3C例 (Fig.53-3) やCD02H3L4例 (Fig.53-4) は、共伴施釉陶器から15世紀後半以降のものと判断される。前者はBC分類のNO44類(Fig.24) に最も近い。第1号窯から出土した桶CD02-Lo1 (Fig.53-5) 例も同様である。BC分類のVA29類(Fig.33) に最も類似する。CD02-TS1L2a (Fig.53-6) 例は上層部出土であるため、前出例より遅れると判断できる。BC分類のVA34類(Fig.33) 、KL分類のVA8B類(Fig.49) にも近いが、先端部断面外側の張り出し具合などに差があり、全く同時期とはできないと考えている。

IX 16世紀基準資料

a ナムディン市郊外 Chùa Đệ Tứ(チュウアデートゥー) 採集資料 (Fig.53-7~8)

1999年のナムディン市、ミーロック県サーベイの際、Đệ Tứ (デートゥー) 寺の敷地辺縁で、露頭していた建築遺構より採集した一括遺物。16世紀前半の青花陶器に3点の無釉陶器が共伴していた。無釉陶器は砂混じりの釜で、2種類の口縁形態が確認できた。CDT-ST1 (Fig.53-7) は、KL分類のNO15B類に類似する。BC分類のNO38にも類似するが、外反度合いなどが異なり、同時期とは判断しない。CDT-ST2 (Fig.53-8) はBC分類のNO50類に類似するし、KL分類のNO22類にも近い。

b バッコック遺跡群ソム B(XB) 地点の最下層部出土資料

ソムB地点の最下層第5層出土施釉陶器は16世紀と若干の14世紀のもので、釜3点、BC分類のNO74-76類 (XB-50,63,66;Fig.27-9,8,11) は、形態的にも、ホイアン沈線例につながる口縁形態をもつものと見られ、16世紀のものと判断される。

X 17世紀基準資料

a バッコック遺跡群ソム B(XB) 地点の下層部出土資料

ソムB地点の下層部出土資料もいくつかの編年基準を提供している。共伴施釉陶器から、第4-4層が17世紀、第4-3層までは17世紀後半から18世紀の文化層と判断され (Nishino et al. 2000b, 西村・西野 2006) 、共伴する無釉陶器の年代下限としてよい。L4-5、4-4層からは釜にはBC分類のNO59類のXB-84(Fig.26-15) 、NO60類のXB-86(Fig.26-17) 、NO81類のXB-80(Fig.27-20) 、XB-69(Fig.27-19) 、NO78類のXB-65(Fig.27-13) 、NO80類のXB-88(Fig.27-15) 、NO90類のXB-5(Fig.28-12) 、がある。有頸壺にはVO31類のXB-24(Fig.38-31) 、VO33類のXB-18(Fig.38-32) 、長頸瓶にはBI7類のXB-17(Fig.40-13) 、BI10類のXB-28(Fig.40-16) 、球形壺にはBI13類のXB-32(Fig.40-20) 、桶VA35類 (Fig.33-14) のXB-74が出土している。また、L4-3層からは、NO82類のXB-89(Fig.27-25) 、NO66類のXB-126(Fig.26-25) 、NO67類のXB-14(Fig.26-26) 、有頸壺BI9類のXB-111(Fig.40-15) 、球形壺BI12類のXB-53(Fig.40-18) が出土している。

b バッコック遺跡群のズオンライチョン (Dương Lai Trong) 地点 H11土坑出土資料

ズオンライチョン地点の下層部で確認された土坑は、瓦を意図的に配置し、その上に施釉陶器や無釉陶器を意図的に埋置していた遺構である。儀礼・祭祀的行為を行った遺溝と判断している。この中

に遺棄された施釉陶磁器群は、16世紀末から17世紀初頭と考えられるもので、無釉陶器には釜BC分類のNO51類(DLT-36,DLT-37:Fig.26-1,2)や桶のVA34類(DLT-2:Fig.33-12)、有頸球形壺BI15類(DLT-25:Fig.43-23)などが含まれている。

c キムラン・バイナム遺跡

キムラン・バイナム遺跡2001年度調査のH1坑と炉(Lo1)の資料は、施釉陶器の年代下限が17世紀後半で、無釉陶器もその年代枠に納まるであろう。それ以前の遺溝から出土している型式のものを除いて、遺溝共伴型式を以下列挙する。

長頸瓶はBI2類(KL01-228:Fig.47-15)、BI3(KL01-229:Fig.47-16)、桶はVA10類(KL01-1:Fig.49-11)、VA11(KL01-259:Fig.49-12参照)、釜はNO8類(KL01-158:Fig.44-4)、16類(KL01-320:Fig.47-15)、19類(KL01-160:Fig.47-19)、20類(KL01-318:Fig.44-20)などが挙げられる。

ところで、日本ではヴェトナム無釉陶器は大阪、堺、長崎で出土している時間的定点を与える資料となっているが、北部産のものは考古学的脈絡での出土例がまだない。

XI 18世紀

a バッコック遺跡群ズオンライチョン地点住居委床埋納陶器 (YB1とYB2)

確実な事例として、バッコック遺跡群のズオンライチョン地点(DLT)の住居床面下2カ所で出土した、地鎮のための埋納陶器群(YB1とYB2)を挙げることができる(西村他2000)。18世紀と判断可能な施釉陶器皿と共伴して、VO39類の無頸壺DLT-64(Fig.39-7)と有頸壺VO42類のDLT-65(Fig.39-10)が出土している。

b バッコック遺跡群ソム B(XB) 地点の第4-2層から3層

ソムB地点の第4-2層から第3層までは、共伴施釉陶器から18世紀が遺物年代の下限と考えられる。共伴する無釉陶器には、釜にはNO70類のXB-42(Fig.26-29)、NO89類のXB-48(Fig.28-11)、NO93類のXB-25(Fig.28-19)、NO95類のXB-46(Fig.28-24)、NO97類のXB-47(Fig.97-27)、NO98類のXB-85(Fig.28-29)、NO107類のXB-115(Fig.29-15)、NO109類のXB-122(Fig.29-18)、無頸壺VO35類のXB-19(Fig.39-3)、XB-60(Fig.39-2)、VO34類のXB-26(Fig.39-1)、有頸球形壺VO32類のXB-15(Fig.38-31)、有頸壺VO43類のXB-16(Fig.39-11)など、球形壺BI20類のXB-31(Fig.40-28)がある。

c ヱインフック省 Hương Canh(フオンカイン) 採集資料 (Fig.53-11~23)

ヱインフック省フオンカインは現在も無釉陶器の生産を行う有名な窯業集落である。1999年11月に当集落を訪れた際、集落南はずれのCau Lo(カウロー)川の脇で、以前窯があったと伝えられる古村地点で無釉陶器の灰原を確認し、施釉陶器と、当集落で生産されていたと思われる無釉陶器片を採集した。施釉陶器は瓦質白化粧碗で、18世紀のものと判断され、無釉陶器もその年代に近いものであろう。

CDLC-1 (Fig.53-11) は平鉢で、口縁断面はT字に近い形をしており、内側がやや厚みをもち、外端は尖出している。CDLC-3 (Fig.53-13) は平鉢と考えられ、外側に直角に張り出した口縁が特徴である。口縁先端わずかに上方に尖出している。両者とも他遺跡にはまだ類例を見いだしていない。CDLC-2 (Fig.53-12) は釜で、背の高い外湾する口縁を有す。これはBC分類のNO101類(Fig.28-34参照) が最類似例と考えられる。CDLC-5 (Fig.53-15) も釜で、口縁は外反し、頸部の内側が尖出しているのが特徴である。BC分類のNO104類(Fig.29参照) が最類似形態例であろう。CDLC-4 (Fig.53-14) は短銅桶で、口縁部が少し外側にめくり返されている。体部に、条痕状回転断続削り文が施文されている。CDLC-12 (Fig.53-22) は、短銅鉢あるいは瓶類の蓋と分類可能なものである。口縁にくびれが生じているのが特徴。口縁形態が、BC分類のVA36類(Fig.33参照) に類似する。CDLC-6 (Fig.53-16) は、桶で口縁部が、少しすぼまっている。口縁はわずかに厚みを増し、外側に段差が作出されている。体部中央に波状沈線文が施されている。口縁形態は、BC分類のVA37類に類似する。CDLC-8 (Fig.53-18) も桶と判断される。口縁は、先端が少し内反し、外側に段差を作るように口縁下端部が張り出しているのが特徴である。口縁部直下に波状沈線が施されている。この沈線文はBI16類のDLN-139(Fig.40-24) 例とよく類似する。口縁形態はBC分類のVA35(Fig.33) にやや類似するが同類とまではいえない。CDLC-13 (Fig.53-23) も桶である。口縁形態は、BC分類のVA36類(Fig.33) に類似する。CDLC-7 (Fig.53-17) は、瓶の頸部である。頸部の内側に成形時（おそらく接合か粘土紐の貼りつけ）の張り出しが残されているのが特徴である。櫛歯状工具による波状沈線と並行沈線が施されている。BC分類のBI16類のDLN-139(Fig.40-24) 例と文様が類似する。CDLC-9 (Fig.53-19) は瓶の頸部と考えられる。口縁部が少し外反している。条痕状回転断続削り文が体部下半に施されている。CDLC-10 (Fig.53-20) は、長頸壺で、口縁が丸く外反し、やや長めの頸部を有している。頸部直下に櫛歯状工具による並行沈線が施されている。CDLC-11 (Fig.53-21) は、蓋であるが、つまみ部が欠損している。

d バッコック遺跡群ソム Cサンカオ (Xóm C Sân Cao) 地点下層遺物群

1997年発掘のソムCサンカオ地点（西村他1998）では、施釉陶器には16世紀末の印花碗、18世紀の中国青花碗、17-18世紀のヴェトナム淡色透明釉碗などが共伴しており、堆積の最終年代が18世紀と考えられる。注目すべきは最下層部（L22-23）で、長頸壺BI18類のXC-4(Fig.40-26)、BI17類のXC-3(Fig.40-25)、桶VA37類のXC-1(Fig.33-16)、XC-2(Fig.33-17)、釜NO70類のXC-36、XC-35、XC-58、XC-59、XC-80(Fig.26,27)、高坏など9点が、ほぼ完形あるいは大きな破片として、集中出土している。これらは、当地を埋め立てる際に、非常に短期間に廃棄されたもので、一括性が高い遺物と考える。

また層位的にはL23-L22、L21-L20、L19-L15という3層に分層可能であるが、各層中の施釉陶器の年代分布は16世紀から18世紀までで、各層間の違いを示すには至っておらず、L23からL15までは、18世紀の盛り土層としてまとめて判断される。従って無釉陶器も18世紀を年代下限として、16から17世紀のものを含む可能性があるものとして考慮しなくてはならない。盛り土層からは、釜NO81類のXC-10(Fig.27-18)、NO82類のXC-8(Fig.27-24)、NO84類のXC-78(Fig.27-31) など、NO85類のXC-77(Fig.28-1)、NO91類のXC-49(Fig.28-14)、NO92類のXC-50(Fig.28-17)、NO94類のXC-43(Fig.28-21) など、NO100類のXC-53(Fig.28-33)、桶VA36類のXC-5(Fig.33-15) が出土している。桶

VA36類はフオンカイン採集資料にもある。このうち、NO81、82類(Fig.27) は、XBの17世紀相当層位からも出土しているので、それら以外を18世紀の可能性のあるものと判断しておく。

XII 19世紀と20世紀基準資料

a 研究の未発展

紀元2000年紀の編年の時期比定において、もつと細別が難しい時期である。

その理由は19世紀と20世紀の分別のための、時間軸上の示準資料が伴うまとまりある遺物群が少ないことである。そもそも当該期の施釉陶器の編年認識がきちんとできあがってないことも、大きくこの問題に影響している。従ってバックコック遺跡群出土資料から、前後の18世紀と近年20世紀末の現代の資料を差し引いた残りから編年を組み立てなくてはいけないのが現状である。

b バックコック遺跡群ズオンライゴアイ地点住居基礎内遺物群

バックコック遺跡群ズオンライゴアイ地点(DLN)の上層部で確認された建築基礎(DLN-TMN)である。当遺溝を建設時に、砂利代わりに混入されていた陶磁器群は、20世紀前半かそれ以前の資料を含むと判断される(西村他1998)。ただし、注意する必要があるのは、砂利代わりに集められたものであるから、14世紀の施釉碗が共伴していることからわかるように、かなり幅の広い時間幅を有していることである。釜にはNO71類のDLN-133(Fig.27-4)、NO83類のDLN-134(Fig.27-28)、NO97類のDLN-135(Fig.28-28)、NO102類のDLN-131(Fig.29-1)、DLN-115(Fig.29-5)、NO105類のDLN-132(Fig.29-1)が出土している。

無頸壺にはVO40類のDLN-130(Fig.39-8)、VO44類のDLN-127(Fig.39-12)、VO45類のDLN-129(Fig.39-13)、VO47類のDLN-137(Fig.39-15)、VO48類のDLN-122(Fig.39-16)、VO51類のDLN-136(Fig.39-19)、有頸壺にはVO52類のDLN-145(Fig.39-20)、VO53類のDLN-125(Fig.39-21)、長頸瓶BI23類のDLN-138(Fig.40-32)、BI24類のDLN-117(Fig.40-33)、球形壺BI16類のDLN-139(Fig.40-24)がある。桶にはVA41類のDLN-141(Fig.33-23)がある。BI24類は胎質や形態的特性がその他の無釉陶器類と全く異なり、中国製と考える。

NO97類のDLN-135(Fig.28-28)は、前述のXB18世紀相当層位で出土しているので除外する。

c バックコック遺跡群フーコック地点 1-2層出土遺物群

フーコック地点(PC)の上層部で確認された盛り土層(L1,CG1-4)に廃棄されていた陶磁器群である。聞き取りにより、1954年以前に住んでいた人の生活に使用されたものが、短期間に廃棄された結果と考えられことから、前述のズオンライゴアイ地点住居基礎内遺物群より、時間的にまとまりがよい。また、釜、無頸壺、桶といった普遍的器種以外に、臼、甑、水注のついた球形瓶など、新出の器種も多い。

釜にはNO102類のPC-1、PC-4、PC-37、PC-36(Fig.28,29)、NO105類のPC-34、PC-13、PC-38(Fig.28)、NO71類のPC-39(Fig.27-5)、NO72類のPC-77(Fig.27-6)がある。無頸壺にはVO37類の

PC-22(Fig.39-5) 、VO46類のPC-20(Fig.39-14) 、VO49類のPC-23(Fig.39-17) 、VO50類のPC-116(Fig.39-18) 、VO54類のPC-21(Fig.39-22) がある。桶にはVA40類のPC-78(Fig.33-21) 、VA41類のPC-76(Fig.33-22) 、VA38類のPC-75(Fig.33-19) がある。このうちNO71類、NO102類、NO105類、VA41類はズオンライゴアイ地点住居基礎内遺物群からも出土している。

XII 20世紀末の製品との比較

フーコック地点1-2層出土遺物群やズオンライゴアイ地点住居基礎内遺物群を中心とするバックコックの出土遺物には、北部ヴェトナムで20世紀末時点で生産されていたもので、形態的に継承しているものを挙げるができる。バックニン省フーラン生産品（西野2005、西野私信）に形態的に近いものに有頸壺VO53類(Fig.39) 、鉢CH33類(Fig.36) 、釜NO105類(Fig.39) があり、またフーラン製品の桶の口縁形態はVO44、46類(Fig.39) に近い。同じくバックニン省のトーハー窯（1984年まで生産）に類似するものとして、桶VA41類(Fig.33) 、ゲアン省生産品に類似する釜NO71類などがある(Fig.27) 。

G 編年案

各層・遺溝での型式別出土を表したのが、Table 3である。●は、バックコックとキムランの場合、その型式の出土を表しており、その他の遺跡例はバックコックとキムラン分類に最も近い型式である。○はその層・遺溝で出土しているが、それ以前の層・遺溝で出土していたり、型式の変遷から明らかに遺構形成期以前の時期と考えられるものである。▲は、類似するものの、相違点もある程度認められるものである。

この出土関係表と型式の変遷を鑑みて作成したのがFig.54～59の編年案である。

ただし、これらの編年案は厳密には、それぞれの器種単位の細かな変遷をたどれるようなものには至っていない場合も多い。なぜなら、各器種の時間単位（細かければ1世紀を3区分、粗ければ1世紀単位）において、そこに同定可能な器種羅列を基礎に、そこから形態変化の流れ上矛盾なきものを補完的に埋めたものであり、器種や時間単位によっては、まだまだ前後関係を考証できる資料が不足している場合が多いからである。

Table. 3-1 釜 (1)

| 層・遺構形成時期 | 層・遺構記号 | BC NO 1 | BC NO 2 | BC NO 3 | BC NO 4 | BC NO 5 | BC NO 6 | BC NO 7 | BC NO 8 | BC NO 9 | BC NO 10 | BC NO 11 | BC NO 12 | BC NO 13 | BC NO 14 | BC NO 15 | BC NO 16 | BC NO 17 | BC NO 18 | BC NO 19 | BC NO 20 | BC NO 21 | BC NO 22 | BC NO 23 | BC NO 24 | BC NO 25 | BC NO 26 | BC NO 27 | BC NO 28 | BC NO 29 | BC NO 30 |
|-------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 9末-10C | DX1-3 | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | ● | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | ● | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | ● | | ● | ● | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | | | | | | | ○ | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ● | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ● |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

●：バッコックとキムランの場合、その型式の出土を表す。その他の遺跡例はバッコックとキムランにもっとも近い型式である。

○：その層、遺構で出土しているが、それ以前の層や遺構で出土していたり、型式の変遷から明らかに以前の時期と考えられるもの。

▲：類似するものの、相違点もある程度認められるもの。

Table. 3-2 釜 (2)

| 層・遺構形成時期 | 層・遺構記号 | BC NO 31 | BC NO 32 | BC NO 33 | BC NO 34 | BC NO 35 | BC NO 36 | BC NO 37 | BC NO 38 | BC NO 39 | BC NO 40 | BC NO 41 | BC NO 42 | BC NO 43 | BC NO 44 | BC NO 45 | BC NO 46 | BC NO 47 | BC NO 48 | BC NO 49 | BC NO 50 | BC NO 51 | BC NO 52 | BC NO 53 | BC NO 54 | BC NO 55 | BC NO 56 | BC NO 57 | BC NO 58 | BC NO 59 | BC NO 60 | |
|-------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|--|
| 9C末-10C | DX1-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1 + R2下 | ● | | | | ● | ● | | ● | ● | | ● | ● | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1 + R2上 | | ● | ○ | ○ | ○ | ● | | | ○ | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | | | | | | | ● | ● | ● | | ● | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | ● | | | | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | ▲ | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | ● | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

Table. 3-3 釜 (3)

| 層・遺構形成時期 | 層・遺構記号 | BC NO 61 | BC NO 62 | BC NO 63 | BC NO 64 | BC NO 65 | BC NO 66 | BC NO 67 | BC NO 68 | BC NO 69 | BC NO 70 | BC NO 71 | BC NO 72 | BC NO 73 | BC NO 74 | BC NO 75 | BC NO 76 | BC NO 77 | BC NO 78 | BC NO 79 | BC NO 80 | BC NO 81 | BC NO 82 | BC NO 83 | BC NO 84 | BC NO 85 | BC NO 86 | BC NO 87 | BC NO 88 | BC NO 89 | BC NO 90 |
|-------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 9C末-10C | DX1-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | | | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | ● | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | | ● | ● | | | | | | | | | ● |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | ● | ● | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | | | | | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | ▲ | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

Table. 3-4 釜 (4)

| 層・遺構形成時期 | 層・遺構記号 | BC NO 91 | BC NO 92 | BC NO 93 | BC NO 94 | BC NO 95 | BC NO 96 | BC NO 97 | BC NO 98 | BC NO 99 | BC NO 100 | BC NO 101 | BC NO 102 | BC NO 103 | BC NO 104 | BC NO 105 | BC NO 106 | BC NO 107 | BC NO 108 | BC NO 109 | KL NVT 1 | KL NVT 2 | KL NVT 3 | KL NVT 4 | KL NVT 5 | KL NVT 6 | KL NVT 7 | KL NVT 8 | KL NVT 8B | |
|-------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|--|
| 9C末-10C | DX1-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | ● | ● | ● | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ● | ● | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | ○ | | | | ● | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | ● | | ● | | ● | ● | | | | | | | | | | ● | | ● | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | ● | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | ● | ● | | ● | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | ○ | | | | | ● | | | ● | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | | | | | ● | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | | | ▲ | | | | | | | | | | | | | | | |

Table 3-5 釜 (5)

| 層・遺溝形成時期 | 層・遺溝記号 | KL NVT 9 | KL NVT 10 | KL NVT 11 | KL NVT 12 | KL NVT 13 | KL NVT 14 | KL NVT 15 | KL NVT 15B | KL NVT 15C | KL NVT 16 | KL NVT 17 | KL NVT 17B | KL NVT 17C | KL NVT 18 | KL NVT 19 | KL NO 1 | KL NO 2 | KL NO 2B | KL NO 3 | KL NO 4 | KL NO 5 | KL NO 6 | KL NO 6B | KL NO 7 | KL NO 8 | KL NO 9 | KL NO 10 | KL NO 10B |
|-------------|---------------|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|------------------|------------------|-----------------|-----------------|------------------|------------------|-----------------|-----------------|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|---------------|----------------|-----------------|
| 9C末-10C | DX1-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | ● | ● | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | ● | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1 + R2 下 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | ● | ● | ● | | | ● | | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ○ | ● | | | ● | ● | | ● | | ● | ● | ● |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1 + R2 上 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | | | | ○ | ○ | | | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ● | ○ | ○ | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

Table. 3-6 釜 (6)

| 層・遺溝形成時期 | 層・遺溝記号 | KL NO 11 | KL NO 12 | KL NO 13 | KL NO 14 | KL NO 15 | KL NO 15B | KL NO 16 | KL NO 16B | KL NO 17 | KL NO 18 | KL NO 19 | KL NO 20 | KL NO 21 | KL NO 22 |
|-------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|----------------|-----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 9C末-10C | DX1-3 | | | | | | | | | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | | | | | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | ● | ● | | ● | ● | | | ● | ● | | | | ● | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | ● | | | | | | | | ● |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ● | | | | ● | ● | | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | | | |

Table. 3-7 桶 (1)

| 層・遺溝形成時期 | 層・遺溝記号 | BC VA 1 | BC VA 2 | BC VA 3 | BC VA 4 | BC VA 5 | BC VA 6 | BC VA 7 | BC VA 8 | BC VA 9 | BC VA 10 | BC VA 11 | BC VA 12 | BC VA 13 | BC VA 14 | BC VA 15 | BC VA 16 | BC VA 17 | BC VA 18 | BC VA 19 | BC VA 20 | BC VA 21 | BC VA 22 | BC VA 23 | BC VA 24 | BC VA 25 | BC VA 26 | BC VA 27 | BC VA 28 | BC VA 29 | BC VA 30 |
|-------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 9末-10C | DX1-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | ● | ● | | | ○ | ● | | ● | ● | | | ● | | ● | | | ● | ● | ● | | | ● | ● | ● | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | ● | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ● | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ● | ● | ● | ● | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

- ：バッコックとキムランの場合、その型式の出土を表す。その他の遺跡例はバッコックとキムランにもっとも近い型式である。
○：その層、遺構で出土しているが、それ以前の層や遺構で出土していたり、型式的変遷から明らかに以前の時期と考えられるもの。
▲：類似するものの、相違点もある程度認められるもの。

Table. 3-8 桶 (2)

| 層・遺構形成時期 | 層・遺構記号 | BC VA 31 | BC VA 32 | BC VA 33 | BC VA 34 | BC VA 35 | BC VA 36 | BC VA 37 | BC VA 38 | BC VA 39 | BC VA 40 | BC VA 41 | KL VA 1 | KL VA 1B | KL VA 1C | KL VA 1D | KL VA 2 | KL VA 2B | KL VA 2C | KL VA 2D | KL VA 3 | KL VA 3B | KL VA 4 | KL VA 4B | KL VA 5 | KL VA 5B | KL VA 6 | KL VA 7 | KL VA 8 | KL VA 8B | KL VA 8C |
|-------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|----------------|----------------|----------------|---------------|----------------|----------------|----------------|---------------|----------------|---------------|----------------|---------------|----------------|---------------|---------------|---------------|----------------|----------------|
| 9末-10C | DX1-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | ▲ | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | | | | | | | | | ○ | ● | | ● | ● | ● | ● | | ● | | ● | ● | ● | ● | | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | ▲ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ▲ |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | | | | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | | | | | ○ | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | ● | | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | ▲ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

Table. 3-9 桶 (3)

| 層・遺溝形成時期 | 層・遺溝記号 | KL VA 9 | KL VA 9B | KL VA 9C | KL VA 10 | KL VA 11 |
|-------------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 9末-10C | DX1-3 | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | ○ | | | ● | ● |
| 18C | DLT-YB | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | |

Table.3-10 壺 (1)

| 層・遺構形成時期 | 層・遺構記号 | BC VO 1 | BC VO 2 | BC VO 3 | BC VO 4 | BC VO 5 | BC VO 6 | BC VO 7 | BC VO 8 | BC VO 9 | BC VO 10 | BC VO 11 | BC VO 12 | BC VO 13 | BC VO 14 | BC VO 15 | BC VO 16 | BC VO 17 | BC VO 18 | BC VO 19 | BC VO 20 | BC VO 21 | BC VO 22 | BC VO 23 | BC VO 24 | BC VO 25 | BC VO 26 | BC VO 27 | BC VO 28 | BC VO 29 | BC VO 30 |
|-------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 9C末-10C | DX1-3 | | | ● | ● | ● | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | ● | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | ▲ | ▲ | ● | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | | | | ○ | | | ○ | | | ○ | | ○ | ● | ● | ○ |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ▲ | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

●：パッコックとキムランの場合、その型式の出土を表す。その他の遺跡例はパッコックとキムランにもっとも近い型式である。

○：その層、遺構で出土しているが、それ以前の層や遺構で出土していたり、型式的変遷から明らかに以前の時期と考えられるもの。

▲：類似するものの、相違点もある程度認められるもの。

Table. 3-11 壺 (2)

| 層・遺溝形成時期 | 層・遺溝記号 | BC VO 31 | BC VO 32 | BC VO 33 | BC VO 34 | BC VO 35 | BC VO 36 | BC VO 37 | BC VO 38 | BC VO 39 | BC VO 40 | BC VO 41 | BC VO 42 | BC VO 43 | BC VO 44 | BC VO 45 | BC VO 46 | BC VO 47 | BC VO 48 | BC VO 49 | BC VO 50 | BC VO 51 | BC VO 52 | BC VO 53 | BC VO 54 | BC VO 55 | BC VO 56 | KL VO 1 | KL VO 1B | KL VO 2 |
|-------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|----------------|---------------|
| 9C末-10C | DX1-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1 + R2下 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1 + R2上 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | ● | ● | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | ● | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | ● | ● | ● | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | ● | | | | | ● | ● | | ● | ● | | | ● | ● | ● | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | ● | | | | | | | | ● | | | ● | ● | | | | | | ● | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | | ▲ | ▲ | | | | | | | | ▲ | | | | | | | |

Table. 3-12 壺 (3)

| 層・遺溝形成時期 | 層・遺溝記号 | KL VO 2B | KL VO 3 | KL VO 4 | KL VO 5 | KL VO 6 | KL VO 7 | KL VO 8 | KL VO 8B | KL VO 9 | KL VO 10 | KL VO 10B | KL VO 11 | KL VO 12 | KL VO 12B | KL VO 12C | KL VO 12D | KL VO 12E | KL VO 13 | KL VO 13B | KL VO 13C | KL VO 13D | KL VO 14 | KL VO 15 | KL VO 16 | KL VO 17 | KL VO 18 | KL VO 19 | KL VO 20 | KL VO 21 |
|-------------|---------------|----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|---------------|----------------|-----------------|----------------|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 9C末-10C | DX1-3 | | ● | ● | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ▲ | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | ○ | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ● | ● | ● | | | ● | | ● | ● | ● | ○ | | ● | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

Table. 3-13 壺 (4)

| 層・遺溝形成時期 | 層・遺溝記号 | KL VO 22 | KL VO 23 | KL VO 24 | KL VO 25 | KL VO 26 | KL VO 26B |
|-------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|
| 9C末-10C | DX1-3 | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | ● | ● | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | ● |
| 15C | XBN-R1+R2上 | | | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | |

Table. 3-14 瓶 (1)

| 層・遺構形成時期 | 層・遺構記号 | BC BI 1 | BC BI 2 | BC BI 3 | BC BI 4 | BC BI 5 | BC BI 6 | BC BI 7 | BC BI 8 | BC BI 9 | BC BI 10 | BC BI 11 | BC BI 12 | BC BI 13 | BC BI 14 | BC BI 15 | BC BI 16 | BC BI 17 | BC BI 18 | BC BI 19 | BC BI 20 | BC BI 21 | BC BI 22 | BC BI 23 | BC BI 24 | BC BI 25 | BC BI 26 | BC BI 27 | BC BI 28 | KL BI 1 | KL BI 2 |
|-------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|---------------|
| 9末-10C | DX1-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | ● | ● | ● | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | ● | | | ● | | ● | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | ● | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | ● | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | ● | ● | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

●：パッコックとキムランの場合、その型式の出土を表す。その他の遺跡例はパッコックとキムランにもっとも近い型式である。

○：その層、遺構で出土しているが、それ以前の層や遺構で出土していたり、型式的変遷から明らかに以前の時期と考えられるもの。

▲：類似するものの、相違点もある程度認められるもの。

Table.3-15 瓶 (2)

| 層・遺構形成時期 | 層・遺構記号 | KL BI 3 | KL BI 4 | KL BI 5 | KL BI 6 |
|-------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 9末-10C | DX1-3 | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | ● | | | |
| 18C | DLT-YB | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | |
| 18C | HCLC | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | |

Table. 3-16 鉢 (1)

| 層・遺溝形成時期 | 層・遺溝記号 | BC CH 1 | BC CH 2 | BC CH 3 | BC CH 4 | BC CH 5 | BC CH 6 | BC CH 7 | BC CH 8 | BC CH 9 | BC CH 10 | BC CH 11 | BC CH 12 | BC CH 13 | BC CH 14 | BC CH 15 | BC CH 16 | BC CH 17 | BC CH 18 | BC CH 19 | BC CH 20 | BC CH 21 | BC CH 22 | BC CH 23 | BC CH 24 | BC CH 25 | BC CH 26 | BC CH 27 | BC CH 28 | BC CH 29 | BC CH 30 |
|-------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 9末-10C | DX1-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | ● | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | ○ | | | ○ | | | | | ● | ○ | | | | | | | | | | | ● | | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | | ● | ● | ● | ● | | ● | | | | ● | ● | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

- ：バッコックとキムランの場合、その型式の出土を表す。その他の遺跡例はバッコックとキムランにもっとも近い型式である。
- ：その層、遺構で出土しているが、それ以前の層や遺構で出土していたり、型式的変遷から明らかに以前の時期と考えられるもの。
- ▲：類似するものの、相違点もある程度認められるもの。

Table 3-17 鉢 (2)

| 層・遺溝形成時期 | 層・遺溝記号 | BC CH 31 | BC CH 32 | BC CH 33 | BC CH 34 | BC CHD 1 | BC CHD 2 | BC CHD 3 | BC CHD 4 | KL CH 1 | KL CH 1B | KL CH 1C | KL CH 2 | KL CH 3 | KL CH 4 | KL CH 5 | KL CH 6 | KL CH 6B | KL CH 7 | KL CH 8 | KL CH 8B | KL CH 9 | KL CH 10 | KL CH 11 | KL CH 12 | KL CH VT 1 | KL CH VT 2 | KL CH VT 3 | KL CH VT 4 | KL CH VT 5 |
|-------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|----------------|----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|----------------|---------------|----------------|----------------|----------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 9末-10C | DX1-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | | ● | | ● |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ● | ○ | | ○ |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | | | ● | ● | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | ● | | | | | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | ▲ | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | | | | | | | ● | | | | | ● | ● | | | | ● | ● | | ● | | | | | | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | | ○ | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | ● | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | ▲ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

Table. 3-18 鉢 (3)

| 層・遺構形成時期 | 層・遺構記号 | KL CH VT 6 | KL CH VT 7 | KL CH VT 8 | KL CH D 1 | KL CH D 2 | KL CH D 2B | KL CH D 2C | KL CH D 3 | KL CH D 3B | KL CH D 4 | KL CH D 4B | KL CH D 5 | KL CH D 6 | KL CH D 7 | KL AU 1 | KL AU 2 | KL AU 3 | KL AU 3B | KL AU 4 | KL AU 5 |
|-------------|---------------|---------------------|---------------------|---------------------|--------------------|--------------------|---------------------|---------------------|--------------------|---------------------|--------------------|---------------------|--------------------|--------------------|--------------------|---------------|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|
| 9末-10C | DX1-3 | ● | | | | | | | | | | | | | | | | ● | ● | | |
| 10C末・11C初 | KL-R2 | ○ | | | | | ○ | ○ | ● | | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | | ● | |
| 11C後半・12C | BC-DLN-L10HPN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C前半 | BC-DLN-L10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12世紀 | NYV | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C後半・13C前半 | DX4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C | KL-F54 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | CCh/CTh | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C | DLT-H14 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 12C・13C | KL-Lo2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C後半 | XBN-R1+R2下 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13C後半-14C前半 | BHL | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14C末 | KL-R1+H5 | | | | ○ | | ○ | ○ | | | | | ○ | ● | | ○ | ○ | ○ | | ○ | |
| 14C末-15C初 | TNH | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C | XBN-R1+R2上 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C前半 | NG-TS3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C後半 | TDHA | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 15C-16C | CD02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C前半 | CDT | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16C後半 | XB-L5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C | XB-L4-5-L4-4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半-18C | XB-L4-3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C初 | DLT-H11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 17C後半 | KL-H1+Lo1 | | | | | | | | | | | | ○ | ● | | | | ○ | | ○ | |
| 18C | DLT-YB | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XB-XBL4-2-L3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | HCLC | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-cum | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 18C | XCSC-L15-L23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | DLN-TMN | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C前半 | PC-L1+L2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20C末 | 20世紀末製品 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

H 新認識

I 釜

釜はその多くの外面などにすずが付着しており、炊飯などの煮炊きの主要器種であったと考えられる。口縁を中心とした細部での時間軸上の変化は、今回の編年作業である程度明らかにできたが、その編年を通じて理解できることは、口縁が外反し、胴部が丸みを帯びつつ膨らむ基本形は変化していない。このことは、紀元前2000年紀のみならず先史時代（後期新石器時代あるいは金属器時代以降）から、20世紀までを通じて指摘できることである。

縄蓆文釜は先史時代から連綿と続いてきた長い伝統の器種であるが、それも14世紀までには途絶えるようだ。これは単に縄蓆文で地紋を装飾する伝統が途絶えるばかりではなく、叩き成形の土器・陶器製作伝統が途絶えることを意味しているようだ。

また、16世紀ころから、口径部幅が胴部幅に対して相対的に小さく、背の低い薄手で土器質の釜が出現する。これは現在までに続いている器種で、無釉硬質陶（Sành）の伝統とはまた違ったもので、現在のタインホアやゲアン省の製作事例から理解するなら、別所で製作された全く異なる土器製作伝統と考えて良い。器形的違いも明らかであることから、機能も違うと考えられる。

II 桶

桶形容器は四耳壺や六耳壺から変形して、13世紀にはその寸胴器形が成立し、現在まで続いている器形である。

また、壺の器形変化と桶の出現がおきる13世紀とそれ以前においては、器面の処理方法が異なっている。その一つは条痕状回転断続削り文の出現である。当方法はヴィンフック省フオンカイン窯において筆者が実見した方法だが、竹などの空芯の材料の一長辺をそぎ落とし、鋭い刃部を作出する。そして、対象とする器体をろくろに載せて、回転させながら、施文具の筒状工具を回転しているものの器面を削るようにあてる。従って、器体の表面がわずかに波打つような縦方向の文様が連続して施されることになる。この方法自体ろくろの回転を利用しないと実現できない方法だが、これ以外にも、12世紀から13世紀にかけて、多くの事例において、器体の表裏面の仕上げ程度が異なっていることが指摘できる。つまり12世紀までのものは、粘土ひもの積み上げ痕を明らかに残すものが多く、表裏面の仕上げも、凹凸が多く、平らではない。それが、13世紀以降はほとんど観察されなくなるのである。これもろくろ回転を利用した成形・調整法が13世紀以降定着したことによるものだろう。特に、器形全体をろくろ成形（水引き整形）で行っている可能性が高く、それ以前の段階とは大きな技術的違いである。

III 壺

11-12世紀に位置づけた長胴の四耳壺類が、機能退化した耳部がなくなり、独立した頸部をもち、さらに膨らみのある胴部をもつようになるのが13世紀と考えられる。これは前述した四耳壺が桶に器形変化する過程と並行しておきた現象であろう。つまり、12世紀から13世紀にかけて器種分化が生じ

ている。また、壺の器形変化にあたっては、前述したように、ろくろ成形の汎用が大きく影響していると判断される。

17世紀あるいは18世紀までには、頸部に若干のくびれを残し、胴部が膨らんだ無頸壺が出現する。この器種には、器高が高いものと相対的に低いものがあるようで、前者は大型で甕ともよべるものである。また、頸部が高く、かつくびれた長頸壺も17世紀までには出現している。17世紀あたりに再び、器種分化あるいは器種の増加があったことが読みとれる。これは施釉陶器が17世紀頃に、輸入品に押されて低品質化し、単純化していく現象（西村・西野2006）と表裏一体の現象かもしれない。

IV 長頸瓶

壺の頸部が長大化して、器形全体が細長になり、長頸瓶化するのが15世紀である。当分類案では18世紀まで存在し、さらに、器種は頸部と胴部の境が不明瞭になりつつも、フオンカインなどで、生産が続いていた可能性がある。

V 鉢

鉢も口縁の変化が著しいが、口径部が開放的で、下方に向かって器体がすぼまる基本形態は変わっていない。明確な時期比定は難しいが、15世紀には消滅し、19-20世紀に再び出現した可能性が高い。これは15世紀以降、施釉陶器の鉢が活発に生産され、やがてPhù Lãng（フーラン）製などの安価な施釉鉢が市場に普及し、無釉陶器の鉢への需要が無くなったことなどを意味しているようだ。ただし18世紀と考えられるフオンカイン窯一括採集品には鉢が含まれており、フーラン製品が出回らないところで、無釉陶器製のものが作り続けられた可能性もある。

VI 生産構造

施釉陶器の編年議論で李朝とそれ以前では、大きく異なることを述べたが（西村・西野2006）、無釉陶器に関しては、器形上の変化は認められるものの、製作技術面においては、それほど大きな格差はない。また、陳朝から胡朝・黎朝にかけての施釉陶器の製作技術変化にも大きなものがあるが、無釉陶器に関しては器種の減少等があるものの、製作技術には大きな変化はない。

このことは施釉陶器と無釉陶器が別所・別体系のもとで生産されたことを傍証するものだろう。王朝権力が生産に大きく関与していることがあった施釉陶器の場合と違い、無釉陶器は日常の生活品として、権力の関与に関係なく、各地で生産されたことを意味している。

さらに、施釉陶器が単純化し、無釉陶器が器種増加する17世紀あるいはそれ以降というものは、ヴェトナム陶磁のみで考えれば、低品質、低価格の陶磁器生産に力を注ぐようになったと考えられ、経済の内旋的状況を想定しやすいが、輸入品である中国陶磁や日本陶磁を高級品として捉えれば、陶磁器の品質が階層化し、器種分化や製品の多様化も進んだとも考えられよう。さすれば、そこに経済生活の発展や多様化を見いだすことも可能になる。

VII 金属器との関係

釜にはある時期から明らかに金属器が出現しているはずだ。なぜなら現在伝世する100-200年程度前の青銅器資料には腹部が丸まった、あるいは折腹形のややずんぐりした釜が見られる。本分類体系でもN065、66、67、70、71類などにその類似形を見ることができる。ただし、この問題は今後具体的比較を通じての言明を目指したい。また、釜以外には具体的金属器例と比較できる資料が見あたらないのも書きとめておきたい。